明日に生きる

―作文コンクール入選作品集―

第29号

平成30年度

東京都産業教育振興会

明日に生きる

第二十九号

―作文コンクール入選作品集―

明日に生きる　第二十九号　―　作文コンクール入選作品集　―　目　次

講　評

作文選考を通じて　中学校の部　選考委員長（墨田区立竪川中学校長）　織部明広　1
作文選考を通して　高等学校・専修学校の部　選考委員長（東京都立杉並工業高等学校長）　高幹明　2
表彰式の記念写真

中学校の部

				ページ
最優秀賞	夢の見つけ方	大田区立大森第一中学校	二年　横尾祐乃	5
優秀賞	ものづくりとは	新宿区立西早稲田中学校	三年　飯塚奈津子	6
優秀賞	広島から学ぶ	大田区立大森第六中学校	三年　後藤健介	8
優秀賞	私とものづくり	東京都立桜修館中等教育学校	二年　堀美津季	10
佳作	将来の夢	愛国中学校	三年　齋藤絵舞	11
佳作	将来の夢	愛国中学校	三年　齋藤唯舞	12
佳作	将来の夢	愛国中学校	三年　三橋りお	14
佳作	一枚ののこぎりの刃	新宿区立西早稲田中学校	三年　宮内桜	15
佳作	職場体験から学んだこと	文京区立第九中学校	三年　安達公香	17
佳作	職場体験を通して	墨田区立本所中学校	二年　平川菜子	18
佳作	人のために	墨田区立吾嬬立花中学校	三年　大橋悠生	20
佳作	今の私にできること	墨田区立吾嬬立花中学校	三年　大津山祥	21
佳作	頑張ってこそ得られるもの	墨田区立寺島中学校	三年　平山萌歌	23
佳作	私とボランティア	大田区立大森第六中学校	三年　大沼実那子	24

佳作	Creation	大田区立大森第六中学校	一年	糸井主歩	26
佳作	形にならない「モノ」	北区立稲付中学校	三年	伊藤銀登	27
佳作	ボランティア活動の大切さ	葛飾区立四ツ木中学校	三年	笹木雛夏	29
佳作	男女の垣根を越えて	葛飾区立四ツ木中学校	三年	山口竜平	30
佳作	私とものづくり	江戸川区立松江第五中学校	三年	岩楯愛菜	32
佳作	ものづくりと夢	江戸川区立松江第五中学校	三年	髙畠雅裕	33
佳作	ちいさな先生	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	牛島栞那	34
佳作	一つ一つを大切に	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	日野希美	35

高等学校の部

					ページ
最優秀賞	誇りをもって	東京都立大島高等学校	三年	島村杏樹	37
優秀賞	コミュニケーションの大切さ	愛国高等学校	三年	佐藤未歩	39
優秀賞	樹木医を目指して	東京都立農芸高等学校	二年	大野千星織	40
優秀賞	東京しゃもから教わったこと	東京都立瑞穂農芸高等学校	三年	木村実佳子	42
佳作	未来へ導く仕事	愛国高等学校	三年	平野郁美	44
佳作	簿記と将来	愛国高等学校	三年	田中栞里	46
佳作	私の進む道	愛国高等学校	二年	渡部エマ	48
佳作	食べることは全ての人間に与えられた財産	蒲田女子高等学校	三年	池田彩乃	50
佳作	輝くmedical technologist	日本工業大学駒場高等学校	二年	髙橋桃葉	51
佳作	ものづくりを通して学んだこと	日本工業大学駒場高等学校	二年	堀内実柚	52
佳作	私の農業	東京都立農業高等学校	二年	吉田凪沙	54
佳作	伸びきった鼻	東京都立農業高等学校	二年	木村桃	55

佳作	課題研究で得たこと	東京都立農産高等学校	三年	金子優希	57
佳作	自分で考え、行動すること	東京都立農産高等学校	三年	角川美咲	58
佳作	食品添加物	東京都立農産高等学校	三年	松本遥花	60
佳作	おいしい野菜を食べて考えたこと	東京都立農産高等学校	一年	花輪隼聖	61
佳作	農業を職業にするために	東京都立農産高等学校	一年	神保光咲子	63
佳作	将来の夢	東京都立瑞穂農芸高等学校	一年	大塚涼楓	65
佳作	ブバルディアを通して気づいたこと	東京都立大島高等学校	三年	向山唯斗	67
佳作	私の進路、将来の夢	東京都立忍岡高等学校	三年	大川里穂	69
佳作	必要のないものの豊かさ	東京都立忍岡高等学校	三年	髙橋瑞季	70
佳作	私を成長させる言葉	東京都立野津田高等学校	二年	白鳥稀凜	72

専修学校の部

					ページ
最優秀賞	授業で学んだことと心構え	中央工学校	一年	飯田大貴	74
優秀賞	憧れから、夢へ。	青山製図専門学校	一年	野原るりか	75
応募校等一覧表					77
応募数の推移					78
テーマ別応募数					79
作文選考委員名簿					81
あとがき					82

講評

作文選考を通して

中学校の部　選考委員長
織部明広

今年度は、22校の152編の応募がありました。ただ、一つの学校からの事務局への応募することのできる数は、10編までとなっています。そのため、152編の応募数を超える応募があり、各学校の内部選考で10編に絞られたと思います。一次審査、二次審査を経て22編が入選し、最優秀賞1編、優秀賞3編、佳作18編を選考いたしました。

今年度の作文の内容では、昨年度に引き続き職場体験学習から、働くことの大切さや喜び、大変さを体験したことで、将来の目標や夢に向って、今取り組むべきことが分かったなどの作文が多数ありました。体験に基づいて、生徒達が、これからどのようにしていったら良いのか、自分と向き合う時間を得たことが、それぞれの作文から読み取ることができました。

今回、最優秀賞を受賞した横尾祐乃さんの「夢の見つけ方」では、『今は将来の夢はない』との書き出しから、理容室の職場体験を通して、『オーナーの笑顔を絶やさない。笑顔でお客さんに接する。それは、理容師の仕事が好きで、誇りをもっているから』と表現している。さらに、『常に感謝の気持ちをもって人と接していから』と述べてある。職場体験後に、『将来就いた仕事が好きになり、仕事に誇をもつことが大切だ』との考えに気づいたと表現している。

優秀賞の飯塚奈津子さんの「ものづくりとは」では、一年の技術の授業で制作したコーナーラックが私の宝物であると表現し、「ものづくりとは」、『人生を豊かにし、人を成長させる』と表現している。

優秀賞の後藤健介君の「広島から学ぶ」では、広島のある工業高校の訪問し、原爆のVRの視聴での平和学習を通して、訪問先の高校の先生の最後の言葉『空気と水と平和はタダじゃない』との言葉から、自分の考えであるスポーツを通して、人と仲良くなることが平和の一歩と作文を終えている。

優秀賞の堀美津季さんの「私とものづくり」では、『ものづくりは、いつも新しい発見があり、自分の成長を感じられる』と想いを表現している。また、ものづくりは、自分の満足で終わらず、人を喜ばせることができ、『ものづくりが大好き』という言葉で作文を終えている。

今年度の応募作品は、職場体験、授業、ボランティア活動等の体験を通して、働くこと、学ぶこと、人の助けになることの喜びや苦労が感じられる作文ばかりでした。最後に今回の「作文コンクール」に応募していただいた生徒の皆さん、ありがとうございました。また、ご指導いただいた先生方、貴重な体験をさせていただいた地域・事業所の皆様、そして保護者の皆様に感謝申しあげます。

作文選考を通して

高等学校・専修学校の部　選考委員長
高　幹　明

今年度は、高等学校の部に百四十七作品、専修学校の部に十四作品の応募がありました。一次審査、二次審査を経て、高等学校の部では最優秀賞一作品、優秀賞三作品、佳作十八作品、専修学校の部では、最優秀賞一作品、優秀賞一作品を決定させていただきました。

高等学校の部の最優秀賞は、都立大島高校三年島村杏樹さんの作品で、題名は「誇りを持って」です。この作品は、二〇一六年に世界で初めて国際優秀つばき園に認定された都立大島高校の椿園について、「私」自身が授業の一環で行う椿ガイドを行っていることや、大島高校の椿の評判が海外にまで広がっていることの紹介から始まります。また大島の災害復興や人口減少への思いから課題解決していこうとする若武者育成塾への参加、「椿園を魅力的にしよう！」と高校の課題研究テーマを定めた取組み、さらに「農業クラブ」では椿をメインとした大島ツアーの提案が金賞を受賞する等、「私」自身の大島への愛着、農業を通して地域振興を推進していく意思の強さ、さらに地域のリーダーとして大島を支えていく意気込みが選考委員に強く伝わる作品でした。

専修学校の部の最優秀賞は、中央工学校一年飯田大貴君の作品で、題名は「授業で学んだことと心構え」です。中央工学校に入学して四か月たった「私」は、この間に学び得たことについて、作業や課題の確認作業を怠らずに習慣づけることや、新しいことを学ぶことの楽しさをあげます。習慣づけについては、製図の授業を通して細かなミスを繰り返していく中で、「私」自身が主体的によく確認、理解すること、わからないことは積極的に質問することが社会に出ても重要なことであることを学びます。中央工学校での実技授業を通して、「私」自身が将来の自分の就職に直結している実感が湧き、自然に学習に対して前向きに取り組めるようになっていくことが強くあらわれた、エンジニアとしての今後に期待の持てる頼もしい作品でした。

最優秀賞とほぼ同レベルの優秀賞として、高等学校の部では都立瑞穂農芸高校木村美佳子さんの「東京しゃもから教わったこと」、都立農芸高校大野千星織さんの「樹木医を目指して」、愛国高校佐藤未保さんの「コミュニケーションの大切さ」、専修学校の部では青山製図専門学校野原るりかさんの「憧れから、夢へ。」は、選考委員を大変悩ませる魅力ある作品でした。また佳作の高等学校の部十八作品についても、それぞれの分野での様々な体験を通して「私」自身が感じ伝えたいことが、強くあらわれた作品が多くあったと思います。欲を言えば高等学校の部では男子生徒の作品と、それと関連してか工業高校生の作品が比較的少なかったことが気になりました。来年の課題として奮起を期待します。

最後に今回の「作文コンクール」に応募していただいた多くの生徒の皆さんに感謝を申し上げますとともに、専門高校、専修学校で学ぶ皆さんが将来自分の進む道を見つけ、自信と誇りを持ち人生を歩んでいくことを期待しています。

そして指導いただきました先生方、地域、事業所の皆様、保護者の皆様に感謝申し上げます。

平成 30 年度　作文コンクール表彰式（中学校の部）　12 月 13 日　　東京都産業教育振興会

平成 30 年度　作文コンクール表彰式（高等学校・専修学校の部）　12 月 13 日　　東京都産業教育振興会

中学校の部　最優秀賞

夢の見つけ方

大田区立大森第一中学校　二年
横尾　祐乃

私には将来の夢がない。十四年生きてきて、まだ見つからないのだから、この先も見つからない気がする。そもそも、夢ってなんだろう。本当に就きたい職業のことだろうか。私にとっての職業や、働くということは、家族や自分のためにお金を稼ぐという目的で行うことに過ぎない。職場体験を終えるまでは、ずっとそう思っていた。

体験先は理容室だった。どんなところかを知らなかった私は、まずはオーナーさんの仕事の様子を見るところから始まった。はじめは、仕事の内容を覚えることで精一杯だったけど、途中からあるものに惹きつけられた。それは、お客さんの表情だ。お店に来てから、笑顔が絶えない。その理由は一目瞭然だった。オーナーさんの笑顔が絶えないからだ。それだけでなく、楽しい話を提供している。だから、お客さんは楽しそうに髪を切ってもらっていた。

理容師になるためには、資格が必要で、特別な技能を持っている。そして、人を笑顔にする力も持っているのかもしれない。

私には、その力はあるだろうか。きっとオーナーさんは、理容師という仕事が大好きで、そして誇りを持っているような気がした。

先日、授業の中で、高校生でなりたいと思った職業に実際に就けた人は、全体の二％だと聞いた。また、多くの社会人の働く目的はお金を得るためだという調査もある。働いているすべての人に、「今の仕事は好きですか。」と聞いたら、いったい何人の人が「好き」と答えてくれるのだろう。そして、私自身、好きな仕事に就けるのだろうか。職場体験後は、こんなことを考えるようになった。どうせやらなければいけないことならば、お世話になったオーナーさんのように自分の仕事を好きになったり、誇りに思えるようになりたいとも思った。そのためには、何が必要か。その答えを、私は知っていた。ただ、自覚していなかった。そして、この職場体験でそのことに気付いた。

私たちは普段の学校生活で、「ありがとう」の言葉を交わすことがある。「ありがとう」を言

中学校の部　最優秀賞　横尾 祐乃さん

われたときは、言われて当然のことをしてあげたと思うときもある。逆に言われないと、どうして言わないのだろうと思ってしまうときもある。感謝の気持ちが欲しくて、何かをしてあげたわけでもないのに、ちょっとしたイライラを感じてしまうのだ。ここで、考え方を転換した。その一言があったときは次の行動力の源にしたほうがいいのではないかと。職場体験では、そんなことも考えるようになった。オーナーさんがお客さんに対して、感謝の気持ちを表現する場面がたくさんあった。例えば、来店したとき。帰るとき。そして、お礼を言われたとき。その逆もたくさんあった。ドアを開けてあげたとき。髪の毛を洗ってあげたとき。そして、セットが終わったとき。そのたびに、笑顔の連鎖が起こった。言われた方だけでなく、言った方も笑顔になるのだ。きっと、この日だけではないはずだ。毎日毎日、たくさんの人に感謝し、感謝され、それがこの何年も繰り返されてきたのだ。どれだけたくさんの人と関わり、感謝の気持ちを交わすことができたかどうかで、仕事に対する姿勢が変ってくるのではないだろうか。はじめは好きになれなかった、お金のための仕事でも、自分の考え方や行動次第で、就きたかったわけではない仕事も、前向きに取り組めるようになれば、その仕事を好きになれるかもしれない。夢のない私には、それが必要なのかもしれない。

十四歳の私には、まだ夢はない。職場体験を終えても、いまだ夢には出会えていない。でも、一つだけ変わったのは、この先、私にも夢ができる気がする。それは、職場体験を通して、人と関わる仕事に就きたいと思えたからだ。人と関わることの楽しさや、働くことについて真剣に考えた三日間だった。この期間で、私にも夢ができる、いや、どんな仕事でも、感謝の気持ちを忘れず、前向きに取り組んでいけば、いつの日にか、自分がたまたま就いた仕事が、自分にとっての夢になるような気がする。

中学校の部　優秀賞

ものづくりとは

新宿区立西早稲田中学校　三年
飯　塚　奈津子

「あなたにとってのものづくりとは」そう問いかけられても、中学のはじめの頃の私には何も答えられなかっただろう。「どうして物をつくるのだろう」あのころの私は技術科の時間にこればかり考えていた。

木材を使って物を作る授業で私はコーナーラックを作ることにした。理由は作るのが大変楽そうだったからである。しかも、「完成して家に持ち帰ったら、すぐに捨ててしまおう」ぐらいには思っていた気がする。それぐらい、私にとって技術科はつまらなくて、何か理解し難いものがあった。

「ギコギコギコ」とのこぎりを引いていると、ふと、「どうしてこんな物作らなきゃいけないんだ」「これほどまでに時

間と労力を費やすくらいなら店で買った方がずっといいのではないか」。そんな思いがこみ上げてくる。私は半ば苛つきながらものこぎりを引く。しかし、次第にその手は重くなり、余計な気持ちばかりが膨らむ一方であった。

やっと木材を切り終えて組み立ての行程に入る。少し歪な木の板に釘を打ちつける。そのとき、何とも不思議な気持ちになった。今まで一度も分からなかった気持ちである。上手くは言えないのだが、自分の力で作ったものが少しずつ形になっていく様子はなんだか誇らしかった。それに、今までの作業が無駄ではなかったと分かり、報われたようで、ただたたうれしかった。

次は、やすりで角ばったところを削り落としていく。だんだんと手ざわりがよくなっていく。ニスを塗る。はけを取り、薄くニスを伸ばすと、そこからツンとした臭いがした。いつの間にか夢中になっていて、気がついた頃には教室中にニスのあの臭いが充満していた。しかし、それは顔をしかめる程のものでもなく、むしろ、ちょっとした心地良ささえ感じるのであった。

二週間ほど過ぎ、また技術科の授業がやってきた。内心ではこの日のこの時間が待ち遠しくてしかたがなかった。廊下を急ぎ技術室へ向かった。窓際に置かれた私のコーナーラックはニスを塗ったせいか、日光を浴びて、少しきらきらしていた。手でさわると、つるつるしていて、頬擦りしたくなるほどの滑らかさだ。作品に触れているうちにじわじわとやっと完成したという達成感がこみ上げてくる。

最初はあんなに嫌いだった技術科は、今やもう私の大好きな科目である。のこぎりを引くときの音や釘を打つときの手の触感、そしてニスのあの臭い。それら全てがものづくりの大切さを教えてくれた。手だけでなく、五感の全てを使って一つの作品を仕上げていくところが好きだ。そして作品が完成したときの達成感はもっと好きだ。

「あなたにとってのものづくりとは」今の私になら答えられる。ものづくりとは、人生を豊かにし、人を成長させるものではないだろうか。

中学一年生のときに作ったコーナーラックは、大切に机の上に置いてある。捨てようとまで思っていたはずなのに、今では私の宝物である。少々歪ではあるものの、店で買うよりずっといい。今はそう思う。以前の私と比べると、大きな進歩だと思う。全てはものづくりのおかげである。

私はこの体験から、ものづくりに関する仕事に興味を持っている。できることならば、将来は、仕事でものづくりに携わりたい。また、決して目に見える物を作ることだけがものづくりではないと思う。笑顔や安心というものを作るのもものづくりの一つではないだろうか。ものづくりのドキドキやワクワク、そしてなにものにもかえがたい達成感を仕事として味わってみたいと思う。きっと今以上に面白いことに満ち溢れた人生になるだろう。そのためにも、技術の授業を通してものづくりに触れたことを忘れずに成長していきたいと思う。

広島から学ぶ

大田区立大森第六中学校　三年
後藤　健介

高校に行って野球を続けるべきか、悩んでいた。やっぱり続ける。広島での体験や出会いが僕にそう決断させた。

僕は、広島のある工業高校に行ってきた。その高校は原子爆弾が投下される前の爆心地付近の街並み、原爆投下の瞬間、そして、その後の街の様子をＶＲで再現しているという事を夏休み中にテレビで見ていた。小学一年生から学校で平和学習をしてきた広島の高校生が取り組んでいるものだ。僕は、とても興味があり、高校に直接電話をして数日後に広島を訪ねる事を伝えた。特別にそのＶＲを高校で体験させて頂いた。このＶＲの映像は被爆者の方々からの話や、当時の資料を調べて作成しているそうだ。細かいところまで、とても忠実に再現されていて、状況が分かりやすかった。また、映像には人間が登場しない。精神的に孤独感を与えるための工夫であり、作り手の制作意図を感じさせない為だという。蝉の声、風鈴が風になびく音が一気にＶＲの世界に入り込ませてくれた。ＶＲの中で、たくさんの風を感じ、生活の匂いまで感じることが出来た。このようにこのＶＲを見た人が何かを受け止め考えてほしいと、お会いした先生がおっしゃっていた。説明のナレーションもないので、どの国の人でも見ることが出来るのは、素晴らしい事だと思った。実際に人間の姿はないが、ついさっきまで人がいたのではないかと思えるような商店の前にとめられた自転車が、持ち主を待っているように見えて悲しかった。今は平和記念公園になっている所に、透き通るきれいな川と、たくさんの家やお店があったことなどＶＲを通して初めて知った事が多い。罪の無い人々の日常が奪われた事に改めて怒りが湧いた。また、米軍機Ｂ29と原子爆弾の等身大のＶＲも体験させてもらった。原子爆弾で使われたアンテナは日本製だったという事を初めて知った。日本はそのアンテナを採用しなかったが、アメリカは日本製の技術の高さに目を付けたという。当時の日本の情報量の無さを感じたと共に、物事において「知る」という事がいかに大切かを実感した。先生が最後に「空気と水と平和はタダじゃない」とおっしゃっていた。皆が当たり前だと思っているものも当たり前ではないという意味である。空気は意識しなくてもきれいな空気を吸う事が出来る。水も日本では蛇口をひねればきれいな水が出てくる。だからと言って、それを当たり前だと思ってはいけない。平和もそうだ。今の平和は先代の人々が作ってくれた世界である。今、豊かで平和な生活が出来ている事に、少しでも感謝しなければいけないのだ。この高校のスローガンは「継

承」。これからも国、人種は関係なく後世に伝えていくという事だ。

　僕が通っている中学校では三年前に校庭の片隅に防空壕が発見された。それをきっかけに広島市長から原爆で生き残ったアオギリ二世の苗木を頂いた。平和記念公園にはアオギリの木が植えてあった。原爆の被害の中、生き抜いたアオギリのえぐれた木の幹から原爆の威力が伝わってきた。学校のアオギリの命を大切に守り大事に育てていきたい。

　ＶＲの体験をした後に、原爆ドームを見に行った。空爆前の奨励館の元の姿を知っているため、原爆ドームはいつもと違って見えた。

　平和記念資料館には様々なものが展示されていたが、その中で印象に残っているものが二つある。一つめは、時計だ。八時十五分で止まった時計が展示されていた。僕は8・15という数字に引っかかった。この数字は終戦記念日の八月十五日と同じなのだ。偶然ではあるが恐ろしいものだと思った。快晴の穏やかな夏のあの朝、多くの人にとって幸せな朝だったはずだ。一瞬にして全てを奪った原爆に怒りを感じた。二つめは、前アメリカ大統領のオバマ氏が実際に折った二羽の折り鶴だ。原爆を投下した国の大統領が被爆国である日本の文化、折り紙で平和の象徴である鶴を折ったのだ。世界全体でこの地球を平和にしていこうという決意の表れだったのではないかと思う。また、ピースボランティアをしている84歳の語り部の方のお話を聞かせてもらった。その方は小学五年生の時に被爆したという。原爆投下後、近所のおばさんが、おぶって必死に逃げてくれたと感謝の涙をぬぐいながら話してくれた。そこで、その方は「自分の命は他の人から与えられた命だ」という表現をしていた。だから今は語り部として戦争や原爆の悲惨さを伝えているのだそうだ。終戦から今年で七十三年が経った。実際に戦争を経験した人が少なくなっている今、少しでも早く、多くの人が語り部の方からお話を聞くべきだと思った。平和とは何か、平和な世の中を作るのは難しいのではないかという僕の質問に「平和とはみんなが仲良くする事である。助け合える人間関係を築く事が平和に繋がる。仲良くしていれば平和な世の中を作ることも難しくない。」と語り部の方は答えてくれた。

『平和とは、自然に笑顔になれること。
　平和とは、人も自分も幸せであること。
　平和とは、夢や希望をもてる未来があること。』

　これは今年の平和の誓いの文の一部である。仲が良いから笑顔になれる、幸せである、夢や希望をもてるのだと思う。お話を聞いた後、自分が野球をやっている事を、語り部の方に伝えた。すると、「それは良い。仲間を大切にね」と言ってくれた。スポーツは誰とでも仲良くなれるものだ。どんなに小さくても平和への一歩になると思う。高校でも野球を続けて大切な仲間と仲良くしようと決めた。

　あんなに辛い、大変な経験をされた方から僕の心に届いた平和へのメッセージは、「周りの人を大切にする事、相手の立場に立って考える事の大切さ」だった。僕は、この体験を一生忘れない。

私とものづくり

東京都立桜修館中等教育学校　二年
堀　美津季

私はものづくりが好きだ。幼稚園生の頃から工作が好きで、中学二年生になった今でも変わらずものづくりをしている。ものづくりは楽しい。いろいろな要素があり、いつも新しい発見がある。人を喜ばせることができる。自分の成長を感じられる。

私が小学生の時、学校の係活動でクラスのために段ボールを使った整理箱を作った。かなり大がかりなもので、作り終えた時には達成感もあったし、満足感もあった。しかし、一番嬉しかったのは、クラスの人が、とても喜んでくれたことだ。みんなが口々に驚き、完成を祝ってくれたことは、今でもはっきり覚えている。それまで私は自分一人でものづくりをしていたので、みんなに喜んでもらったことは初めてだった。

このことがあってから、さらにものづくりが好きになったように思う。自分が作ったものが、人を喜ばせることができるものであること。自分が作ったものに評価がもらえること。それが、楽しくて、やりがいのあることなのだということを強く感じた。

しかし、私がものづくりに「はまった」理由はそれだけではない。ものづくりは奥が深い。様々な新しい発見がある。私は、先日、私が二年前に自作した段ボール製の金庫を見つけた。それを見た時に、「今の私ならここは違うつくりにするな。」と、考えたり、「この素材にこんな使い道があったのか。」など、新たに発見したことがたくさんあった。

何の素材を使うのか、どんな仕組みにするのか、強度はどうするか、重さはどの位にするか・・・。ものづくりをする時には考慮することがたくさんある。それを一つ一つ自分で決めて、自分の手で形にできるのも楽しさの一つだが、今考えていることと、二年前に考えていることが同じ自分なのに全く違っていて面白い。ものづくりにはたくさんの選択肢があり、答えはいつも一つではない。そんな奥深さがものづくりの魅力なのである。

ものづくりから学んだことがある。ものを一から作ろうと思った時には、試行錯誤しながら作ることになるが、そうするとうまくいかないところが出てくることがある。そんな時、その問題点を一カ所から見ても、解決はできない。色々な状態、色々な視点から多角的な見方ができてこそ、その問題を解決できるのだと思う。そして、これは普段の生活の中でも同じだ。どんな分野においても、様々な視点から物事を見るということは大切だと思う。私はそれをものづくりから学んだのである。

ものづくりには色々な要素がある。それがわかってきたのは最近だが、もっと小さい頃からその楽しさには気づいていたのだろう。だから今まで飽きることなく色々なものづくり

に取り組んでこられた。うまくいかなくて何度も失敗を繰り返し、時間を無駄にして嫌になる時もある。作ろうとしていたものがなかなか思った通りの形にならなくて、もうやめようかと思う時もある。けれど、ふとした時にすごく楽しいと感じたり、失敗しても懲りずにまたやってみたいと思ったり。

私は、やはり、ものづくりが大好きなのだ。

中学校の部　佳作

将来の夢

愛国中学校　三年
齊藤　絵舞

私の将来の夢は、看護師です。私が看護師を目指すきっかけとなった出来事は二つあります。

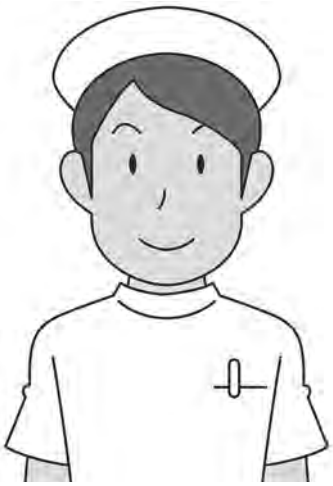
一つめは、小さい頃よく風邪をひいて病院へ行くことがあり、そこで働く看護師さんに憧れの気持ちを抱いたことです。その時の看護師さんは、皆さん笑顔が素敵でした。具合の悪い私に優しく声を掛けてくれたことで、とても安心することができたのを覚えています。そんな優しい看護師さんが、時に厳しい真剣な目で仕事をこなしているのを見たとき、とても心惹かれ、私もあんな看護師さんになりたいと思ったのです。

二つめは、亡くなった祖母の存在です。祖母は、私が小学校中学年の頃、認知症になりました。それから母と祖母の家を頻繁に訪れ、身の周りのお世話をするようになりました。祖母は認知症のため、ご飯を食べたのに食べていないと言ったり、同じことを何度も繰り返したりということがありました。そういうことが何度も続いたので、私は少しきつい言い方で否定してしまいました。すぐ後悔し、失敗したと反省しました。それは、認知症の人には、話を合わせた方がいいと母から言われていたからです。

しばらくすると、祖母の認知症の症状は更に進み、徘徊を始めるようになってしまったのです。すぐに見つかりましたが、祖母は家に帰って来た時泣いていました。一人でさまよっていた時間は祖母はどんなに怖かったでしょう。そのことを思い出すと今も胸が痛くなります。徘徊が始まってしまったため、祖母は老人ホームに入ることになりました。様子を見に行った母と私が帰ろうとすると、祖母が「私も一緒に帰る」と言い出しました。認知症で色々なことがわからなくなり、もちろん家に帰る道もわからない、そんな祖母の姿を見て、一緒に居てあげたいと思いました。祖母の寂しい気持ちを考えると何もできない自分がもどかしく感じられました。しばらくしてまた様子を見に行き、話しかけると祖母は私に向かって「お姉さん」と呼びかけました。私の名前を忘れてしまっていたのです。祖母自身は元気でニコニコ笑っていたのですが、確実に認知症の症状は進んでいるのだと感じ、悲しくなりました。間もなく祖母は認知症の他に大腸がんも見つかり、入院することになりました。私は学校が忙しくてなかなかお見舞いに行くこができませんでした。初めてお見舞

いに行った時、祖母は寝たきりで一言もしゃべりませんでした。しかし、呼び掛けると顔をこちらに向けてうなずくような素振りを見せるので、声は聞こえているということが分かりました。二回目のお見舞いでは呼び掛けても応答はなく、ただ息をしているだけでした。これが最後のお見舞いとなってしまいました。その後祖母はその病院で亡くなってしまったのです。祖母の最期を看取ることはできませんでした。同居していなかったので最期ぐらいは一緒に居てあげたかったと思いました。祖母のお葬式ではやはり泣いてしまいました。私は普段悲しい映画などを見ても泣かないのですが、祖母を見送るときには涙が止まりませんでした。家族がいなくなるということは、これほど辛いものなのだと感じました。この出来事から看護師になりたいという気持ちは更に強くなりました。

小さい頃に病院で見た看護師さんの姿、病気で苦しんでいる祖母をただ見ているだけで何もしてあげられないまま亡くなってしまったことが、看護師になりたいという思いを一層強くしました。しかし、「なりたい」という思いだけでは看護師になることはできません。専門的な知識と技術を身につけ、資格を取得しなければいけないのです。私は今しっかり勉強して、高校の看護科へ進学したいと考えています。私の目標とする看護師像は、笑顔で患者さんを安心させることのできる、患者さんに優しく寄り添い、豊かな知識と技術を備えた看護師です。目標の看護師になれるよう、頑張っていきたいと思います。



将来の夢

愛国中学校　三年
齊藤　唯舞

私の将来の夢は、看護師になることです。何故看護師になりたいと思ったのか、書いていきたいと思います。

私はとても小さく生まれました。体が弱くて、死にそうになったこともあり、元気になったとしても後遺症が残ってしまうかもしれないと言われました。ですが、お医者さんや看護師の方々が一生懸命私を救おうとしてくれたので、今では後遺症もなく、元気に過ごしています。この時の話を母から聞いた私は、いつか私のために力を尽くして下さった看護師さんのようになりたいと思うようになりました。

私は今、愛国中学校の三年生です。来年は看護師になるために愛国高等学校の衛生看護科に進学したいと思っています。でも、今の私には看護師になるために必要な能力が足りていないと思います。私が思うその能力とは、三つあります。

一つめは、コミュニケーション能力です。これは、一番大切なものだと思います。私が出会った看護師さんの多くは、患者さんに適切な励ます言葉掛けをしていました。今の私に

はそのように上手く患者さんを励ますことができるのかどうかと考えると心配です。コミュニケーションが上手に取れない看護師では信頼してくれないと思います。それどころか、不安にさせてしまうことでしょう。患者さんに合った話題を選び、明るく接することができるようになりたいと思っています。私は話を展開させていくことが苦手で、すぐに黙ってしまう方です。話を広げていけるように相手のことを考えて話をしていきたいと思います。また、私は同じ年代の友人とは笑って話すことができますが、自分より年上の方と話すときには、どうしてもしっかり話を聞かなければと思い、緊張してしまいます。そのため、笑顔で明るく話すことが上手くできません。これは慣れることが大事なのではないかと思いますので、そういう機会を増やしていきたいと思っています。

二つめは、積極的に行動することです。これは前述したコミュニケーション能力を高めるためにも必要だと思います。消極的であれば、患者さんを励ますことができないと思います。私は中学一年生の時からクラスの委員をさせていただいていますが、他の委員に任せっきりで積極的に行動できていません。看護師になろうとしているのに、誰かに任せっきりというのではいけないと思います。自分が気付いたことは見て見ぬふりをせず、皆に大きな声で伝えることを心掛けたいと思います。今までは気付いても声には出さず、行動だけでしたが、これからは行動だけでなく、積極的に声を出していきたいと思います。

三つめは、パソコンを扱うことができることです。これは、パソコンが世の中に普及してきています。病院でもパソコンを使う所が多くなってきていると思います。私の通っている病院は、紙を使っていたのですが。最近パソコンを使い始めています。私が看護師の仕事をする頃には、ほとんどの病院がパソコンを使うようになっていることでしょう。そこで私はパソコンを扱うことができるようになるために、情報処理部に入っています。タイピングが少し早くなったくらいですが、文書を作ることができるようになりたいです。

ここまで看護師になりたい理由とそれに必要な能力について書いてきましたが、看護師になりたい理由はもう一つあります。それは父が癌を患っていることです。父は九ヶ月ほど前に癌を発症しているのが見つかりました。癌が見つかったときには、既に大きくなっており、手術で全て取り除くことはできないと医師から告げられました。そこで抗癌剤治療が行われました。抗癌剤治療を行う前は薬を飲んでいましたが、薬だけでは効かず、抗癌剤治療に入ったのです。この治療を一ヶ月ほど行ったのですが、効果が現れず、医師にも打つ手がないとも言われました。この話を父から言われて、とても悲しかったです。この時、父に何も言えなかったので、励ます言葉を掛けることのできる看護師さんに憧れます。癌という病気で悩んでいる患者さんに少しでも明るい前向きな気持ちになれるように、適切な言葉を掛けられる看護師になりたいと思います。

将来の夢

愛国中学校　三年
三橋　りお

私の将来の夢は、調理師になることです。私は昔から料理を作ることが好きだったので、調理師を目指そうと思いました。私が通う中学校の上級学校に家政科があるということは、中学に入学してから知りました。高校の先輩方の作った料理を見た時、高校生の作ったものとはとても信じられませんでした。レベルが高くて驚きました。

私は休日にすごく簡単なお菓子をたまに作ってみることがあるのですが、とても恥ずかしい出来栄えです。私も先輩方のように上手に作れるようになりたい、調理師の資格を取りたいと思っています。高校で専門的なことを学び、私がまだ知らないような料理を学びたいと思います。

次年度は、高校生になりますが、勉強をしながら料理も学べるなんて幸せなことだと思っています。愛国中学校に入学して良かったと思っています。十一月に内部選考試験があるので合格できるようにしっかり勉強したいと思います。

家政科に入学できたら、今よりももっと勉強に励みたいと思っています。私は夢や目標があることをとても幸せだと思います。中学校に入学するまでは、将来の夢がなかったのですが、今は「調理師になる」という人生の課題ができたので良かったと思います。

おいしい料理を作ってみたい、世界の様々な料理についても勉強したいと考えています。私が思っている以上に、調理師になることは難しいことかも知れませんが、夢に向かって基礎から技術を身につけていきたいと思います。おいしい料理を作って皆に喜んでもらえるよう、一生懸命努力していきたいです。

自分に調理師という仕事が向いているのだろうか、と思った時もありましたが、家族も理解して応援してくれているので、自分を信じて頑張ります。家族にも私が作った料理を食べてもらいたいと思います。

生まれた時から今まで、そしてこれからも料理を作り続けてくれている母にも感謝しています。私が調理師になることができたら、家族の皆も喜んでくれると思います。その時には家族が驚くようなおいしい料理を作ってあげたいと思います。

私は洋食が好きなのですが、母は和食が好きです。父は中華が好きです。人それぞれ好きな食べ物は違います。ですが「おいしい」と思う気持ちは同じだと思います。

私は和食が特に奥が深いのではないかと考えています。昨年の夏、家族三人で台湾に旅行に行きましたが、台湾の屋台で食べた中華料理は日本の味とは全く異なっていたので驚きました。国や作る人が違うと、こんなにも変わるものなのだという発見がありました。海外で和食を食べても同じことが言えると聞いたことがあります。だからこそ、日本の料理、

和食の基礎をしっかり学びたいと思います。そして、食べた人がおいしいと喜んでもらえるような料理を提供できたらいいと思います。二〇二〇年には、オリンピックが日本で開催されます。外国の方が大勢日本を訪れることになります。また、オリンピックが終わっても続々と観光を目的に来日され、そして日本の料理を食べに来ることでしょう。私の作った料理を外国の方にも食べてもらい、おいしいと喜んでもらえたら良いなと思っています。

調理師の資格は職場で経験を積んでから取られる方もいらっしゃるそうです。高校在学中から色々な基礎をしっかり身につけ、様々な料理について専門的なことを学べるのは、とても恵まれていると感じます。高校生のうちに実力をつけて、社会に出たいと思います。そして、私の作った料理で食べた人を笑顔にしたいです。調理師として仕事をする時だけでなく、将来結婚して自分の新しい家族が出来たときには、夫や子供のために心をこめて料理を作りたいと思います。

「食」と「生活」は切り離せないものです。調理師という資格を生かし、将来は食べてくれる人のことを思いやり、季節やその時の状況に合わせ、見た目も美しく彩りも華やかに、初めて食べるものも好きになれるような工夫を凝らしたいと考えています。もちろん、衛生面でも安全で、健康を考え身体に良いものを提供できるように、きちんと学びたいと思います。今はまだ何も分からず、知識もありませんが、基本から丁寧に学び、創意工夫し、将来は料理人として社会に貢献できる人になりたいと思います。

一枚ののこぎりの刃

新宿区立西早稲田中学校　三年
宮内　桜

「パキッ。」やってしまった。この糸のこの刃は先生がたった今新しいものに替えてくださったものだ。それをものの数秒で折ってしまった。技術の授業で本立てをつくっているときのことである。けがきがおわり、木を切り始めようと思って、刃をかけたところだった。木工製作は難しい。私が改めてそう思った瞬間だった。

私は、器用だといわれた試しがない。小学校の頃から工作は人一倍時間がかかり、みんなと同じように綺麗に仕上がらないので、工作の時間が苦手だった。だから、中学校に入学すると技術という教科が増えることが憂鬱で仕方なかった。そんな私の木工製作だ。もちろん、けがきからとても長い時間を費やした。一枚の板材を本立てにするということはあたりまえだが、組み立てるという工程が必要である。組み立てることを成功させるためには、一ミリや二ミリのずれを許してはいけない。そんな思いが私のものづくりへの苦手意識をより一層高めるのだった。

さて、私が折った糸のこの刃についてだが、のこぎりを使うことというのは今までの工作にない難しさだった。なぜな

ら、私の生活に、今まで関連してこなかったものであるからだ。工作やものづくりの道を避けて過ごしてきたせいもあるかも知れないが、日常生活でのこぎりを見かけることはまずない。それを専門とし、職とする人ならば別だが、普通の人からすれば、それを触るはおろか、見かけることすら少ない特別なものなのだ。

当然のごとく、私はのこぎりをしっかり見たことすらなかった。持ってみての一番最初の感想は、「刃が折れそうに薄いな。」であった。私のそんな心配をよそに、技術の先生や友人達は、いとも簡単に切り始めたので、私は思わず、「あ、刃は折れないようになっているんだ。」と言ってしまったことを一生忘れない。

初めから失敗してしまった私であったが、先生にのこぎりの特性を聞き、それを理解することによって、だんだんとのこぎりを使うコツをつかむことができた。その特性というのは、のこぎりには刃の向きがあるということと、力の加減が必要だということである。失敗したときの私は、のこぎりの特性を理解しようとせず、ただ力まかせに木を切ろうとしていた。みんなが簡単そうに切っているのを見て、それで切れるものだと思っていた。しかし、それは大きな思い違いだった。上手に切れるのは、何も考えずにただ簡単そうに切断していたのではなく、のこぎりの特性を理解して、その特性をいかし、工夫を凝らして切っていたのだ。ただ木を切るだけの行為だが、コツをつかんで進めていくと、こんなにも「ものづくり」とは楽しいものなのだと初めて思った。普段の私だったら、「ものづくり」が苦手だからという理由でのこぎりが使えないことなど気にもとめなかったと思うが、さすがの私でも木を切り始めた矢先に新しい刃を折ってしまったというのはとてもショックな出来事だった。だから、同じ失敗を繰り返さないよう、試行錯誤した。その結果、のこぎりの特性という名のコツを見極めることができるようになったのである。

技術という科目によって、私の生活の中にのこぎりを使うことができるという新たな選択肢が増えた。これは、将来の私のくらしにとても大きな可能性をもたらしたのではないかと思う。例えば、木製の家具をつくってみたい、家をリフォームしてみたいと思ったとき、他の人に頼らずに授業で教わったことや、使えるようになったのこぎりを使って実行することができるかもしれない。

のこぎりの刃を折ってしまったことによって、私は二つのことを得られた。一つは、試行錯誤して、単純に技術面としてのこぎりが使えるようになったこと。二つめは、不得意なことでも、そのものの特性を見極めることが大事だということだ。これは、これから私が生きていくなかで、苦手なことや不得意なことで困難にぶつかった時に役に立つ考え方なのではないだろうか。のこぎりの刃のように力まかせにせず、特性を理解しながらじっくり向き合い、解決のコツを見極めていく。自らがこうすることによって、いずれこの考え方が私を助けてくれるに違いない。

職場体験から学んだこと

文京区立第九中学校　三年
安　達　公　香

中学二年生の時、三日間の職場体験がありました。就職というと、まだまだ何年も先の事のような気がして、働くということに、なかなか実感が持てませんでした。しかし、収入を得ることの大変さや、仕事をやり遂げた時の充実感を知ることができる、良い機会と考え、三日間がんばってみることにしました。

私の仕事は、ホテルでの客室清掃とベッド・メーキングでした。ホテルのような大きな施設での仕事にあこがれていた私は、良い体験ができるのではないかと、少しワクワクしてきました。

一日目、私はとても緊張していました。家から直接職場に行くということもあり、寝坊をして遅刻をしないように、目覚ましを少し早めにセットしました。一緒に行く友達と待ち合わせの場所と時間を決め、駅から迷わないように、住所と地図で何度も場所を確認しました。今までホテルという場所に行ったことがない私は、立派な正面玄関から入り、広くきれいなロビーを通った時、「ここでちゃんと仕事ができるのだろうか。」と、ますます緊張してしまいました。事務室で担当者の方に、とても優しくていねいに、仕事の手順を教えていただいたのですが、初めて聞く言葉や用語が多く、メモを取りながらでも、なかなか頭に入りませんでした。実際に仕事をしながら、わからなくなったらメモを見るというように、一つ一つ確認をしながら作業をしていきました。仕事の手順を覚えるのがとても大変で、一つの作業を終わらせるのに、とても時間がかかってしまいました。不安と緊張の中、職場体験一日目は、あっという間に、くたくたになって終わりました。

二日目は、朝からの緊張はだいぶなくなり、昨日の反省をしながら、予習もできていたので、一日目よりは、気持ちに余裕をもって職場へ向かうことができました。担当者の方の説明も、一日目よりも二日目の方が、よく理解でき、話を聞きながら、自分なりにシュミレーションすることができました。仕事の量も増えていましたが、午前中の仕事をなんとか時間内に終わらせることができました。

お昼においしいカレーライスを食べて、午後からの仕事は、間違いのないように、より慎重に進めていきました。一日目同様、とても疲れましたが、無事に二日目を終えました。その日の夜、二日目のメモを見ながら、布団に横になった時、ふとホテルの部屋が頭に浮かびました。それはドア側から部屋を見た様子で、きちんとベッドの定位置に置かれた、真っ白なカバーが掛けられた枕が印象的な部屋でした。「ホテルの部屋を利用する人は、部屋に入った時、最初にベッドに目が行くのかもしれない。ベッドに置かれた枕が、部屋の印象を決めてしまうのかもしれない。」と、私はその時に感じました。

そして、三日目の仕事の目標ができました。

職場体験三日目。最終日です。その日、私には一日目、二日目とは少し違う意気込みがありました。一日目、二日目と、仕事を素早くこなすことに集中していた私でしたが、気持ちよく部屋を利用してもらえるよう、お客様の身になって仕事をすることを、最終日の目標にしました。仕事を早くこなしていくのは、とても大切なことだと思います。そして、その出来栄えがていねいで、きれいであることもまた、大切なことだと思いました。ホテルや部屋を気持ちよく使ってもらえるよう、今、私のできる事を全力でやろうと思いました。部屋と水回りの掃除、ベッド・メーキング。この部屋を使う人の事を考えながら作業をしていきました。そうしていくうちに、お客様に対する「思いやり」の気持ちが出てきました。お客様の目線で作業をしていくことで、自然とていねいに、きれいに仕事をすることができました。昼食を済ませた午後からも、一つ一つ確認をしながら、「思いやり」を持って取り組みました。一つ部屋が終わるごとに振り返り、部屋を見渡し、「よし。」と、いっしか確認の言葉が私から出ていました。他人を思いやり、誰かのためにがんばるということは、自分のためでもあるということに気がつきました。こうして、三日間の充実した職場体験は終わりました。

この職場体験で、私は様々な事を学びました。以前は、仕事というと、「お金を稼ぐための作業」という、機械的なイメージが私の中にありました。収入を得ることはとても大切な事です。そして、働くということが、人と人とのつながりであるということもまた、大切なことだと感じました。私が職場体験の中で忘れられない事の一つに、ホテルで出していただいた、おいしい昼食があります。三日間本当に楽しみで、お昼ご飯を食べた後は、「午後からも仕事がんばろう。」という気持ちになりました。料理をして下さった厨房の方々、材料を提供してくれた人たち、またそれを運ぶ物流の人たち、この食事ひとつをとっても、限りない人々のつながりがあることに気がつきました。それが日本の社会全体につながり、そして世界中に広がっていくのだと感じました。私が、将来社会人として働くようになった時、仕事に「思いやり」を持ち、そして、仕事を通じて、世界を感じられる人間になりたいと思います。

職場体験を通して

墨田区立本所中学校　二年
平　川　菜　子

私が行った職場体験先は病院でした。これは希望通りの体験先で、とても楽しみにしていました。なぜ病院を希望したのかというと理由は二つあります。

一つめは去年の六月、私がお母さんと電車に乗っていると

きに起こった出来事です。突然「バタッ」という音がしてそれとともに、「大丈夫ですか！」という声が聞こえました。見てみると一人の女性が車内の通路に頭を向けた状態で倒れていてけいれんをおこしていました。すると近くにいた女性の方が倒れている女性の所へ行き駅員さんが来るまで脈を測ったり、呼吸を確認したり、胸に耳を当てたりして倒れている女性が今どのような状態なのか確認をしていました。その手際のよさとかっこよさに私は「すごいなあ。私ももし、自分の前で人が倒れたりしたらあの人のようにテキパキと動ける人になりたいな。」と思いました。

二つめは去年の夏休みに「身近な人に仕事について聞こう」という学校の課題がありました。そこで私は助産師をやっている知り合いの方に話を聞こうと思い、その方に相談したところ、「体験においで」と言われ、せっかくの機会だったので行ってみることにしました。診察室では赤ちゃんのエコーを優しい笑顔で見ているお母さんとお父さんがいてとても素敵だなと思いました。また、インタビューをしていると体験だけではわからなかったことがいくつもわかりました。元気に産まれてくる赤ちゃんもいれば、残念ながらそうではない赤ちゃんもいること。でも、汗で髪も顔もくずしてがんばっているお母さんが赤ちゃんを産んだとき、なんとも言えないくらいの幸せそうな顔を見られること。私はそれを聞いて、「新しい命が生まれるということは奇跡なんだな」と思い感動しました。

私はこの二つの理由からもっとたくさんの医療のことや命の大切さについて知りたいと思い病院を希望しました。

職場体験当日。一日目は手術室と薬剤科、二日目は病棟、三日目は産婦人科へ行き、体験をしました。それぞれ三日間過ごしてたくさんのことを学ばせて頂きました。そして、三日間過ごした中で共通して言えることがあります。それは、患者さんも看護師さんも医師もみんなが一生懸命だということと、患者さんに対しての心遣いが行き届いているということです。

手術室で看護師さん達は術後患者さんがつらくないように楽な姿勢で患者さんを固定すること。医師はミスをしないよう慎重に汗をかきながらメスを握ること。患者さんは手術に耐えること。病棟では自分の病気と闘う患者さんとその患者さんを辛いときでも笑顔にしてくれる看護師さん。産婦人科では痛い痛い陣痛に耐えながらもがんばるお母さんとその生まれてくる赤ちゃん。それを優しくサポートしてくれる助産師さん。みんなが一生懸命で、たくさんの心遣いがあってこそ得られる新しい命の誕生や、リハビリをがんばって退院できるまで回復できたこと、最後まであきらめずにつないだ命があるということがわかりました。もちろん、元気に退院できる方もいればそうではない方もいます。でも大切な命だからこそできるかぎりのことをして命をつないでいくことが大切だと思いました。

私はこの職場体験を通じて一つの夢ができました。それは医療関係の道に進むということです。いつかは自分も患者さんの気持ちによりそって退院ができるようになるまでサポートしたいです。

人のために

墨田区立吾嬬立花中学校　三年
大橋悠生

人のために何かするというのは、どういうことだろうか。あまり難しく考えなくても、誰もが普段、人のために何かしていると僕は思う。例えば、お年寄りの方に電車の席を譲るだとか、コンビニのレジの横にある募金箱に募金する、それだけでなく隣の人が消しゴムを落とした時に拾ってあげるなど、どんなにささいな事でも人のために何かしているのではないか。

僕は、中学二年生の時、消防署で職場体験をさせていただいた。消防署では、ＡＥＤの使い方、人命救助の仕方、消火活動の模擬体験など、普段の生活では絶対に体験できない事をさせていただいた。消防署の方々は、休み時間中に僕たちをリラックスさせようと笑わせてくださったり、昔の話をしてくださったりなどとても優しくおもしろい人ばかりだった。消防署では、毎朝、火災を想定した消防車の出動訓練をしている。何もしていない状態から、ブザーと放送の合図で一斉に動き出し、数分もたたぬ間に出動準備を終えてしまうのは、とても圧巻だった。そこで僕が見たのは、僕たちを笑わせるためにおもしろいことをしてくださった方が、まるで別人のような顔つきですごいスピードで防火服に着替え、たくさんのホースをかかえて持ってきて消防車に積み、たくさんの消防隊に指示を与え消防車の運転席に乗りこみ消防車を動かす姿だった。僕は、その真剣な姿に心を打たれた。

もう一つすごいなと思ったのが、昼の運動の時間のこと。消防署では、毎日昼休みの後に、筋トレやランニングをするという。そこで僕は驚いた。まとまってランニングをした時に、年配と思われる方が先頭を引っぱっていたのだが、走るスピードがかなり速くて、ついていくのに精いっぱいだった。僕は運動することが好きで、特に走ることには自信があったので、すごいと思った。トレーニングが終わった後に、その方がやってきて、

「君たちが速いから張り切って疲れちゃったよ。」

と言われて、もう消防士さんて本当にすごいんだなとしか思えなかった。

体験だけでなく、消防署のいろいろな方から話を聞く機会もあった。たくさんの方々から話を聞いたが、ほとんどの方がおっしゃったことが僕の胸には残っている。それは、「人を助けるという仕事に就いているといつも思いながら訓練している。そして、人の

命を助ける消防士という仕事に誇りを持っている。」

僕はこの言葉を聞いた時、人のために何かする人は、こんなにもかっこいいのだなと感じた。

僕が消防署にいる間、火災で出動することはなかったが、僕はこの職場体験をしながら、新潟県糸魚川市であった大規模火災について思いだした。糸魚川の大規模火災は、二〇十六年十二月二十二日に起こった火災で、中華料理店のコンロの消し忘れによるものだ。この火災は、約四万平方メートル、百四十七棟もの大規模にわたって燃え、とても恐しいものであった。しかし、この火災での死亡者は一人もいなかった。死亡者が出なかったのは、やはり消防士の懸命な消火活動があったからだ。調べたところによると、新潟県の消防隊がすぐさま駆けつけ、消火活動に入り、県外からも消防隊が応援に来て、消火活動をしたという。普段から訓練をし、トレーニングをし、そして、人の命を助けるんだという気持ちがあるからこそ、大きな火災でも落ちついて消火活動し、死者を一人も出さなかったのだと思う。

西日本の集中豪雨では、火を消すという作業ではないものの、消防隊が真っ先に駆けつけ、救助活動をしていた。普段とは違う状況でも、準備がしっかりできていれば、すぐに行動に移すことができるんだなと、僕は思った。

職場体験を通して、人のためになることを全力でやる人はこんなにもかっこよく、輝いて見えることを学んだ。僕は将来、どんな形でもいいから人の役に立つ仕事に就きたいと思う。そして、その仕事を胸張ってできるような人になりたい。

今の私にできること

墨田区立吾嬬立花中学校　三年
大津山　祥

今年六月二十八日から七月八日にかけて西日本を中心に北海道や中部地方など広範囲に集中豪雨があり大きな被害をもたらしました。私はテレビの前で、被災者の方々が一刻も早く元の生活に戻れるように祈ることしかできずもどかしく思いました。中学生の私が今できることは、お小遣いと両親の分をあわせたわずかな寄付だけでした。

メディアを通じて知ったアフガニスタンの子供達へのランドセル寄贈も、文房具を詰めたランドセルを教育の機会に恵まれない現地の人に学校教育を受けられる環境が得られるようにと願いを込めて贈ることしかできませんでした。

実際に現地に出向き浸水した家屋の床下に堆積した土砂を取り除く手伝いや、ランドセルをアフガニスタンへ送る梱包作業に参加してもっと近くまで寄り添いたい気持ちはありますが、残念ながら今の私一人の力では、少しの寄付までにしか及びません。

しかし、ボランティアはラテン語のボランタスを語源とする「自由意志」を意味するものなので、どんなささいなことでも自主的に行動することが第一だと思います。寄付を受け

取ってくださった方にお会いすることはできませんが、復興の一部になったり、ランドセルを手にして子どもたちに喜んでもらえたりできたら何よりです。

ボランティアは個人だけでなく団体として参加できるものがいくつもあります。

一番身近なものでは、中学校で行っているエコキャップ回収や清掃活動です。

エコキャップの運動目的は、リサイクルの促進、CO_2の削減、売却益による発展途上国の医療支援です。頻繁に日常生活で利用しているペットボトルのキャップを学校で回収し役立てていただいています。ゴミを減らす一歩につながります。

清掃活動では、道路や公園などの美観を維持でき、自分達の手で良い住環境を整えることで汚してはいけないという意識が高まります。体験してみると思った以上にゴミが落ちていましたが、積極的に協力してくださる方が多く短時間で地域を清掃することができ、心地良い達成感を感じました。

町内会や自治会が主催する「火の用心」を呼びかけて歩く夜の見回りもあります。人通りの少ない夜に放火の火事は起こりやすく、近所に注意の声を掛けながら大人の人達と一緒に夜の町を見回っています。時々、お店から店員さんが出て来られ、

「お疲れ様。いつもありがとう。」

と、感謝の言葉とお菓子をくださることもあります。「ありがとう」という言葉は、寒さや疲れを一気に吹き飛ばしてくれます。

私が所属している合唱団の活動として老人ホームで歌ボランティアに参加させていただいたこともあります。介護が必要な方、記憶障害のある方もいらっしゃる中、私達の歌が受け入れてもらえるのかと緊張しました。私達の選曲は「となりのトトロ」や「ひょっこりひょうたん島」など子ども向けの曲をオリジナルの振付けつきで歌うものでした。私達が入場した時から笑顔で迎えてくださる方もいれば、何が起こるのか不安で顔を曇らせている方も目に映りました。曲が始まり、踊り始めると私達も緊張で硬くなった表情に笑顔が戻り体も軽くなってきました。気が付くと前列の方が一緒に口ずさんでくださったり、手拍子をしてくださったりとそれぞれの表現で参加してくださっていることを感じました。歌や踊りは、観ている人に元気や楽しい雰囲気を味わってもらうことができます。選曲によっては、その方の背景にあった良き時代をよみがえらせ、認知症の人が一時的に記憶を取り戻すこともあるそうです。人は誰もが年をとります。年をとり、今までできていたことができなくなる空しさは、希望も失い物事を否定的に捉えるようになってしまうかもしれません。介護はできなくても、高齢者の方と接することで一緒に楽しんでいただける時間を作ってもらえたら嬉しいです。

どの様な形のボランティアであっても共通していることは、「やってあげている」のではなく、やりたくてやらせていただいているということ、参加させていただくことで多くのことを学び、仲間と知り合い、良い状況へ前進する喜びを一緒に味わうということです。

二年後の二〇二〇年には東京オリンピック・パラリンピッ

クが開催されます。残念なことに、私は東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会及び東京都が募集している年齢には達しませんでしたが、海外からの観光客の方への道案内や地域の中でのお手伝い等ができたらと思い、英会話学習に力を注いでいます。今後、国際ボランティア活動を広げ、今の私に何ができるのかを探していきたいと思います。

頑張ってこそ得られるもの

墨田区立寺島中学校　三年
平　山　萌　歌

私は、職場体験や周りの大人の人に話を聞くまでは働くということがあまりよくわかっていなかったんだなと思いました。私は自分が「やりたい」という気持ちや「好き」だからという理由でその仕事についたら毎日楽しく好きなように社会生活が送れる、そう思っていました。

ですが、私が職場体験をした時のことです。私は無事に第一希望であった結婚式場で体験することができるようになりました。その時の私には夢が二つありその内の一つがウェディングプランナーだったので、とても嬉しく三日間頑張ろうと思っていました。しかし思っていた仕事ではなく、何百枚ものお皿を洗いそして拭き、何百個ものフォーク・ナイフ・スプーンを洗いそして仕分ける作業やトレーに洗って拭いた物を揃えて置くのを何百人分やるという作業、時にはビールの箱を運ぶなどの力仕事やその中に入ったビールを一本一本布巾で拭いて冷蔵庫に入れるなどの仕事、ドレスや小物の返却で外まで行くなどの体験をし、最終日にプランナーさんと結婚式で司会をやる人が楽しそうに話をしている姿をみた時に、私が一日目や二日目に体験したとても大変で辛いことを裏で頑張ったからこそ結婚式の予定が決められたり、一生に一度の結婚式が大成功したりすることができるんだなと思いました。

そして職場体験の出来事を父と母に話すと、

「そうだよ、思っている以上に大変なことなんだよ。」

と言われてしまい、少し仕事をして働いている人に申し訳無いなという気持ちになりました。

私は職場体験をきっかけにして働くということに興味を持つことができ、もう一つの夢の美容師についてもっとくわしく知りたいと思い、私の憧れでもある父に話し、髪を切るついでに見学もさせてもらえることになりました。

小さい頃からずっとなりたかった美容師を目の前で見るのは少し緊張したけれど、とても楽しそうに美容師の人とお客さんが話しているのを見た私は「やっぱりこれだ。」と思いま

した。髪の毛を切ることは国家資格を持っていればできることかもしれないけれど、私だったら髪も自分の一つですし、信用できる人にやって欲しいと思うし、信頼できる人だから楽しそうに話だってできるのかなと思い、改めて父を尊敬しました。

その後、

「仕事やってて良かったなって思う時はいつですか。」

と質問すると

「やっぱり、お客さんが笑顔で喜んで帰ってくれる時かな。」

と答えてくれて、私はずっと人を笑顔にさせられる仕事に絶対つきたいと思っていたので、とてもやりがいがあって、良い仕事なんだなと思いました。

「逆に、大変なことは何ですか。」

と質問すると、

「希望は叶えてあげたいけど希望の髪形とお客さんの髪質が合っていないときかな。」

と答えてくれました。大変なところなんてあまり無さそうと思っていたけれど働くことに大変なことは、つきものなのかなと思いました。

私は、この二つの経験から、ウェディングプランナーであっても美容師であっても「その人を幸せな気持ちにさせてあげたい。」という一つの目標に向かってたくさんの辛いこと・大変なことを乗り越えて、目標の相手を「幸せにすることができた。」という達成感につながり、「やっていて良かった。」と思えるようになることはとてもすばらしいなと思いました。

これからまだ将来の夢を決めるまでたくさんのチャンスがあると思います。私はこれからもずっと人を笑顔にする仕事につきたいという想いを忘れずに、今あることに一つ一つ向きあっていき、いつか父のように生き生きとして自分の仕事に誇りを持てるような大人になりたいなと思いました。

私とボランティア

大田区立大森第六中学校　三年
大　沼　実那子

休みの日に、商店街や家の近くを歩いていると小学生の子から手を振られたり、声をかけられたりする。少しの前の自分では考えられなかった光景だ。このようになったきっかけは、児童館のボランティアに参加するようになってからだと思う。

小さい頃、友達と遊ぶ時には児童館に通っていた。ボール遊びやカード遊びがとても楽しかったし、月に何回か行われる物作り教室やイベントも大好きだった。小学六年生になる頃、イベントを手伝ってほしいと頼まれたのがボランティアに参加するきっかけだったと思う。

私が初めて参加したボランティアは、児童館の夏祭りだった。その場には、昔児童館でよく遊んでいた中高生も多くいて、私達をリードしてくれたのをすごく覚えている。ボラン

ティアといっても、小学生の私達に出来ることは限られており、お客さんの呼びこみや景品を配るなどの仕事をした。簡単な仕事ではあったが、すごく楽しかった反面、もっと色々な仕事をしてみたいと思うようになった。

中学一年生になり、児童館に行く回数も減ってきていた頃、毎年行われるハロウィンパーティーの企画があがった。それも、今までのハロウィンパーティーから進化して「中高生だけで企画・運営をしてほしい」というものだったのだ。中学生になって企画や準備にたくさん関われることはとても嬉しかったが、部活も始まり、あまり児童館に行けないのではないかという不安がとても大きく、参加することをためらっていた。同じように思っていた人が多かったのか、例年よりも中高生ボランティアの数が少なくイベントの開催自体が危ぶまれていたが、ある一人の発言で私は参加することを決意した。

その子は、私の知り合いの高校生で、時々ボランティアにも参加していた子だった。その子にボランティアに参加するか迷っていると相談すると、「ボランティアは一人でも多い方がいい。たくさん来れそうにないのなら、来れる日に誰よりも働けばいいだけのことだよ。それに、お手伝いは義務じゃないのだから、重く考え過ぎなくていいと思う。」と言ってくれた。この言葉を聞くまで、人の役に立ちたいという思いで参加するべきボランティアを仕事のように感じてしまっていたのだと思う。

少ない人数での企画・運営は簡単なことではなかったが、児童館の職員の方もたくさん意見を出してくれたり、装飾の手伝いをしてくれたりと、とても支えてもらえたおかげで何とか当日をむかえることができた。当日は朝はやくから集合し、会場をセットしていく。イベントで使用する音楽を流しながら作業する時間は、ボランティアにしか味わえない楽しさがあると思う。だから私は準備の時間が大好きだ。そんなことを思いながら準備を進め、あっという間にイベントが開始した。普段、ボール遊びなどを行う体育館にマットでランウェイを設置し、仮装した姿で歩いてもらうと、恥ずかしそうにする子も多かったが、とても楽しそうに歩いている姿が印象深かった。ボランティアとして司会をしたり、案内をしたり、写真撮影をしたりと、とてもバタバタではあったが今までで一番役に立てたと実感できた瞬間だったと思う。

イベント終盤には、「中学生なのにえらいね。」や、「今年のイベントも楽しかったです。」などの言葉を多くの参加してくれた保護者の方から頂けた。また、小さい子供達からも、「ありがとう」と言ってもらえて、とても幸せを感じることができた。

私は、このハロウィンパーティーに参加したことで多くのことを学ぶことができたと思う。一つめは、支えてくれる大人のありがたさだ。中高生だけで企画・運営といっても、陰ながら私達を見守り、何をしたら

いいかがわからない時にはヒントを与えてくれた。改めて大人のすごさを感じたし、企画の難しさも痛感することができた。二つめは、ボランティアの楽しさだ。今回のボランティアを通して年齢がちがう中高生との仲も深められたと思うし、イベント終了後の達成感・充実感は忘れられないだろう。

あれから二年がたち、私は中学三年生になった。最近は受験が控えていることもあり、児童館に行けていない日々だ。すれちがう声をかけてくれる子供達を見ると、またボランティアに参加したいと思う。

先日行われた夏祭りでは、四つ下の小学六年生の子供が声を張ってボランティアをしている姿を見かけた。こうしてボランティア精神が受けつがれていることに驚いたし、とても嬉しいことだと思う。改めて、私にボランティアの楽しさを教えてくれた児童館に感謝したい。また、ボランティアの楽しさを一人でも多くの人に感じてもらいたいと思う。

Creation

大田区立大森第六中学校　一年
糸井主歩

人類の歴史はものづくりの歴史であると、僕は思う。石器や土器、鉄器の発明に始まり、農耕や牧畜、道路、車、飛行機と、人類は多くのものをつくり、自分達の生活を変えようとしてきた。ものづくりがあったからこそ、今の生活があるのだと思う。また最近では、多くのソフトやアプリ等、「物」としての形がないものづくりにより、僕達の暮らしが変わってきている。

僕は今から一年半程前に、そうしたものづくりに興味を持ち、プログラミングを始めた。しかし、そのような教室に行って学んだ訳ではなく、家で本やネットで調べながらやっていた。

プログラミングは、その用途（パソコンで動かすのか、スマホで動かすのか、等）により、様々な言語が存在する。僕が普段使っているPythonは、人工知能や数学の問題を解くのに用いられている。

そうしたプログラミングの中で最も喜びを感じるのは、新しいプログラムを作ったときでもアイデアを閃いたときでもない。自分の作ったプログラムを多くの人が見て、喜んでくれるときではないかと思う。

いくらすごいプログラムを作ったとしても、それを使う人が誰もいなかったとしたら、やったことは全て無意味になる。やはり使う人が喜んでくれるところを見るのがプログラミングの楽しさだ。

また、多くの人に自分の作ったものを見てもらえやすいのもプログラミングの良い所だ。普通の「物」では設計図を公開して作ってもらうか、展示会などで見てもらうしかない。しかしプログラミングなら、プログラムをインターネットに公開すれば世界中の人が見てくれる。そのような嬉しさとドキドキ感も、プログラミングでのものづくりのやりがいだと

思う。

しかしその反面、プログラミングには難しいところがある。コンピュータは円周率を一億桁計算するとか、人間には面倒なことも忠実にこなしてくれる。ただ、一つ文字をミスタイプしたり、書き方を間違えるとたちまちエラーになる。人間なら、例えばwhileをwhlieと書いていたとしても「あ、whileと書きたかったのだろう」と読み飛ばしてくれるだろうけれど、そうならないところが難しい。

また、以前まで使えていた機能がバージョンアップで使えなくなることもある。こうなると一からプログラムを書き直さなければならないこともあるので、かなり面倒だ。

しかし、もし「難しい」「面倒」という理由でコンピュータが開発されていなかったとしたら、どのような世界になっていただろうか。外出先から電話する、ボタンを押して計算する、ネット上で世界が一つになるなど、今当たり前になっている日常は遠い未来の夢物語になっていたのではないだろうか。

コンピュータだけではなく、今の日常があるのは、そうしたものづくりをしてきた人達のおかげであると言える。

農耕だって、最初は何度も失敗しただろう。しかしそこで諦めずに道具を改良したり、新しい方法を創ったりした先人がいたからこそ今もパンや米や麺が手軽に食べられるのだと思う。

偉大な発明家、トーマス・エジソンは、より長く光る電球を作るためにわざわざ日本の竹を取り寄せたという。そうして発明された白熱電球は、今のＬＥＤや蛍光灯の技術に繋がっている。ものづくりは、数百年、数千年後の歴史を変える存在だと思う。そうして変わった生活は、人々がより豊かに、便利になっている。笑顔になっている人がいる。

僕の小さなものづくりが数百年、数千年後の人々の暮らしや生活を変える、とは思えない。

しかし、身近な人に使ってもらうことでその人の暮らしを少し変えることなら出来るかもしれない。

そんな小さなものづくり、日々の生活を少し変えるようなものづくりを、これからも僕はしていきたい。使ってくれた人が笑顔になることをやりがいにしながら。

形にならない「モノ」

北区立稲付中学校　三年
伊藤　銀登

私は久しぶりに、ある図書館へ勉強に行った。職場体験をさせていただいた図書館だ。職場体験が終わってから何度かその図書館に行ったことがある。今回は職場体験でお世話になった方にお目にかかり、少し挨拶とお話をした。その時「およそ一年前、職場体験をさせていただいたなあ」と思い出した。

一年前の十月、私は三日間図書館で職場体験をさせていただいた。もともと図書館に何度か行ったことがあり、何をし

ているのかが気になっていたので体験してみようと思っていた。正直な所、「少し地味で単純な作業を繰り返す仕事」と考えていた。今ではそのような考えはなく、「何を考えていたのだ！」と昔の自分をしかりたい。昔の自分は図書館では「本の貸し出しをしたり、返された本を本棚に戻したりすること」などしか知らなかった。

しかし実際はまったく違った。具体的な仕事内容としては、配架（本を本棚に戻す作業）、予約資料を探し集める作業、選定などさまざまあり、いくつか実際に体験させていただいた。

特に心に残ったのが「児童選定作業」である。新たに図書館に取り入れる本を選ぶことだ。もしかしたら簡単なように聞こえてしまうかもしれないが、この職場体験の中で一番疲れた作業である。二、三冊の本をじっくり読み、チェックシートに感想を記入していく。チェックシートには、字の大きさ、表紙の絵、児童にわかりやすい本か、色あいなどさまざまな項目があって驚いた。そしてある程度読み終わると、話し合いが始まる。自分と同じ本を読んでいる人が何人かいる中で一人ひとりが、「この本を読んでどのように思ったか、小さい子どもにとって読みやすいか」などを話す。私はうまく説明できなかったが、職員の方は児童の気持ちになり、本について説明していたので、本当にすごいと思った。

他にも予約資料を探し集める作業が思っていたよりも大変で、集めなければならない資料が多く、「どこが単純作業だよ」と思った。また三日目には予約資料を早く予約された方に渡すため、資料を分類したり、番号をつけたりした。予約された方が図書館にいらっしゃった時、迷うことなく予約資料を渡せるようにという気配りだそうだ。

よく物作りの職人さんは「最高のモノを作るために日々努力している」ようだが、図書館は「形にならないモノ」を作るために日々努力していらっしゃるように思えた。図書館に来てくださる人がより本を探しやすく、読みやすく、より使いやすい図書館を作るため、読む人の気持ちになったり、利用している側から気づかない気配りをしてくださったり、他にもさまざまなことをし、形にならないモノを作っていっていると思う。決して目で見て、前よりよくなったと分かることのできるモノではないが、職員全体が一つとなり、努力されていてその姿を見ると、とても感動した。

私自身、努力した成果が目で見える、形でわかるモノ作りのほうが達成感などを味わうことができ好みであった。だがこの職場体験で、みんなで一つの形に表せないモノを作る大変さ、むずかしさ、しかしその中にある楽しさを味わうことができた。今では日々の授業はもちろん、クラスが一つとなり、「優勝」を目指す行事でも前より、はるかに楽しいように感じている。形のないモノを作る大変さや苦労、しかしその中から楽しさを見つけ、協力し合いそのモノを作っていくことの大切さをこの「職場体験」で学ぶことができた。これから先の人生、形にならないモノを作っていくことが必要に

なることが何度もあると思う。学習や勉強、行事や仕事などで、いくらやっても成果が目で見えず、あきらめてしまいそうになってしまうことは私にはあると思う。そのような時は職場体験で学んだことを思い出し、乗り越えていきたい。

図書館での職場体験、それは私にとって一生忘れることのできない、忘れてはならない出来事である。

ボランティア活動の大切さ

葛飾区立四ツ木中学校　三年
笹木雛夏

私は、中学生になって初めて「ボランティア」という言葉を知りました。「ボランティア」とは、自分から進んで社会活動などに無償で参加する人のことをいいます。ボランティアという言葉を知り、参加したことで、たくさんのことを考えるきっかけになりました。

私は、中学校一年生の時に生徒会本部役員に立候補しました。結果、見事当選することができました。生徒会役員の主な仕事内容は朝礼や生徒総会などの運営です。他にも地域ボランティアの主催などがありました。

私が初めて参加したボランティアは、学校内や近くの公園に落ちている落ち葉を拾いきれいにするはっぱ隊活動でした。生徒会役員は、落ち葉を拾うだけではなく呼びかけや道具類の準備などたくさんの仕事がありました。拾い終わった後、周りをみわたすとたくさん落ちていたはっぱがなくなり清々しい気持ちになりました。学校の先生方が「きれいになったね。ありがとう。」と声を掛けてくれたときはとても嬉しかったです。

次に参加したボランティアは、折り鶴のボランティアです。一九四五年八月六日・九日に落とされた原子爆弾による被災者のみなさんと平和への願いを込めて千羽鶴を折る活動を毎年行っています。生徒会役員の仕事は、活動の呼びかけと八月に行われる平和記念式典への参加です。活動を行う前に、どうして鶴を折るのか、どのようにしたらみんなが参加してくれるのだろうか考えました。考えることで、被災者の方々の気持ちを考える機会にもなりました。また、平和祈念式典では、被災者の方々のお話などを聞き今まであった「今を生きる私たちには関係ない」という考えがなくなりました。平和記念式典に参加せず、折り鶴のボランティアに参加しなかったらこの気持ちを背負ったまま生きていたと思います。大切なことを教えてくれたボランティア活動には感謝の気持ちでいっぱいです。

このようにボランティア活動を行うことにより、清々しい気持ちになり大切なことに気づくことができます。最近では、七月に西日本豪雨が起こりました。西日本豪雨での被害を少しでも早く少なくするために、たくさんの方々がボランティア活動に参加しています。その中には、嵐やゆずなどの有名人も被災地を訪れ復興活動を行っています。しかし、東日本に住む私たち中学生は西日本の被災地に行くことができませ

ん。西日本豪雨は西日本に住む方々の問題で直接関係することではありません。しかし、関係のないことと考えるのではなく、もし自分の住んでいる場所に豪雨が起こったらと考えることが大切だと思います。また、被災地の方々へ復興の意味を込めて募金活動が行われています。募金も一つのボランティア活動です。中学生もボランティア活動に参加できるということをたくさんの人に知ってもらいたいです。

私たちが生きている間にいつ震災が起こるか分かりません。もしも、最悪なにかが私の周りで起こってしまったら、ボランティア活動が行われてほしいと願うと思います。普段の生活から「もしも自分の周りで何か起こってしまったら」と自分で物事を当てはめて生きていくことが大切だと思います。

私は、大人になった時に人の気持ちを考え、行動できる人になりたいです。そのために今から人の気持ちを大切にすること。もし物事を自分に当てはめたとき自分はどう感じるのか。この二つのことを忘れずに生きていきたいと思います。しかし、私だけが意識しても何も変わりません。周りの人に意識してもらうには、生徒会活動で学んだ周りの人に指示する力をうまく使い、みんなを支えながら引っ張っていきたいです。この日本を今よりよくするために必要なことは、もしものことを考え相手の気持ちを考えサポートすることです。

日本を思いやりの心で満ちあふれる国にするためには、ボランティア活動を活発にすることが大切なのではないでしょうか。

男女の垣根を越えて

葛飾区立四ツ木中学校　三年
山口竜平

僕の将来の夢は看護師になることです。看護師の世界の約九割を女性が占めています。この結果からわかるように圧倒的に女性が多いのです。最近まで将来の夢は、医師でしたが、最近行った病院に男性看護師の方がいました。それを見て僕は、看護師ってかっこいいと思うようになりました。幼い頃から、人の役に立つ仕事や、命に関わる仕事に興味がありました。命というものに関わるにあたって、たくさんの勉強が必要になります。将来の夢という形で大きな目標ができた今、その目標に向かって、一歩ずつ進んでいきたいと思います。

現在、ほとんどの看護師は女性です。以前は看護婦と呼ばれていたほど、女性の職業でした。近年、男性看護師が増加しています。しかし、まだ世の中にはあまり浸透していません。先日、将来の夢について聞かれたとき、

「看護師になりたい。」

と言うと、

「どうして看護師なの？男の子ならもう少し他にあるじゃん。」

と言われました。その時、僕は男性も活躍できる看護師という道を切り開き、未来の子供たちに夢や希望を与えたいと思いました。女性が築きあげてきた世界に男性進出という、決して簡単なことではありませんが、諦めず努力したいと思います。看護師のように、男女の割合が離れている職業は、歯科衛生士や保育士もほとんどが女性です。助産師にいたっては、百パーセントと言われています。逆に自衛隊などは男性がほとんどです。このように男女差をなくそうと言っている今の世の中も、まだ男女差は残ってしまっています。なぜ、このような差が生まれてしまったのでしょうか。

それには、昔の考え方が関係していると思います。昔は男性が働き、女性が家のことをやるという考え方でした。そのため、力仕事や、土木工事、危険な現場などには男性が多いのだと思います。一方女性は、繊細な仕事や、人を育てる仕事など、普段の生活に近い仕事が多いと思います。互いに向いたものをして、互いに支え合って生き抜いてきた先人たちが出してきた答えが、今に受け継がれているのではないでしょうか。しかし、昔のやり方を続けているだけでは、進歩しません。我々人類が進歩していくためには、現代の人々は、昔の考えを古いと言って捨てずに、昔の考えを礎とした新たな考え方を生み出していかなければならないのです。それがきっと現代を進化させ、未来を作っていくのだと思います。

男性と女性が考えることは大きく異なることがあります。また、年齢によっても異なります。だからこそ、男性、女性の片方に偏った職業は、新たな考えを取り入れるためにも足りない人材を増やしていく必要があるのです。看護師になぜ男性が必要なのかと言うと、看護師には多くの力仕事もあるからです。例えば、救急外来では自ら動くことのできない患者さんが多いからです。仮に、患者が八十キロの男性の場合、二人の女性看護師がタンカで運ぶのは、かなり大変な仕事です。他にも、手術時に機械を使用することがあるので、それを運ぶことなどがあります。このような場合、男性看護師はいた方がよいのです。だからといって女性がいなくなってしまうと、女性の患者さんとのコミュニケーションや看護などの面で支障が出てしまいます。なので男性と女性のバランスがとれていることが一番大切なのです。先人たちが互いを支え合ってきたように、互いの得手、不得手を補いながら仕事ができる環境になればすばらしいと思います。一つでも多くの命を救い、一人でも多くの患者さんに安心した病院生活をしてもらうためにも大切なことは、男女のバランスがとれた病院にしていくことなのではないでしょうか。

そして僕は将来一つでも多くの笑顔を求めてがんばっていきたいです。看護師に必要な知識を身につけるため、しっかりと勉強していきたいと思います。また、人とのコミュニケーションが大切な職業なので、あいさつや人への感謝を忘れない人間になります。そのために、普段の生活の中で、部活動やクラブ活動なども手を抜かず、委員会活動などにも積極的に参加し、一つでも多くのことを学び、吸収したいです。自分自身も笑顔を忘れずがんばりたいです。そして、誰からも信頼される看護師になりたいと思います。

男女の垣根を越えて、一つでも多くの笑顔のために、一日一日を大切に生きていきます。

私とものづくり

江戸川区立松江第五中学校　三年
岩楯　愛菜

私は一緒に住んでいる祖母が大好きで、今でもとてもあこがれています。それは優しくていろいろなことを教えてくれるのですが、裁縫や手芸がとても上手で幼稚園や小学校で使う手さげや上履き袋に、果物を刺繍でとってもかわいく作ってくれました。

私は幼稚園に入る前から、「私もお裁縫で何か作ってみたい」とお願いしていましたが、「危ないからまだダメ」となかなか許してもらえませんでした。でも、幼稚園の年中で、ついに作らせてもらうことになりました。母や祖母と相談して、タオルに刺繍でムーミンのキャラクターを作ることになりました。

いざ作り始めるととても難しく、いびつな作品になってしまいました。でも祖母は「とても上手だ。初めてとは思えない」ととてもほめてくれました。私はその言葉がとても嬉しく、もっともっと上手になりたいと思いました。それ以来私は裁縫や手芸でいろいろな作品を作っていますが、「ものづくり」が楽しく大好きになりました。

学校でも技術・家庭科の授業で作品を作りますが、技術・家庭科が大好きです。テストは苦手ですが、「ものづくり」になると集中することができ、時間もあっという間に過ぎてしまいます。

家庭科の課題に、シューズ袋の作製がありました。縫い目は細かく丁寧に並びをそろえました。かわいくするために、スタジオジブリのとなりのトトロを題材にして仕上げました。キャラクターの製作では、ピンキングばさみを使用し、特徴を出すことができました。

技術の本棚の製作では塗装の際、丁寧に行い見た目はもちろん、触ってもつるつるになるようにしました。また、ほかの生徒と違う作品にしたくて、本が落ちないよう丸棒を付けて工夫しました。

二つの作品は区の展覧会の作品として選んでいただき、本棚は都の展覧会まで出品することができました。

祖母にそのことを伝えたところ、とっても喜んでくれて、とってもほめてもらいました。その時わたしは祖母に一歩近づけたような気がしました。

祖母から教えられていない部分を、技術・家庭科の「ものづくり」の授業から技術や知識を身に付け、自分だけのオリジナルの作品を作ること

ができたり、自分で修理することができるメリットがあります。しかし、それ以上に「ものづくり」を楽しいと感じられる自分自身の成長を感じることができています。

私は身の回りの物を作ることで、使う側と作る側両方の経験があります。作ることの大変さや作る人の気持ちを知ることができました。生活を便利にするためにアイデアを出し、実際に製作する楽しさも知ることができました。

私は将来どのような仕事をするのかはっきり決めていません。でも、技術・家庭科で学んだことは、いろいろな意味で私の人生に役に立つと感じています。技術・家庭科で学んだことを仕事にも役立てられるといいなと思っています。

ものづくりと夢

江戸川区立松江第五中学校　三年
髙　畠　雅　裕

私はものづくりが好きです。小学校に入る前から紙を切ったりはったり、組み立てたりして遊んでいました。小学校六年生で家庭科の授業で製作した作品が、東京都の作品展に選ばれたこともありました。

授業で習得した技術で、自分のグローブを修理したこともあり、達成感と充実感を味わうことができました。この達成感と充実感が私がものづくりに魅力を感じる点です。また、ものづくりにはある程度の制限があります。その制限をどのようにしてクリアするのかを考えることがとても楽しいのです。完成させたときのことを考えると、多少の難しい作業や地味で単調な繰り返しの作業でも苦になりません。技術・家庭科の授業でも作業の時間は夢中になり、とても短く感じています。

中学生になり、インターネットで様々な知識や情報を得ることができるようになり、今までより広い視野や、考え方で物事を見るようになりました。すると次々と試してみたいことや面白い発想の作品を考えることができるようになりました。

家で作業していても、良いアイデアがひらめいたり、自己流のアレンジを思い付くこともあります。使い方や目的が同じでも違う形になることもあります。技術の授業でも、いくつかの図案があり、自分に必要な役割のある図案を選び製作しました。その作品は現在自分の部屋で便利に使っています。

技術の授業では、木材を使ってのこぎりや鉋を使い本格的にものづくりができています。生活に役立つ作品を作っており、よりやりがいを感じています。やはり作業をしている時間が一番楽しく充実しています。

現在私は3年生で進路について考え、決定していかなければなりません。そんなある日父と母と一緒に将来のことについて相談する機会がありました。私の母は現在電話のオペレーターとして働いていますが、昔から裁縫が得意で、小学校で使用した手提げ袋は母の手作りでした。その手提げ袋を六年間壊れることもなく使い続けたのも、母の裁縫の技術が

高いからだと思います。他にも私の野球のユニフォームを手直ししてくれたり、靴下の穴を繕ってくれたりしました。今では自分でもできるようになりました。

私は将来ものづくりに関わる仕事ができればと考えています。幼稚園の年長から地域の軟式野球チームに所属していました。中学校から硬式野球チームに所属し、野球のグローブや野球で使う道具に関わる仕事に興味があります。好きなスポーツの分野で大好きなものづくりに関わることができればこんなに嬉しいことはありません。そのためにも、専門的な勉強も必要だと思いますが、積極的にいろいろな知識や技術を習得していきたいと思っています。

私の作った道具が広く使われたり、一流のプレイヤーが「私の道具が使いたいと」と言ってもらえる仕事ができれば最高です。

ちいさな先生

東京都立大泉高等学校附属中学校　二年
牛島栞那

職場体験先の幼稚園で出会った十八人の園児の笑顔を思い出す。私は彼らにたくさんの大切なことを教えてもらった。

事前訪問の日、副園長先生はここは少し変わった幼稚園だということをおっしゃった。障がいのある子供たちを積極的に受け入れているという。正直、とても不安だった。子供たちは障がいのある子と仲良くできているのだろうか。私は上手く接することができるだろうか。

職場体験の日になった。私が担当になっていたばら組に入ると、園児たちの賑やかな声が聞こえてきた。みんなが思い思いの遊びをしていた。そして満面の笑みを浮かべて私に近寄ってきた。私を「お姉ちゃん先生」と呼んでくれた。障がいのある子も、まるで障がいのあることを感じさせないように他の子供たちと仲良く話していた。体験中、特に心に残ったことがある。

みんなと一緒に何かをすることが苦手な男の子A君の話である。A君は自分の感情を抑えるのが苦手で、少しでも気に入らないことがあるとすぐに機嫌が悪くなってしまうような子だった。また、人見知りなのか、私が話しかけても返事をしてくれることはなかった。ある日、プールに入ったときのこと。プールから出る時間になってもA君は出たがらず、泣き出してしまった。私がいくら慰めようとしても「出たくない。まだプールで遊びたいよー。」と泣き叫ぶばかり。私にはどうすることもできなかった。自分の無力さが情けなかったし、悔しかった。

翌日、朝A君が来たときに「おはよう」と言ったら目は合わせてくれなかったものの、「おはよう」と言ってくれた。心を少し開いてくれた気がして、嬉しかった。そして、毎日つける名札には安全ピンがついている。いつもは担任の先生につけてもらっているらしいが、この日は先生が生徒の親御さんと話していて、忙しそうだった。その先生の姿を見て、

A君は今は先生に頼めないということを理解したのだろう。おずおずと私の所へ来て自分の名札を差し出し、「つけてください。」と言ってきた。先生の忙しい状況を理解し、ちゃんと他の人に頼めたA君を誉めてあげたい。つけた後、小さな声で「ありがとう」と言ってくれたことにも感動した。

職場体験最終日。その日は何事もなく一日が終わり、ついにみんなとのお別れを時間になった。三日間ずっと一緒に遊んできた小さな私のお友達に、一人ひとりハイタッチをしてさようならの挨拶をした。みんなと同じことをするのが難しいA君は帰りの準備が遅く、最後まで教室に残っていた。話しかけても返事はないだろうな、と思いながらも最後だと思うと淋しくて、「私、今日でもうバイバイになっちゃうんだ。」と言うと、予想外のことが。A君が初めて返事をしてくれたのだ。

「なんで？どうしてバイバイなの？」

「私も学校に行かなくちゃ。」と私が言うと、「じゃあ、学校がお休みのときはまた遊びに来てね。」

本当に嬉しかった。全く心を開いてくれていないと思っていたが、私を必要としてくれるなんて…。嬉しくて涙がこぼれそうになるのを隠して私は笑って、きっと行くよ、と約束をした。私の半分ほどしかない、ちいさなちいさな手と、ゆびきりをした。

私はこの三日間の職場体験で子供たちにたくさんの大切なことを教わった。三日間、ばら組の子供たちは私のちいさな先生だった。そして、彼らの笑顔だけで明日も頑張ろうと思えた。私は今日も私の十八人の先生たちの笑顔を思い出し、彼らに再び会えることを心から願う。

一つ一つを大切に

東京都立大泉高等学校附属中学校　二年

日野　希美

私の通う中学校では、中学二年の七月の三日間、職場体験が行われた。およそ二か月前から、事業所決めをはじめとした事前準備を行ってきた。私は職場体験で多くの学ぶことがあった。

私が訪問させていただいたのは、都内のある博物館だ。もともと私が歴史が大好きなこともあり、先生からすすめられた。みんなと違うことをするのがあまり好きではない私は、みんながスーパーマーケットなどの店に行くことになっているのに私だけ博物館の仕事を体験しに行くのは少しためらった。しかし、教科書にのっている歴史上の史料をたくさん見られるとなると私はとても嬉しくなった。こんなことで、私の訪問先は博物館に決まった。事業所が決まると、その職業調べに移る。私の場合は学芸員がそれにあたる。インター

ネットや本を使って、どうやったらなれるのか、給料はどれくらいなのか、そもそもどんなことをするのかなど、あらゆることを調べた。気の合う友達とたまに博物館に行くこともある私だが、学芸員という仕事について詳しく調べたことはなかった。私立の施設と国立の施設で差があるかもしれないが、国家試験に受かっても空きが少なくてなかなか勤められないという話もあった。見た目だけでなく、さらに詳しく調べながら自分の進路を考えていくことは大切だと改めて感じた時だった。

　このようにいろいろと調べながら体験当日へ備え、あっという間に初日を迎えた。私の家から体験先の博物館までは約一時間かかる。たった三日間ではあったが、満員電車に毎日揺られながら通勤する人達のつらさを実感した。私は学校まで徒歩で通学しているので、特にそう感じたのかもしれないが、あれが何日も続くとなると、慣れていてもやはり大きな負担になっているだろう。行くまでだけでも大変だったが、勤務が始まってからも多くの驚きや困難に出会った。その中から二つを紹介したい。

　一つめは、見る側からは分からない展示の難しさだ。私たちは一日目に、展示替を体験した。体験先の博物館には、「商品」「刑事」「考古」という三つのテーマに分かれた展示がされていて、その中でも商品のところの作業を手伝わせていただいた。ショーケースを磨くことから始まり、汚れ一つなくなるまでただひたすら拭いた。外から見たとき、一番見やすくなるようなきれいさを求める学芸員の方の目は真剣そのものだった。入念なガラス拭きを終えると、新しく展示するものをショーケースに置いていく。今回の場合は、現在の大河ドラマ「西郷どん」の舞台となっている熊本にちなんで薩摩切子の展示。ガラス製品なので特に注意が必要だった。どんな小さなものでも両手でしっかり持つことを徹底するように言われたことが心に残っている。展示品を大切にしていることは知っていたが、予想以上だった。

　二つめは、工夫だらけの収蔵室。それを、一歩踏み入れただけで発見した。扉を開けたと思ったら、少し間があって体のほこりをそこで取り、スリッパにはきかえ、もう一つぶ厚い扉を開けるとやっと入れるのだ。中に入ると、一つ一つ番号のついた大量の史料を見ることができた。私たちも、黒曜石にデータを表す番号を書く作業を体験させていただいたが、とても難しかった。

　私は今回の職場体験を通して、どんな細かいことにも反応して一つ一つ確実に対処していく姿を見てすごいと思った。他の訪問先と違って、人と直接関わることはあまりなかったが、地道な作業をコツコツ続けていくことの大切さを学ぶことができた。このことを、職場体験が終わった今から、日々の勉強や毎日の部活の練習のときなどに十分に活用できるようによく考えて生活していこうと思った。

高等学校の部　最優秀賞

誇りをもって

東京都立大島高等学校　三年
島　村　杏　樹

「あっ！メジロがいる！」私はカメラを持ってそっと近づきましたが、枝や葉が茂りうまく撮れませんでした。

ここは、私の通う都立大島高等学校の椿園です。この椿園は二〇一六年に教育機関として世界で初めて国際優秀つばき園に認定されました。開花期の冬には観光客が椿を見に来ます。特に私たち生徒が授業の一環で行う椿ガイドが人気で、これを目当てにされる方もいらっしゃいます。さらに大島高校の椿の魅力は、海外にまで広まり、フランスの画家が椿のスケッチをしに来ました。

二年生の夏休み、私は平成二五年の土砂災害からの完全復興や一〇年間で一〇〇〇人もの人口の減少に歯止めをかけ、五年かけて五万人増えた来島者をさらに増加させたいという思いから、アサヒ若武者育成塾に参加しました。各地の課題を解決しようと集まった全国の高校生に対し安易に「私の目標は島外の人に椿園を通じ大島について知ってもらうことだ」と大島の特徴を伝えました。すると「すごいね」と予想以上の言葉が返ってきました。魅力に気付けていないのは自分だったと思い知らされた瞬間でした。

「大島高校の生徒さん？」ある日の下校中、年配の方に話しかけられ、返事をすると「今日、椿園を見に行ったけど花が全然咲いてなかったよ。もっと整備しなきゃだめ！」とお叱りを受けてしまいました。ショックでしたが、すごく楽しみにして椿園に来てくれたのかもしれない。期待を裏切ってしまったと気付きました。

「内側に伸びている枝を切る」、「影の色を均一にする」、「丸みを持たせる」、授業で教わったことを思い出し、剪定していくと手が入っておらず見えなかった花がスッと見え、キラキラしていました。きれいだな、色んな人に見てほしいな。そう強く感じることができました。初めは興味がなかった椿も、自分自身が積極的に活動することにより、魅力に気づくことができました。そして、私が味わった感動をもっとほかの人にも味わってもらいたい。伝えたい。と思うようになりました。

剪定をきっかけに、私は課題研究のテーマを「椿園を魅力的にしよう！」にし、整備を行っています。それは、私が率先し、手本と

高等学校の部　最優秀賞　島村　杏樹さん

なり農林科全体として積極的に椿園の活動をしていきたいと思ったからです。そして、今の自分にできることを考え、農業クラブの会長となり、皆を引っ張っていこうと決意しました。そのために、私は農業クラブの活動である意見発表会で大島高校の椿園について発表し、都予選会では最優秀賞、関東大会では優秀賞を頂くことができました。さらに、神戸で開催された観光甲子園では「東京の島　伊豆大島　ＴＳＵＢＡＫＩ三昧の旅」という椿をメインとした大島のツアーを提案し、全国二〇〇件以上のツアープランの中から金賞を頂くことができました。

先日、放置された椿林を整備する活動に参加しました。これまでも三回行いましたが、今まで農林科の皆は乗り気ではありませんでした。そこで今まで以上に呼びかけると「参加します」「部活で遅れますが途中から参加します」とやる気を見せてくれました。当日は「これ、切っていいかな」「あそこの、切ったほうがいいんじゃない？」と一人一人が考え、相談しながら積極的に動いており、「実際に行動することが大切だ」と改めて感じることができました。農林科を巻き込むことができたなら次は町の人を巻き込もう！そう思い、広報で呼びかけ、椿の挿し木教室を行いました。「葉を三枚残し半分に切ってください」「枝を側面から挿してください」と説明をしていくと「挿し木ってなんでするの？」と興味を示してくれました。さらに今年は椿ガイドを行う回数を昨年よりも一〇回多い、二二回行いました。ガイドでは三八〇品種ある中からそれぞれ一〇品種選び、名前の由来や花の特徴を説明します。その結果、今までの三倍、合計三〇〇人を超える方々が来園しました。それにより交流が深まり、農林科の皆も詳しく調べるようになりました。

私は笑った顔が好きです。だからこそお客さんに「また来たい」「椿に興味を持った」そういって、笑顔で帰ってもらえる椿園にしたいのです。土砂災害で傷ついた大島を元気にしたいという思いで先輩方が取り組み、認定された国際優秀つばき園。次は私たちが受け継いだバトンを後輩に繋いでいく。これが使命です。島の資源を最大限に活用し、徹底的に磨き上げる、地域振興の活動に巻き込むことが、バトンを繋ぐことになると私は思います。

将来、私は大島で花卉農家として六次産業化を果たし、雇用を生み出します。大島の若者は仕事を求め島外に出ていくのが現状です。それでは地域振興どころかバトンすら繋げません。花を作って終わりではダメなのです。椿油とコラボレーションした化粧品の販売や地元洋菓子店と連携したエディブルフラワーケーキの製造など新たな取り組みが必要です。これから私は大島の農業を支えるリーダーとして雇用を生み、地域振興に若者を巻き込みます。「誇りをもって」これからの大島を支えていきます。

高等学校の部　優秀賞

コミュニケーションの大切さ

愛国高等学校　三年
佐藤未歩

高校二年生の秋に戴帽式を終え、いよいよ病院での臨地実習が始まりました。初めて実際に患者様を受け持たせていただきました。実習終了の日、まだまだ未熟な私をとても温かく見守って下さった患者様が「有難う。」と涙を流して言って下さった時、患者様のために立派な看護師になろうと、私は心から決意を新たにしました。

三年生での成人・老年実習は、二年生での基礎実習とは異なり、患者様の疾患について考察し、問題点を見つけて、その改善を考えて援助に取り入れます。先生方や指導者さんからたくさんのご指導を頂き、反省すべき点はたくさんありましたが、自分なりに成長したと思える点もありました。

それは、患者様とのコミュニケーションが上手くとれるようになったことです。基礎実習では緊張して思ったことを言えず、先生にフォローして頂いてしまいました。しかし今回は、お聞きしたいことを自分からお聞きし、患者様との信頼関係を自ら築くことができました。

成人実習で受け持たせて頂いた患者様は終末期の方で、何をするにも「嫌だ」と言って清潔ケアさえも拒否なさっていました。清潔状態が悪いと感染や皮膚トラブルをおこす可能性があると考え、患者様に入浴をお勧めしましたが、頑なに入ろうとはしませんでした。そこで私は、「傾聴」を行いました。傾聴とは、相手の話に耳を傾け、共感的な態度で聴くと言うことです。何故入りたくないのか、まずはその理由をお聞きしました。すると患者様は、「心臓がばくばくするの。」と答えて下さいました。私は「動くとばくばくしますか？」と質問を続け、「動くのが少ないようにしますので、暖かいタオルで身体を拭かせて頂いてもよろしいですか？」とお聞きすると受け入れて下さいました。その後洗髪をおすすめした時も、最初は「ここから動くのは嫌だ。」と拒否がありました。そこで私は洗髪の方法を詳しくご説明しました。病室で行うこと、寝たままで出来ることをご説明すると、驚いた顔をされながらも受け入れて下さいました。その方は補聴器を使用されていて、外すと何も聞こえない状態になってしまうので、「大丈夫」「つらい」など、患者様と補聴器を外す前に身振りでの合図を決めておくことにしました。洗髪後は「気持ちが良かった」「洗ってもらって良かった」と言って頂けました。患者様をしっかりと理解した上でその援助を考えること、更にその方法を詳しくご説明することで、患者様が安心できる援助を提供することが出来ました。

この患者様は、清潔援助の他にも拒否がありました。それは、私とのコミュニケーションです。実習では、患者様のご職業や私生活など様々な情報収集を行います。私は何よりも患者様とのコミュニケーションを大切にしようと心掛けていたのですが、私が患者様に質問をすると、「あなたに話すと

情報が漏れるから話したくない。」と言われてしまいました。基礎実習では拒否されたことが無かったので、私は衝撃を受けました。情報は絶対に外には漏らさないということは実習最初のご挨拶の時にお約束していましたので、そのことについてもう一度お伝えしましたが、それでも教えては頂けませんでした。しかし、情報を知らなくては患者様の問題点を見つけることが出来ません。そこで私は、患者様との信頼関係を築くために、患者様の言葉に耳を傾け、患者様の望んでいることを援助として提供しようと考えました。

最初は手探りでしたが、患者様のベッド周りを観察してみると、寝たままで物が取れるようになっていることに気が付きました。そこで、コップの位置やゴミ箱の場所など、援助後には必ず患者様に声を掛けるようにしました。すると「あら、場所を覚えてくれたのね。」と声を掛けて下さり、それからは「ここを拭いてほしい」「布団が重いの」などといった要望が患者様の方から聞けるようになりました。私はそれらの要望を出来るだけ叶えられるように、「他に拭いてほしいところはありませんか？」と清潔ケアの時に声を掛けたり、「軽い布団が無いか、看護師さんに聞いてみますね。」と声掛けをしたりしました。その甲斐あって、あと一週間で実習が終了するという時には、「あなたには何でも言えるわ。」と患者様から言って頂くことが出来ました。

今回の臨地実習では、初めて患者様に拒否をされました。患者様の立場になれば、誰かも分からない人間に自分のあれこれを話すのに、躊躇するのは当たり前の事です。「拒否があってもめげずに、時間を空けてから改めて声を掛ける方が良い」という事を先輩方の話や看護雑誌などで知っていたため、私はゆっくりと時間を掛けて患者様とコミュニケーションを取っていきました。患者様と毎日コミュニケーションを取り、信頼関係を築くことで、患者様の笑顔も増えていきました。日を重ねるごとに患者様との信頼関係が築けていることを実感し、とても嬉しく思いました。私はこれからも、今後出会うであろう患者様の笑顔がたくさん見られるように頑張ります。患者様とのコミュニケーションを何よりも大切に、その身の周りや言動をよく観察し、安心できる看護・援助を提供出来るように、もっともっと努力していこうと心に誓いました。

樹木医を目指して

東京都立農芸高等学校　二年
大　野　千星織

皆さんはどこで植物を身近に感じますか？。山や公園など、恵まれた自然がたくさんあるところを思い浮かべる人が多いと思いますが、私の一番のフィールドは街です。

世界では環境問題が叫ばれていますが、どこか他人事で、一人の力では効果を実感できる取り組みが少ないように思います。農芸高校の授業を通して環境問題は世界的な規模の課題だけではなく、もっと地域と密着した暮らしの中にもある

ことに気が付きました。私たちの世代は、この地域と関わりのある環境問題に、積極的に関わっていくべきです。

私が小学生のときの自由研究のテーマは、「タネ集め」です。学校の通学路や、公園などで見つけたタネは片っ端から袋に入れました。最終的に集めたタネは100種類を超え私はとても嬉しく、たくさんの色や形、大きさの違いがあることに驚きました。

この出来事を高校生になった今、振り返ってみると、緑豊かな環境で暮らしていることがいかに幸せかということ、また実習を通して植物を育てることの難しさや大変さを実感しました。さらに、私がタネを拾っていた地域の樹木は、自然に育っているのではなく、しっかり管理してくださっていた方のおかげだったのだと気が付きました。そこで私に、できることは何かないだろうかと考えるようになり、将来は樹木医になって東京の街で育つ樹木の手助けをする活動がしたいと考えるようになりました。

春になるとソメイヨシノが咲き、日本全体がサクラの開花を楽しみにしていますが、サクラの木の寿命は何年なのかについては考えたことがあるでしょうか。樹木というと数百年も生きるのが普通のように思いますが、ソメイヨシノは60年生きれば長い方だと言われています。実際、100歳を超える木は少なく、これらは若返りという作業を繰り返し100歳まで生かされていることが多いようです。江戸から愛され続けたソメイヨシノのサクラは、古くからあるものを鑑賞しているのではなく、人の手によって世代交代を繰り返されてきたのです。このことから、私は暮らしの中の植物と人との関係の大切さを知る必要があると思うと同時に、私たち農業高校生がもっと活動や行動を発信していくべきだと思います。

私が住んでいるところは杉並区高円寺です。「杉並区緑の実態調査」の結果によると緑被率が約12・5％と区内で最も低い地域です。そのため、杉並区では「みどりのベルトづくり」という取り組みをしています。「みどりのベルトづくり」とは、近所の人達と家の周りに植物を植え街の景観を良くする活動で、私は今でも参加しています。花や木は区から提供された苗を使い、子どもと大人が一緒に楽しみながら作業します。

園芸科学科の実習に、阿佐ヶ谷駅花壇の植栽実習があり、きっと「みどりのベルトづくり」と同じだと思っていました。しかし、実際に実習をしてみて大きく違うところがありました。それは、植栽に使われる苗への思い入れがあることです。植栽実習は、授業で管理をした苗を使います。例えば、出荷時期を調整するための摘花や、花数を増やすための摘蕾などの手入れをします。そして、苗の成長の具合を見ながら植栽に使う苗を選抜します。この実習で、今まで丁寧に管理してきた花たちを、駅を利用する人達に見てもらえることがとても嬉し

く思いました。街の中に植物を増やすためには、人が管理していくことが必要で、高校生でも地域の環境活動に積極的に関われる活動は身近にあるのです。

私は実習で、植物が育つ過程での根っこの存在にとても興味を持ちました。農業と環境の授業でミズナの収穫をしたときに、変種のミブナが混ざって生えていたので収穫してみました。ミブナはミズナの根に比べて10倍以上の太さの主根が生えていたのでとても驚きました。また、エダマメの根と共生している根粒菌の存在や、また柔らかい土があることでまっすぐ成長できるダイコンなど、作物にとっての根と土壌の大切さを学びました。

一方、街の樹木の根と土壌の関係をみると、街路樹の根の部分はアスファルトやレンガに覆われてとても窮屈で、ストレスが多いように感じます。樹木だけではなく、街の植物たちもストレスを抱えています。私は樹木医になって、このような街の植栽の環境問題について呼びかけていきたいです。

私は樹木医を目指す第一歩として草花や野菜の栽培で作物の根と土の関わりについて学びたいと考えています。杉並区の「みどりのベルトづくり」を経験することで、高校生や子ども達、またお年寄りの方々が環境活動に一緒になって取り組むことができました。草花や、野菜の栽培管理もできる樹木医を目指せば活躍の場面が多くなり、植物を介して人と人とを繋ぐ活動ができると思います。

樹木医とは1991年に林野庁が主導してつくられた制度で、天然記念物の樹木から街路樹や庭木の管理、環境汚染の検査や後継樹の育成などを樹木医としての立場で行う職種のことです。樹木医が樹木を管理するということは、これらの技術を用いて緑豊かな生活環境をつくり、維持管理を行う責任のある仕事です。花や、野菜は種から枯れるまでに立ちあうことができますが、樹木はその寿命の一部の期間を私たちと過ごします。ですから、私たちは次の世代に樹木を受け継ぐ責任があり、大切にしていきたいのです。このためには、園芸科学科で植物の基礎知識や栽培技術を身に付け、卒業後は樹木医補の単位が取れる大学に進学し、樹木医になるための実力を身に付けていきたいと思います。そして将来、人と植物の間を取り持ち、たくさんの人に植物の魅力を伝え、身近な植物に関心をもってもらえるような樹木医になりたいです。

東京しゃもから教わったこと

東京都立瑞穂農芸高等学校　三年
木村　実佳子

「毎日の食卓に、東京でとれた美味い肉を届けたい。」これは、私の尊敬する養鶏農家さんの言葉です。

江戸時代の日本では、日常的に軍鶏の肉が食べられていたことを知っていますか。その味の良さと手頃さから、庶民の間で親しまれていました。しかし第二次世界大戦後、アメリカからやって来たブロイラーの普及により軍鶏の流通量は激

減しました。しかし、当時の軍鶏の味を知る人達からの「軍鶏の肉をもう一度食べたい。」という声に応えるべく、ここ東京で「東京しゃも」は誕生しました。

そんな東京しゃもとの出会いは、私にたくさんのことを教えてくれました。

私が通う東京都立瑞穂農芸高等学校には、東京都で唯一畜産科学科があります。さまざまな家畜と触れ合いながら、日々多くのことを学んでいます。

畜産科学科では、昨年「東京しゃもプロジェクト」が発足。私はリーダーとして約二年間、活動をしてきました。プロジェクトの目的は、東京しゃもを使ったオリジナル商品の開発。実際の飼育から、加工、商品の販売までを自分達で行います。これまで家畜の飼育を中心に学んできた自分にとって、食品の製造や開発といった経験は全くありませんでした。ですが、出荷後の全てに携わることができたなら、きっと新しい発見があると、当時の私はワクワクしていました。

東京しゃもを扱うにあたり、まず初めに東京都あきる野市で東京しゃも生産組合の組合長も務める浅野良仁さんを訪ねました。

東京しゃも誕生から三十年。飼料の開発や飼育環境の設定など、これまでたくさんの苦労を重ねて今があると、浅野さんは話してくれました。

東京しゃも生産の最大のこだわりは、飼育から加工、卸売までの全てを東京都内で行うこと。当時「東京＝農業の衰退」そんなイメージを持っていた私は、東京で全てが行えるのか、疑問に感じました。

年間の生産量は約二万羽と、決して多くありません。また、現在生産しているのは都内十四件のうち四件の養鶏場のみです。さらに浅野さんの話では、東京しゃものような少ない出荷量の解体を行ってくれる処理場も減少しているということでした。

都内での生産にこだわることは簡単ではないことを知りました。それでも、「自分たちの手で、良いものを届けたい。」そう語る浅野さんの姿を見たとき、こだわりを貫いた生産を行うからこそ、やりがいを感じられるのだと感じました。

この日を境に、私はこのプロジェクトを通して、自信を持って届けることができる商品を作り、東京しゃもに込められたたくさんの想いを多くの人に伝えていきたいと強く考えるようになりました。

そしていよいよ飼育を開始。活動一年目はまず生産の基礎を作るべく、飼育方法の検討を行いました。従来の飼育はケージ飼いですが、私達はあえて、雛が自由に運動できる平飼い飼育とし、三十五羽の雛を導入しました。軍鶏の血を濃く受け継ぐ東京しゃもですが、実際はとても臆病でした。ですが、毎日雛と触れ合うことで次第に慣れていくのを実感することができました。成長の過程も産卵鶏やブロイラーとは全く違い、飼育して初めて知る様々な発見がありました。

こうして、百二十九日の飼育を終え、屠畜、解体を自分達で行いました。愛情を注いできた分寂しさもありましたが、その美味しさには自信がありました。そして、いよいよ商品開発に向けた取り組みを始めました。まず話を伺ったのは、本校の卒業生で、群馬県上野村の農協でイノブタを使った商

品開発に携わる小池銀太さん。商品開発の流れやポイントについてアドバイスをいただきました。

どんな商品を作るか私たちは何度も議論しました。東京しゃもの食材としての魅力を最大限引き出し、製造を自分たちで行えるもの。その結果、東京しゃもを使った親子丼の素を作ることにしました。親子丼であれば、大人から子供まで親しみやすく、食卓のメインになります。さらにレトルト食品に加工することで、長期保存ができ、消費者がより手軽に購入できると考えました。

さらに私たちは、「東京産にこだわる」をモットーに食材の調達を検討しました。瑞穂農芸には、畜産科学科だけでなく、園芸や食品を学ぶ学科が複数あります。そこで、親子丼の原料である卵や玉ねぎの生産、さらにレシピの開発や商品の製造全てを校内で行い、”メイドイン瑞穂農芸“を実現させたいと考えました。

その他にも、パッケージデザインや紹介パンフレットの作成も行いました。東京しゃもの特徴やその背景、自分たちの取り組みを知ってもらえるよう、細部まで工夫を凝らしました。私達はまず、文化祭での販売を目標に、活動を進めています。試作品づくりや企業との連携など、クリアすべき点はいくつもあります。このプロジェクトはまだまだ始まったばかりですが、私達には、「こだわりを貫く」という揺るがない目標があります。その実現に向け、さらなる努力を続けていきます。

このプロジェクトを通して東京しゃもに出会い、私の生活は大きく変わりました。生産に誇りとこだわりを持つこと。愛情を込めて飼育をすること。好奇心や探求心を持ち続けること。東京しゃもに出会わなければ、知ることのできない世界がたくさんありました。そして尊敬する農家さんに出会い、自分が理想とする農業の姿を見つけることができました。

私たちの活動が実を結び、いつか商品が完成したとき、食卓でこんな声が聞こえることを夢見ています。「美味い！」

高等学校の部　佳作

未来へ導く仕事

愛国高等学校　三年
平野郁美

「小児科の看護師になりたい。」そう思うようになったのは、小学校六年生の時でした。そのきっかけとなったのは、自分自身が小児科に入院したことでした。

私は小さい頃、とても活発な子供でした。身体を動かすことが大好きで、毎日のように走っては転んでを繰り返し、必ずと言っていいほど膝に絆創膏をつけて幼稚園や学校から帰ってきたと母はよく話してくれました。マラソン大会でも毎回十位以内に入るほどで、「健康優良児」という言葉がぴっ

たりの元気な子供でした。ところが、小学校の高学年頃からすぐに疲れるようになりました。毎日のように頭痛がしたり、マラソン大会の順位も徐々に下がり、後ろから十番目くらいにまでになってしまいました。先生からはやる気がないのではないかと言われることもありました。更に、階段を上るのも息が切れてしまって辛くなり、身長も伸びなくなりました。今思えばおかしな症状が現れていたのだと分かりますが、その当時はそれほど気にすることなく過ごしていて、母にも特に相談もしませんでした。

小学校六年生の春、運動会を終えて帰宅した私を目にした途端、母はとても慌てた様子で体調を問いました。私は特に体調が悪かったわけではありませんでしたが、その時の私の顔色は普通ではなかったと、後に母からは聞きました。母は、前々から私の顔色の悪さや家での様子などを気にしていたようで、これを機に病院を受診することになりました。血液検査の結果、私には「ヘモグロビン」というものが正常値の三分の一しか無いことが分かりました。それがどういう状態なのか、その時の私には理解できませんでしたが、検査して下さった医師がかなり動揺していたことや、更なる検査のために他の病院への紹介状を書いて下さったことなどから、幼いながらに自分が大変なことになっていることを察しました。私と母は、不安なまま紹介された病院へと向かいましたが、到着した頃には既に外来は終了していて救急外来に案内されました。その薄暗さと訳の分からない不安でいっぱいになり、私は涙が溢れていました。そんな私を見た看護師さんは、「大丈夫、大丈夫。びっくりしたね。」と優しく声を掛けて下さいました。その後点滴をつないでいる時もたくさんのことを明るく笑顔で話しかけて下さり、そのお陰で私は緊張や不安が小さくなっていきました。

それから小児科に入院することになりました。小児科には私の他にもたくさんの子供たちが入院していました。私よりも小さな子、骨折をして腕を吊っている子、点滴をしている子。中にはどこが悪いのか分からない子もいました。そんな子供たちが本を読んだり、ブロックで遊んだりしている様子を優しく見守っていたのは看護師さんたちでした。小児科の看護師さんたちは、まるでその子供たちのお母さんのように思えました。子供たちの中には、まだ幼くて母親と離れることに不安な子もいるでしょう。しかし、本当の母親が入院中の子供に二十四時間付きっきりでいることはとても大変で難しいことだと思います。だからこそ小児科の看護師には、患者である子供たち、そして子供を預ける家族との信頼関係を築くことが大切であり、看護技術はもちろんのこと、コミュニケーション能力がとても必要であるということが、今の私にはよく分かります。

小児科は、子供たちを未来に導くお手伝いをしている科だと考えています。命を救うということだけでなく、未来ある子供たちの人生に訪れた「病気」という試練に救いの手を差し伸べる役割を担っていると感じているのです。私はそう考えるようになってから、小児科の看護師になりたいと思い始めるようになりました。

そんな目標が出来てから、様々な人たちとの良好なコミュニケーション能力を身につけられるように、私は周囲の人た

ちを一層気に掛けるようになりました。私には自閉症のはとこがいます。それまでは「はとこは自閉症なんだ」としか考えていませんでしたが、目標が出来たことで、はとこともっともっとコミュニケーションが取りたい、そのためにも自閉症について知りたいと思うようになりました。調べてみると、常人には無い特異な能力があるということが書かれていました。例えば、見ただけで物の数が分かるとか、目にしたものをそのまま記憶することが出来るなど。はとこにはどのような能力があるのか知りたくなり、私ははとこをじっくりと観察してみました。私の家に遊びに来たはとこは、楽譜も何も見ずに色々な曲をピアノで弾きました。とても簡単そうに弾いていることに驚き、どのくらい練習したのかと聞いてみると、「聞いただけ。」と、はとこは当たり前のように言いました。その瞬間、これだと私は気がつきました。はとこの能力は、一度聞いただけでその曲をピアノで演奏できるというものだったのです。

はとこの持つ自閉症は「障害」と捉えられる傾向があります。しかし、その「障害」を長所にして生きてきた人はたくさんいます。例えば、レオナルド・ダ・ヴィンチやアルバート・アインシュタインも自閉症だったと言われています。障害の有る無しに拘わらず、子供の長所短所をきちんと理解し接することも、小児科の看護師にはとても大切なことだと思います。一人でもたくさんの子供たちを未来に導くお手伝いが出来るよう、これからも一生懸命に学習し、理想とする看護師になれるように日々努力していきます。

簿記と将来

愛国高等学校　三年
田中　栞里

私は愛国高校の三年間で多くの「商業」という科目に触れ合ってきました。「商業」というのは、主に物の売り買い、生産などの経済活動のことを言います。と、とても簡単に説明が出来ますが、私はもっと奥が深く、三年間学んできたからこそ分かる「味」というのがあるのではないかと思うようになりました。私が三年間「商業」について学んできたことをいくつか述べたいと思います。

私は高校に入学して初めて「簿記」というものに触れました。簿記検定を受けたことがある母から簿記という言葉はよく聞いていましたが、具体的にはイメージできないでいました。実際に学習し始めて、私の想像していた以上に難しく感じました。物を仕入れたり売ったりした時の仕訳など私達の生活に多少関係のある単純な仕訳ならば分かるのですが、利息などの複雑な仕訳にとても苦労しました。さらに貸借対照表や損益計算書、精算表などの表が出てきてもっと分からなくなってしまいました。授業回数が進む度に、何となく分かっていたものがだんだんと分からない問題も増えてしまいました。そこで、授業が終わった後に先生に教えて頂いたり、資格を持っている母に教えてもらったりと自分の納得のいくま

で、多くの人に助けてもらいました。その甲斐あって、高校一年生で全国商業高等学校協会簿記実務検定三級を取得することが出来ました。その時はとても嬉しかったことを覚えています。

私の学校は二年生に進級するときに学科選択が出来ます。私は本当に悩みました。周囲にアドバイスを求めても決まってと言って良いほど「好きな方を選べばいいよ」と言います。簿記を学んでみて、私は計算の答えがピッタリ揃うあの爽快感がとても好きになりました。商業科の会計コースに進んだら、深く学ぶとともにあの爽快感を味わうことが出来る。迷い続けた結果、商業科の会計コースに進むことを決意しました。進級すると、聞きなれない用語や新しい方法などを習得することは難しくもありましたが、それまでに基礎を習得していたので、楽しくもありました。二年生になると、商業簿記だけでなく、工業簿記も学ぶことになりました。工業簿記は主に製品が完成するまでの工程で行われた材料の管理をする簿記です。工場内での必要経費などを製品別に集計することです。頭の中で考えて仕訳に起こして表に書き出したり、製造間接費の配賦をしたり、配賦した時に発生する差異の計算をするなど、私達の普段の生活ではほとんど関係のない、未知の領域でした。次第に授業内ではついていくことが出来ず、テストでも成果を残せずスランプのような状態になってしまいました。しかし、先生方に放課後たくさん教えて頂き、そのおかげで全国商業高等学校協会簿記実務検定の原価計算部門で二級を取得する事が出来ました。頑張った分成果に残すことができ、本当に嬉しく思いました。三年生になって、より上級を目指すべく努力を継続していますが、なかなか成果に表れません。残り半年の高校生活ですが、私の目標である全国商業高等学校協会簿記実務検定一級、そして日本商工会議所簿記実務検定二級取得に向けて努力を続けたいと思います。

私の将来の夢は、これらの取得した資格を活かして事務職のプロフェッショナルとして一人前になることです。高校卒業後は就職することを希望しています。高校に入り簿記を深く学ぶなかで、一生学んでいきたいと思うものに出会うことが出来ました。私はもともとコツコツと物事に取り組むことが好きなので、じっくりと計算書にも向き合い、これまで乗り越えて身につけてきた学習を活かして頑張りたいと思っています。愛国高校に入学しなければ、この将来の夢は描かなかったかもしれません。今は目標に向けて全力でぶつかっていこうと考えています。まだ、周りの人に助けていただくことも多いですが、自分に出来ることから取り組んでいきたいと思います。

私の進む道

愛国高等学校　二年
渡部　エマ

義務教育を終えて、高校生また看護学生となってから約一年が過ぎました。二年生に進級し、専門教科は五教科から現在八教科に増え、基礎から疾患別へ。成人看護、老年看護などの発達段階別へと広がっていきました。私はその中でも、人の臓器や細菌による目に見える病気より、先天的異常による精神疾患について興味を持つようになりました。これらの疾患により日常生活で引き起こされた社会とのずれや、ストレスに悩まされ辛い思いをしている方についての「精神看護」への理解を深めたいと思うようになりました。

「精神看護」は入学して教科書を頂いたときから気になっていた教科でした。私の母の妹、つまり叔母にあたる方が知的障がいがあり、その実際をもっと理解出来るかも知れないと思ったからです。授業を受けてみると、その内容は知的障がいだけでなく、うつ、対人関係が上手くいかない障がいなど、沢山の種類の障がいがありました。

日本の社会、また世界各国の多くの社会では、「皆同じ方向を向いて物事に取り組む」ことが普通のことだと考え、その能力は子供の頃に家庭や学校においてある程度習得されます。しかしその習得の段階でつまづいてしまった人、違う考えを持ってしまった人は、その輪から外れてしまうということが起こります。習得できた人は健常者、できなかった人は少数派、社会的弱者と言われ、二者の間には厚い壁が存在していました。このことについては、現在見直され始めています。皆同じことができなければならないという最初の定義が難しすぎたのだと思います。

この運動はヨーロッパなどで法律が整備され始めこの壁は薄くなっているのにも拘らず、日本では動きが小さいように感じます。まだまだよく理解されていない注意欠陥多動性障がい、トランスジェンダー、について書いていこうと思います。

注意欠陥多動性障がいとはＡＤＨＤとも呼ばれ、不注意、多動性、衝動性が主な症状です。例えば、一つの物事を集中して行えず気が散って他のことを始めてしまう、落ち着きがない、思ったことがすぐ口に出てしまう等が行動に出ています。本人はほとんど無意識に行っていたり、気がついている人は社会の生きにくさを感じていたりします。生活環境によっては子供の頃に症状が治まる場合もあります。この障がいについての適切な対策はまだ取られていないのが現状です。学校や職場等集団生活の場では、周りの人と同じことができないと言われ、人の輪から浮いてしまうことがしばしばあります。私はこのＡＤＨＤを一つの「個性」と考えるのが正しいのではないかと考えています。この障がいは生活環境で症状が軽くなる可能性があります。周りの人と同じことができないという固定観念で決めつけるのではなく、手を差し延べて一緒に過ごすのが一番だと思います。本人も周りの人も、この個性に目を向け、認め、助け

合うことが大切だと思います。

トランスジェンダーとは、心と体の性別が一致しない人のことです。お茶の水女子大学が戸籍上では男性でも自らの性別を女性としているトランスジェンダーの学生を二〇二〇年度から受け入れることを決めたというニュースがありました。このニュースを聞いたとき、驚きとこのような傾向について理解されてきていることを嬉しく感じました。何十億という人が生きているこの世界では別の考えを持っている人がいるのは当然のことでしょう。このような考え方の異なる人にとっても住みやすい社会であってほしいと思います。

さて、知的障がいのある私の叔母についてですが、現在祖母と祖父の三人で暮らしています。ヘルパーさんや叔母の仕事場である作業所と常に連絡を取っている祖父母の姿や、叔母がパニックを起こしてしまい、手に負えなくなる場面を何度も見てきました。そんな叔母ですが、家にいる時は家事を手伝い、私達が遊びに行って話しかけると優しく微笑んでくれます。私達親戚からすると叔母が「障がいのある人」という特別な見方をすることはありません。しかし世間では「障がい者」なのです。一人で行動できなかったり突拍子もなくパニックを起こして周りに迷惑をかけてしまうことがあります。障がいについての認識や理解は広まってきていますが、私が次に気にかけてほしいと思うのは、障がい者の世話を行う家族やヘルパー等の役職の方々についてです。

障がいがあっても安全に安楽に暮らしているのには周りの方々の力があります。私は障がい者とその家族を支える立場に立ち、健常者と障がい者との間に壁ができないような社会にするための仕事をしたいと考えています。

精神看護の授業が終わったある時、私は「精神疾患や障がいのある方々の看護は難しいのでしょうか」と先生に質問をしました。先生は、難しいがやりがいがあることだとおっしゃいました。更に、患者様に寄り添うこと、同じように喜んだり悲しんだりすることが大事だということ、そして私が叔母と過ごした中で得られた経験と知識が力になるとおっしゃいました。

傾聴する姿勢や患者様に寄り添うことは、どの分野の看護でも同じですが、親戚に障がい者がいるからこそ分かることが多くあり、それを看護につなげることができると知り、私は障がいのある方がいらっしゃる施設で働きたいという思いを強くしました。

今はまだ厚く感じられる壁ですが、いつか、その壁がなくなる日がきますようにと願わずにはいられません。しっかりとした看護の知識と技術を身につけていきたいと思います。

食べることは全ての人間に与えられた財産

蒲田女子高等学校　三年
池田彩乃

私の将来の夢は管理栄養士になることだ。幼い頃から栄養士だった祖母の影響を受け、栄養士という職に憧れを抱くようになった。

将来の夢を考えだした頃は、食べることが好きで料理を作ることも好きな方だったし、将来は必然的に食に関わる職に就きたいという大まかな夢だった。そんな私がはっきりと管理栄養士を志すようになったのは中学2年生の冬だった。栄養士だった祖母が怪我をして入院した。そんな祖母が病院食に手をつけないという話を医師から聞いた。祖母に理由を聞いてみると、「美味しいと感じない料理は初めて。」と一言。確かに食に関しては人一倍厳しくうるさい祖母ではあったが、あんなにも冷酷な顔をして言葉を発する祖母を私は初めて見た。

高齢社会が進む今の日本では、私の祖母のように食べることが億却になっている人が多い。それは、病が原因で調理法や味付けに制限がかかっている人や皆と一緒に食べたり、誰かと一緒に食べることが出来ない、いわゆる〝孤食〟と言われる状態で食事をしている人がいるからだ。祖母を筆頭に食べることの楽しさを忘れた方々を一人でも多く救いたく思い、日本だけでなく世界中に食と笑顔を広めていけるそんな管理栄養士になるのが今の私の大きな夢だ。

高校生になった私は、2年間フードコースで食について様々な視点から学ぶことに注力してきて、また、フードコースだけでなく2年間福祉委員会に所属し3年間を通して学んだ医療福祉の授業で、福祉についての関心・意欲を深めた。フードコース、福祉委員会この2つの活動を経て私は、学び得たものが沢山ある。

フードコースでは、2年の春に千葉の館山にて田植えを体験した。3年の春に完成した稲を刈りに行く。完成したお米は、米粉にして近くの商店街にあるパン屋さん協力のもとフードコース全員で考えたパンを作って販売した。小麦アレルギーが原因で、パンが食べれない方でも食べれるよう米粉パンとして販売した。また、今年は自分たちの学校がある〝大田区〟と〝パン〟を掛け合わせたものをもとに、各々がパンのデザインを担当した。羽田空港が近いことから飛行機と空を連想した、「雲パン」。大田区の鳥である〝鶯〟を見立てた抹茶味の生地の中にチョコクリームを入れた「うぐいすパン」など計6種類の米粉パンを完成することが出来た。文化祭や、大田区の観光展などで販売し、全部売り切ることができた。この他にも、高校最後の文化祭では3年フードコース16人で力を合わせてカフェを出店するなど〝食〟だけでなく、コミュニケーション力や協調性を得ることができた。

福祉委員会では、近くの障害者施設や介護・福祉施設等に

ボランティアとして伺い活動を行ってきた。また、私の学校は特に医療福祉に力を入れており3年間を通して福祉の授業を受ける。授業内容は、座学を中心に車椅子や実際に病院で使われているベッドを使ったベッドメイキング等の実技の授業もある。様々なボランティアに参加する機会が多かった為、具体的に将来について考えることが出来た。

高校3年間を通して将来の夢が具体的になるだけでなく不得意だったことが伸ばせた。フードコースでの職場体験・現場実習では、実際に保育所で働く栄養士さんの仕事を経験し、福祉の授業や福祉委員会では様々なボランティア活動を行ってきた。誰かの為に何かをすることに対しての〝やり甲斐〟を色々な場面で感じることができた。だから、自分の将来の目標が確立してきたのだと思う。これまでの人生を振り返ると、沢山の人のお蔭でここまで来れたと実感することが増えた。両親を含めた家族や親族、18年間生きてきて出会った先輩や友人、そして先生方。沢山の人の支えがあったからこそ今、私はこうして毎日を楽しく過ごせているんだと思う。将来の夢に揚げた、〝食べることの楽しさを日本だけでなく世界中に広めていける管理栄養士になる〟ということ。まだ、スタート地点にさえ立てていないけれど1人でも多くの人々に〝食と笑顔〟を届けていけるよう日々努力を重ね、挑戦することを怖がらず何事にも全力で頑張りたい。日本のみならず世界各国で聞く〝餓死〟という言葉。私の将来の夢にはこの、〝餓死〟という言葉がこの世の中から無くなって欲しいという意味も含んでいる。それは、〝食べることは全ての人間に与えられた財産〟だと私は思うから。

輝く medical technologist

日本工業大学駒場高等学校　二年
髙橋桃葉

私は将来、病の早期発見で社会に貢献できる臨床検査技師になりたい。臨床検査技師の仕事は、大きく分けて二種類ある。一つめは、患者の血液や尿などから細菌やウイルスを調べ、病気の原因を探り出す検体検査。二つめは、脳波検査や心電図検査、心音図検査など、患者の身体の表面や内部の器官からデータを採る生理学的検査。また最近では、従来の仕事からさらに専門化した職種として、がん細胞の発見を専門とする細胞検査士という職種があり、がんの早期発見に貢献している。

私が臨床検査技師を目指す理由は、三つある。一つめは、検査のおかげで私は救われたからである。私は生まれつき目の病気を持って生まれた。中学生のときに手術をしたが、

そのときに行った手術だけでは治らなかった。それから三年間何を見ても二つに見えて、頭痛や吐き気に悩まされていたが、まわりのひとは「手術をしたのだから大丈夫だ」と私の言葉は信じてもらえなかった。そんな私を救ってくれたのが検査だった。病院の先生は、さまざまな機械を使って病気の原因を探してくれた。原因がわかったことにより、手術をして嫌な症状がなくなったという身体的な開放感と共に、ずっと原因がわからなかった不安が取り除かれたという精神的な開放感が、検査・医療機器に対する興味をわかせた。二つめは、生物のからだに興味があるからである。小学校・中学校のときに、理科の時間の生物の単元がとても楽しく、テストも満点をとるほど好きだ。三つめは、機械を操作することが好きだからである。私の通っている学校では、目移りするほど多くの機械があり、触れられる機会もたくさんあるが、いつどの機械に触れても変わらないのは用途の使い道が明確で必ず正確に動かさなければならないところだ。そんなところが私は機械を操作する上でやりがいを感じる。

だが、そんな偉大な臨床検査技師になるためには、まず人間のからだの構造をよく知らなければならない。そのために私は臨床検査技師養成校である大学に進学したい。進学できるように今私に出来ることは、学校の勉強を一生懸命にがんばることはもちろんだが、ほかにがんばりたいことが二つある。一つめは、生物の知識を使えるものにすることだ。私の学科では、生物を学ぶことができないため塾の先生にサポートしてもらいながら勉強している。臨床系に進んだ大学生に「生物ができることは大学に入ったら強みになる」と教わったので、がんばりたいと思う。二つめは、多くの機械に触れることだ。工業的な機械と医療的な機械では違いはあると思うが、その経験は必ず役に立つと思うからだ。

これら二つは臨床検査技師に近づく小さな一歩であると考える。私は臨床検査技師になったら、的確にそして慎重に状態を判断し、病の早期発見で多くの人のためになりたい。また、私が救ってもらったように症状だけではなく原因をしっかり追究し、精神的な不安も取りのぞけるような臨床検査技師になりたい。

ものづくりを通して学んだこと

日本工業大学駒場高等学校　二年
堀内　実柚

私は工業実習の時に万力の製作をしました。万力とは工作物をはさんで固定するための工具で工作作業の時にはなくてはならない工具の一つです。私は中学校の技術の時に初めて使用しました。その時は、まだ工具やものづくりに関してあまり興味がなかったので、便利な道具だなとしか思っていませんでした。しかし実際に部品から自分でつくって、組み立てや塗装をすることで一つの品物ができるまで

にたくさんの工夫がされていることが分かりました。そして、私たちが社会に出る上でとても大切なことが大きく分けて三つ学ぶことができました。

一つめは、品物を使う人に優しい品物を作ることです。これは人に対する思いやりの精神です。私が中学生の時に体感したように、何気なく便利にその品物を使えたということは、その品物自体に不備や欠陥がなかったということです。

実際に万力を製作した時にこの品物を使う人がけがをしないための工夫がたくさんありました。例えば、材料を切った時に切り口がトゲトゲしていると手を傷つけてしまうので、やすりで削り落としたり、角や尖った部分には「面取り」という作業で削り、万が一小さい子供がぶつかってしまっても大丈夫なように工夫をしました。

このような一手間を加えることによって品物を使う人に優しい品物ができるのです。

二つめは一ミリメートルの誤差も許されないことです。少しでも雑な作業をすればすべての質が落ち、最悪な場合欠陥品になります。商品になったとしても使っている人を傷つけてしまったり、事故につながります。部品は〇、一ミリメートル単位で加工し、少しのグラつきもないように製作します。このように細心の注意を払う必要があります。

何十年もものづくりに関わる仕事をしていた先生によると、指先の感覚だけで材料のミリ単位の誤差が分かるそうで、何事も経験を積むことが大事だと教えていただきました。

三つめは、ものづくりの今後についてです。今回私が万力を製作する中で使った材料を切断したり、ネジを切る時に使った機械は主に昭和時代に生産されたもののため手動の部分が多くあります。しかし、近年ではＡＩ機能の発達や機械性能の急発展により、人の手を使わなくても質の良い品物が大量に短時間で生産できるようになりつつあります。そのため中小工場には仕事がまわってこなくなり、人をやとえなくなっていたり、ものづくりの技術をもっている人でも働く場所が見つからないということも増えているそうです。今後、ますます機械技術が発展することが予想されています。その中でも、ものづくりの仕事に関わり続けるためには自分自身のスキルを上げて周りに差をつけることが重要だと思いました。万力を作った際も一人一人の品物に個性が出ていて世界で一つだけのものができました。すべての作業を機械で行うことで品物を安く購入できたり、生活を豊かにすることができるようになりますが、私は人の手で一つ一つ大切に作られた品物が使われなくなるのはとても残念に思います。今後ものづくりは機械化が進みますが、その中でも個性を大事にして人の手でより良い品物をつくれるようにより深く考えていく必要があると思います。

最後に、ものづくりを通して社会に出たときに通じることを学べました。これからも実習の時には機械の扱い方だけでなく、たくさんのことを吸収して将来に生かしていきたいです。

私の農業

東京都立農業高等学校　二年
吉田　凪沙

私が農業高校に入学したのは、将来就職するとき、デスクワークの仕事が自分には向いていないと思ったことと、体を動かすこと、食べることが好きだったからである。

この高校に入学する前は、自分の家が農家ではなく、植物に特別詳しいわけでもなかったため、周りについていけるかという心配があった。しかし、実際に入学してみると自分と同じような人がたくさんいて、みんなとスタート地点は一緒なんだと思い、実習や学校生活が楽しみになった。

一年生の最初の頃の実習は何もかもが初めての体験でワクワクが止まらなかった。除草ガマやデルタホーを使って、畑のそこら中に生えている雑草を刈って、マルチという土の乾燥を防いだり、雑草を抑制したりする役割のものに利用することや、クワを使って畝を作るという実習を行った。長時間、同じ姿勢で作業をするのはとても疲れるし、大変だったが、みんなで一緒に作業をしていると頑張ることができるし、作業が終わると、達成感や充実感が感じられ、新鮮な経験で楽しかった。

一年生の時、野菜の実習でキュウリの栽培を行った。畑に肥料を与え、耕して畝を作り、種を植えた。数日すると芽が出て、どんどんつるが伸びていった。キュウリの栽培で重要なのは誘引という麻ひもなどで支柱に主茎を固定する作業だ。これをしないと、苗が風で倒れやすかったり、つるが伸ばしたい方向に伸びなくなってしまうことがある。また、整枝という枝葉を整理し、日当たりと風通しを良くしたり、株元の加湿を防ぎ、病気の発生を防ぐ作業もキュウリの栽培では欠かせない。私はこの作業を実際に経験することで、実習で学んでいることに無駄なことは一切ないのだと気づかされた。放課後、二日おきに畑を見に行き、誘引・整枝の作業をして、できたキュウリを収穫していた。しかし、休日明けに畑を見に行くと、前まで無かったはずのキュウリが三、四本もできていて、植物の生命力の強さに驚かされた。私は一番最初に収穫したキュウリをその場で洗って食べてみた。すると普段食べているキュウリより数段おいしく感じられた。そしてこれが野菜作りの良さなんだと気付き、やりがいを感じた。

二年生のトマト栽培では、初めて害虫と鳥による被害を経験した。育てていた品種は細長い形をしたミニトマトの「アイコ」と大玉トマトの「桃太郎ファイト」だった。茎が伸び、花が咲き、やっと実ができて、色が変化してきたのでもうすぐ収穫だと思い、楽しみに観察していた。しかし、翌日、畑に行ってみると、赤くなったばかりのトマトに何かに食べられたような穴が空いていた。中から果汁が出ていて、トマトの良い香りがしていた。他にも、小さな穴の空いたトマトがあったので、それらを採って先生に見せると、

「これは、鳥と虫にやられたなぁ。」と言われた。大切に育てていたので悔しかったが、これが露地栽培の難しさなんだと知ることができた。無事に収穫できたトマトを食べた時、食べ物のありがたみを改めて実感した。

そんなとき、友達のトマトの苗に病気が発生していることがわかった。先生に相談すると、苗は抜くしかないと言う。それからしばらく経ってまた同じ場所に新しい苗を植えたのだが、また病気が発生してしまった。このことからしっかりとした知識がなければ、その状況に応じた対処ができないと痛感し、自分の農業に対する熱意を持ち直す良いきっかけになった。

今年の夏休みに都内の農園へインターンシップに行った。そこで農家さんに様々なお話を伺ったが、その中で一番印象に残ったのは「農業は人脈が大事」だということだ。同じ地域の農家さんと連携をとり、意見交換をしているというところにとても感銘を受けた。地域で協力し合うことで新しい発見や意外な発想が生まれ、それぞれの農業をより良いものにできるのだと思った。

私はこの二年間、自分なりに関心を持って農業に取り組んできたが、まだまだ知らないことばかりで、体を動かしながら農業について学べることが貴重で何より楽しい。また、成功や失敗を経験することで農業・農産物の大切さを理解することができた。

私はこの経験から将来、多くの人に実際に土や野菜に触れてもらい、農業を身近に感じてもらえるような活動をしたいと考えている。そのためにも残りの学校生活を有意義に活用し、さらに農業に関する知識を深めていきたいと思う。

伸びきった鼻

東京都立農業高等学校　二年
木村　桃

私は現在、服のつくり方やデザインを学ぶ「服飾科」という科で、将来アパレル関係の仕事に就いたら役立つであろう技術を学んでいる。しかし、ちょうど一年前の夏、高校一年生の時に、技術面以外でも学んだ事がある。

高校に入学して最初の夏休み。少しずつ仲良くなり始めた友達や、最近できたボーイフレンドと、色んな場所へ出掛けられる！と思いきや、私は朝から学校へ行き、ミシンのコントローラーを踏んでいた。というのも、私の学校の服飾科は、十一月の文化祭で行うファッションショーの為に、二、三年生はほぼ毎日登校して、衣装づくりをする。一年生はファッションショーに出演しない為、自作の小物販

売を行う。私はその小物販売で売る予定のチョーカー（首輪のように首につけるアクセサリー。当時の私はこれにすごくハマっていた。）を制作しに登校していたのである。当時の私が作ったことのあるものといえば、スカートくらいで、そのスカートでさえも、先生から何度もやり直しを指示される程の出来であった。その為、その時作ったチョーカーはきっと宜しいものでは無かったし、使っている材料もボロい布だったりして、実際にハンドメイド小物でお金を稼いでいる人が見たら引いてしまっていただろう。今でこそ冷静に判断が出来る私だが、その時の私は相当な天狗で、「私の作品が一番」というような感覚でいたらしいので無理もない。

　さて、夏が終わる昼、春より少し大人びたクラスメイトを横目に、例のチョーカーを先生に提出。早速、先生から伝言を頂いた。

「次の授業までに、チョーカーの布の代わりになるものを持って来て下さい。」

とのこと。その様な伝言を頂戴したのは私だけだった。瞬間、ハッとした。その日の学校を終えると、颯爽と新宿へ直行し、品揃え豊富な手芸用品店に向かって真っ直ぐ歩いて行った。そこでしっかりと綺麗な布を購入し、新宿を後にした。いつもより速く、足を動かせるような気分だった。

　そして、授業の日。新宿で購入した布を強く持って教室に入った。無言でチョーカーを作り直していると、先生に話し掛けられた。

「人にお金を出してもらって、使ってもらうものだから。自分で使うのなら良いけど、商品だからね。」

そう言われて私は、悔しいだとか怒りだとかいう感情を抱くことなく、ひたすらに、大事な、当たり前だけれども大事な事を学んだ気がした。天狗の鼻は、知らない内に折られていた。

　私がこの経験から学んだ事は、自分以外の人に物を作る時は、その人の手に商品が渡った時のことをじっくり考えて作る事、それから、自分の嗜好を貫くだけでは、物づくりとビジネスを直結させられない、という事だ。この事を学び知ってから私は、服を作る時、今までよりも丁寧に、拘って作るようになった。そればかりでなく、自分のセンスを過信することが無いように、注意深く自分の作品、言葉、行為を振り返ることが多くなった。自分の嗜好だけで先走らずに、周りを見渡し、求められているものを考えることで、将来はキラキラと強いファッションと、賢さが重要になるビジネスとを融合出来るような人間に成りたい。

課題研究で得たこと

東京都立農産高等学校　三年
金子　優希

私は、課題研究という授業で創作ミニ盆栽づくりというテーマで授業を行っています。私が盆栽に興味をもったのは、高校二年生の冬に雑誌の写真を見た時です。その盆栽は大きな松で枝や幹が白く枯れていました。こんなにも美しいものがあるのかと感動し、ずっと見ていたいと思いました。これを課題研究の研究テーマにしたいと思い、先生に相談したところ、盆栽は時間がかかるから難しいといわれました。しかし、何とか盆栽に挑戦したいと思った私は、再度先生に相談したところ、草ものを使った寄せ植え盆栽はどうかとアドバイスをいただきました。私は身近なものでできるならやってみたいと思い、研究テーマに設定しました。

最初は何をしていいのかわからず、先生のまねをすることにしました。鉢の向きから植物の配置の方法など、初めてやることがたくさんありました。鉢に植物を植えるときに自分の想像していた形よりも全然違った形になり、植え方にも技術が必要だと実感しました。初めて一人で作った作品は、鉢と植物選びや配置を自分で考えて作品を作りました。鉢にどの植物が合うのかと考え、苦労しました。鉢に植物を植えるときは、自分が作りたい形になるように葉を切ったり、土をたくさん入れて高さを出したりして工夫をしました。一人で作業をしたので、授業時間内に終了せず、放課後も残って作業しました。思っていたより時間がかかり、大変な作業でした。

だいぶ作製に慣れてきた時に、先生から東京都知事の定例記者会見用の寄せ植え制作をしてみないかと声をかけられ、挑戦してみることになりました。鉢選びには大変苦労をし、二週間かかりました。テーブルの両脇に置くので、初めは両方とも違う鉢を使って高低差を出そうとしました。しかし、小さい鉢を使ってしまうと植物が大きく見えなくなってしまうのではないかと考え、規定の大きさぎりぎりの鉢を選ぶまで時間がかかりました。何回も鉢選びをしていると、自分の好みの組み合わせを見つけることができ、今後の作品の参考になりました。

植物を決める時もどのようなテーマにするかを考えながら選びました。六月に都庁に持っていくので、観葉植物を用い、緑で涼しさを、赤でこれから近づく夏の暑さを表現しました。二つの作品を制作したのですが、一つめはシェフレラとベンジャミンを作って高さを出し、コリウスで暑さを表現しました。二つめの作品にはドラセナとシンゴニウムを使って背を低くして、一つめの作品と高低差を出して横からもきれいに見えるようにしました。実際に作製してみて、一番力を入れて作った作品だったので、よい作品ができた時、達成感と満足感でいっぱいになりました。作

品を都庁に持っていったときに、関係者の方々が私の作品を見て、私が伝えたかったテーマを真っ先に感じ取ってくださった時は、この作品を作って心からよかったと思いました。テレビで映った自分の作品を見た時に、自分の中ですっきりするものがあり、やり切った気持ちでいっぱいになりました。その後も先生方から作品を作ってくれないかと依頼されることがあり、私の自信にもなりました。次に作品を作製した時は、以前ほど時間をかけずに自分がよいと思った植物や鉢の組み合わせを早く決められることができました。

この課題研究で私はたくさんのことを学びました。作品に取り組んでいるときはよいアイディアが思い浮かばず、何度も逃げたくなりました。しかし、ここで逃げてはいけないと思い、先生や友人に相談してきました。そのおかげで良い作品が出来ました。私は自分から行動する大切さや、不安に思ったことを身近な人に相談することの大切さを学びました。自分から何かを考えて行動することは大変でしたが、最後までやり切ることができた時の達成感は初めて感じるものでした。これからも私は、与えられたチャンスにもどんどん挑戦していきたいです。

私は今、文化祭に向けて大きな流木を使った作品に取り組んでいます。大きな作品を作るのは初めてなのでわからないことがたくさんありますが、諦めないで取り組んでいきたいです。今まで学んだことを生かして、自分のペースで進めていけたらいいなと思っています。

自分で考え、行動すること

東京都立農産高等学校　三年
角川　美咲

高校二年生の時に、先生のご厚意で授業外で野菜を育てる機会がありました。興味を持った二年生が集まり、それぞれの育てたい野菜ごと数名に分かれ、野菜の特徴、品種を調べたり、栽培計画を立てたりすることも全て生徒で行いました。一年生の頃の授業では、先生に言われたことや出された課題をただこなすだけだったため、初めて自分から動くことに戸惑いや難しさを感じましたが、皆で協力し合い、何とか計画を立てることはできました。

しかし、実際に作業すると、なかなか計画通りにはいきませんでした。放課後にはそれぞれ参加している委員会や部活動などの予定があり、全員がそろうことが難しく、入れ違いになることが多かったのです。私はスイカを栽培していたため、夏休みでも朝に学校へ行き、受粉させたり液肥を散布したり、時々わき芽を取り、果実に栄養がいきわたるように管理する必要がありました。夏の暑い中での作業はつらく、その上人数の集まりも悪かったのでとても大変でした。そこで、皆で改めて話し合い、役割を明確に割り振ることにより、自分が作業する日を決めたことで、皆

が積極的に参加するようになりました。最終的には立派なスイカを作ることができました。自分たちの手で一から作り上げたことの感動はとても大きかったです。また、それと同時に計画を実行することの大変さ、植物を管理する責任を感じました。

当時野菜を担当されていた先生は、

「今の実習は先生に言われたことをただやってみるというのが多いけれど、君たちには自分で考え、行動できる人になってほしい。そのために授業以外でも時間を作ったんだよ。」

とおっしゃいました。自分がその通りにできたかわかりませんが、その言葉を大切にして学校生活を送りたいと思うようになりました。

三年生になると、類型では造園分野を選択しました。造園類型では、樹木の剪定やロープワークなど、造園にかかわる基本的な知識を学んだり、国家資格である二級造園技能士の取得に向けた実技練習をしたりします。今までの授業とは違い、市民講師として第一線で活躍されている造園業の親方が来てくださり、現場に近い形で実習を行うようになりました。「ＫＹＫ」と呼ばれる危険予知活動というものを行い、作業をする前に誰がいるのか、どんな作業をするのか、危険があるのか、どうすれば安全に作業ができるかなどを細かくシートに書き出していきます。それを行うことにより自分が何をするのか、どう動けばよいのかを自ら考えることができるようになりました。以前、野菜の先生に言われたことが実践できていると感じ、うれしかったです。

そうした学校生活を続けるうちに、将来のことを考える時期になりました。私は、森林に関わる仕事に就きたいと考えるようになりました。造園を学んでいるうちに、樹木にかかわる仕事に興味を持ったからです。高校では森林について詳しく学ぶことができないので、専門学校へ進学し、基礎から学んでいきたいと思います。

森は野菜や草花とは違い、とても長い時間をかけてゆっくり成長します。自分が植えた木が自分の代で育ちきることはなく、次の世代やさらに次の世代になったころにようやく立派な木になるのです。その長い時間を無駄にしないためには、きちんと計画を立てなければいけません。例えば、林業では木を植えていればいいということではなく、雑草や木に巻き付くツルを取り除いたり、除伐といってまだ木が小さい時に育てたい木以外を切ったりします。農業でいうと間引きのようなものです。さらに木が大きくなってきたら間伐をします。これらを行うことによって、育てたい木やその周りの地面に光が当たり、必要な栄養がその気にいきわたります。きちんと計画を立ててこれらの作業を行わなければなりません。もし行われなかったら、光が当たらず、木がやせ細り、木材としての価値が下がってしまいます。せっかく何年も育てたのに無駄になってしますのです。

私は将来、森にかかわる職業に就いたら、野菜の先生に言われた「自分で考えて行動する」ということを忘れずに今何をすべきなのか、何が必要なのかを考え、計画を立てて行動できる人になりたいと思います。そして、森の財産

を前の世代から受け継ぎ、確実に次の世代へ受け渡せるようにしていきたいです。

食品添加物

東京都立農産高等学校　三年
松本遥花

食品を製造するときに加える食品添加物は体に良くないというイメージがあります。食品製造を勉強するまでは何のために食品添加物を加えているのかわかりませんでした。

食品添加物は、食品衛生法で、「食品の製造過程で、または食品の加工や保存の目的で食品に添加、混和などの方法によって使用するもの」と定義されています。法律上、四つに分類されており、安全性と有効性を確認して厚生労働大臣が使用して良いと指定した「指定添加物」、長年の食経験などをもとにして国が使用を認めている「既存添加物」、植物、動物を起源とする「天然香料」、通常は食品として用いられますが食品添加物的な使い方をする「一般飲食物添加物」に分けられています。安全とその有効性が認められたものが法律で使用を許可されているのに、なぜ食品添加物のイメージが良くないのか調べてみました。

理由として、昔、食品に発がん性の高い化学物質が含まれていたことがあったり、それが食品に混ざって病気になった事件などの影響が大きいといわれています。ポリ塩化ビフェニルやダイオキシン類の一種であるポリ塩化ジベンゾフラン等が製品の米ぬか油に混入し、色素沈着や目やになどの皮膚症状のほかに、全身倦怠感、しびれ感、食欲不振などの症状が出たカネミ油症事件や、粉ミルクの製造過程で用いられた第二燐酸ソーダに、多量のヒ素が含まれていたため、これを飲んだ一万三千人もの乳児がヒ素中毒になり、百三十人以上の中毒による死者をだした森永ヒ素ミルク事件など、多くの人々に健康被害を与えたことが化学物質に対する不信感を広げてしまい、食品添加物に対しても、良くないというイメージが持たれてしまったことがわかりました。

しかし、農産高校での実習を通して、食品添加物には様々な役割があることがわかりました。ハムやソーセージなどを製造する時に使われる発色剤は、赤血球の色素であるヘモグロビンや筋肉細胞の色素であるミオグロビンと結合して、加熱しても安定した赤い肉の色を保つ働きや、食中毒として恐ろしいボツリヌス菌の増殖を防ぐ働きがあります。豆腐を製造する時には、凝固剤として硫酸カルシウムや塩化マグネシウムなどの添加物や、消泡剤として大豆の中に含まれている水に溶かす

と泡立つ性質を持つサポニンという成分の泡を消すために、シリコーン樹脂を使用して泡を消しています。また、ジャムを製造する時に使用するゲル化剤であるペクチンは、植物の細胞壁を作る成分として、セルロースなどの他の構成成分と合わさって植物細胞を繋げる働きを持ち、マドレーヌを製造する時には、膨張剤としてベーキングパウダーを使用したりするなど、自分が思っている以上に食品添加物が使われていました。

もしも、食品添加物がなければ、ハムやソーセージの製造で、おいしく、安全に作ることは難しくなると思います。また、豆腐も泡を消さなければ、気泡だらけで見た目が悪いだけでなく、空気に触れているので腐りやすくなってしまいます。また、ジャムを確実に固めることに手間がかかってしまったり、マドレーヌも理想的な生地の膨らみが得られなくなってしまうと思います。

カネミ油症事件や森永ヒ素ミルク事件など健康被害の原因となった化学物質のイメージだけで、食品添加物は体に良くないと決めつけるのではなく、どのような役割があって、どのようなメリット、デメリットがあるのかを正しく知ることで食品添加物に対するイメージが変わるのではないかと考えます。実習を通して、何のために食品添加物を使用しているのか学ぶことができました。正しい情報を広めていくことで、よりよい食生活につなげていくことができると考えます。私は、食品化学の授業で、難しい化学式や構造式、栄養について学び、理解できたときにおもしろいと思い、もっと食の知識を深めたいと考えるようになりました。大学に進学して、管理栄養士になり、様々な年代の人の役に立ちたいと思っています。そのためにも、他にどのような食品にどのような添加物が使用されているのか調べて、知識を深めていきたいと思います。

おいしい野菜を食べて考えたこと

東京都立農産高等学校　一年
花輪　隼聖

僕は小さいころから、祖父母の家にある小さな畑で、野菜を収穫して遊んできました。自分たちで食べるくらいの量を作っているだけでしたが、いろいろな種類の野菜を作っていました。季節ごとに違う野菜を食べられることは、僕にとってとても楽しみでした。アオムシが出て、穴だらけになったキャベツや、うまく丸まらなかった白菜、大きく束にならないブロッコリー、まがったキュウリなど、スーパーでは見かけることのない不揃いで、売り物にならないようなものばかりでしたが、味はとてもおいしく、感動しました。スーパーで買って食べるものよりも、みずみずしく、野菜の味がしっかりと感じられました。

近年、「地産地消」という言葉をよく聞きます。これは、地元で生産されたものを地元で消費するということです。消費者の農産物に対する安全・安心志向の高まりや、生産

者の販売の多様化の取り組みの一つとして広がっています。消費者と生産者を結び地域農業を活性化させていく上でも、期待が高まっています。またこの広がりは、食料自給率の向上に結び付くといった面でも重要なことであると思います。さらに、輸送コストが減らせることや、それに伴う環境負荷の軽減、そして農産物の鮮度が高い状態で消費者の手元に届くということは、非常に合理的です。顔が見え、話ができるような関係で農産物の購入ができ、地域農業の活性化が図れるこの取り組みを広めていかなければなりません。そこで私は、どのように「地産地消」の取り組みを広めていくか考えました。

まず私が考えたことは、農産物直売所や地域の方が販売する機会を、もっと増やしていくことが重要だと思います。最近はスーパー等の農産物にも、顔や名前が表示されているものがありますが、直売所であれば、ここの人が作ったという場所まで分かります。さらに購入時に生産者と会話をすれば、とても安心すると思います。また、生産者が「つけもの」や「ジャム」に加工品を作り販売することで購入層も広がると思います。僕の住んでいた近くでは、川遊びや、フリーマーケットを盛り込んだ夏祭りで、地域でとれた野菜の販売があったり、その野菜の加工品がふるまわれたりしていました。このことは、とても心に残り、今でもよく覚えています。楽しいことと結び付けて、広げていくと話題性もあり、人の心に印象として残りやすいのではないでしょうか。

もう一つ、僕が考えたことは、「学校給食」に提供するということです。地域の野菜を学校給食として提供することは、「食育」の活動にもつながります。こどもたちは、給食を「おいしい」と感じることで、自分たちの地域ではこんなに素晴らしいものが作られているんだと知るきっかけになります。また地産地消を進めるだけでなく、こどもたちの農業への関心も深めることができ、未来につながる取り組みになると思います。こどものころに食べたおいしいものの記憶はかなり鮮明で、父や母も給食の何が好きだったか、よく話をしてくれます。だからこそ、今話題となっている「まずい給食」ではなく、おいしい給食を生産者や学校、地域が連携し、作っていかなければなりません。

僕自身も、今まで育った土地で、その土地の「水」や「土」を使って作られた野菜は、自分に合っていると思います。そういった野菜をたくさん食べてきたからこそ、大きな病気もせず、やってこれたのだと思います。だからこそ、一人でも多くの人に地元の良さを感じてもらい、その土地でとれるものの良さを分かってもらいたいです。

農産高校で半年間学んできて、いろいろな野菜を作ってきました。種から植えてどうしたらよりよく実るかを考えながら野菜が成長していくのを見ているのはとてもワクワクしました。収穫するときは喜びと達成感を味わうことができました。これからもさらにたくさんのことを学び、その土地の環境を生かして作ること、自然の肥料のことにも詳しくなり、それを生かしていろいろなところで活躍していけるようになりたいです。

私は将来、海外で農業をしたいと思っています。コンビ

ニで売っていたエクアドルのバナナのおいしさに感動したからです。その土地の気候を生かして作っているからおいしいのだと興味を持ちました。南米ではコーヒー豆やカーネーションなど、割と自分に身近なものも多く作られており、家族にも喜んでもらえるものが作れるのではと思いました。

高校で東京に引っ越してきたとき、とても勇気がいりました。でも、その経験は、私の力になったと思います。これからも広い世界に一歩踏み出すという経験をどんどん重ねていきたいと思います。そして、一回りも二回りも大きくなりたいです。

農業を職業にするために

東京都立農産高等学校　一年
神　保　光咲子

私は東京の田んぼも畑もない所で生まれ育ったが、将来は香川県に住んで農業をやりたいと考えている。香川県には母の実家があり、毎年帰省をして自然にふれている。祖父の畑にはいろいろな野菜や果物が植えられている。私はそんな環境が好きだ。大好きな自然の中で、祖父の田畑の世話をしたい。

香川県は面積が日本一小さい県で、農家の一戸あたりの耕地面積も全国平均の半分以下ととても小さい。祖父の持つ田んぼは三〜四反ぐらいで、畑は二反ほどだ。しかも祖父も祖母も八十歳を越していて、畑をやるのが精一杯で田んぼは人に貸している。私にとっては伯父に当たるが、息子さんは会社勤めだ。すなわち祖父は兼業農家である。

では、もし私が祖父の田畑を継いだとしたら、どうすれば専業農家としてやっていけるのだろうか。少ない生産量で農業で生計をたてるにはどうしたらよいだろうか。私が祖父の家に住み、農業で生計を立てるとすれば、家賃はかからない。光熱費も全額は負担しないでいいと思う。とすれば、月に十万円程度の収入があれば、何とかやっていけ

ると思う。そして、その月十万円の現金収入というのが、私の初めの目標になるだろう。これは学校で先生から聞いた話だが、農家では畑一反あたり最低でも年間三十万円の純益がなければやっていけないという。もちろん工夫次第で、その額は四十万円にも五十万円にもるそうだ。ただ田んぼからは、せいぜい十万円ちょっとしか収入が得られないらしい。自分で消費する野菜を全て自分で栽培することは無理にしても、田舎では物々交換が当たり前で、取れすぎた野菜などはあげたりもらったりしている。そうすれば、かなりの野菜はお金を払わずに手に入れられる。だとしたら、祖父の畑が二反として、一反あたり五十万円の純益を得る工夫が必要だ。

それではどのような工夫が可能なのだろうか。香川県は自然条件や、人口が集中している京阪神に近いという地理的条件には恵まれている。しかし、耕作地が小さい面積では、大きく出荷量は伸ばせない。だとすれば、少ない生産量で売り上げを伸ばすには、よい品目を生産して、差別化することが大切だ。調べてみると、香川には「さぬきのめざめ」というアスパラガスや、「さぬき姫」という苺、「さぬきゴールド」というキウイフルーツなどがある。そうした品種を育てて付加価値をつけることは大切だと思う。さらに付加価値ということでは、無農薬有機農法というのも大きな魅力だと思う。私の通う農産高校定時制では、野菜は無農薬有機農法で作るというのが基本になっている。ただ、それには大きな手間がかかる。草取りや害虫対策などにかける手間は、薬を使わないときの何倍にもなる。でも、耕地面積が小さいということは、逆に手間をかけやすいということにもなる。大がかりな施設や大きな機械が必要ないので資金がなくても始められる。また、できた作物に自分で手を加えて加工するということも、大きな付加価値を生み出す。可能なら、大豆から生産して、味噌造りなどもしてみたい。スーパーに行って味噌のコーナーを見ると、大きな値段の開きに驚くことがある。無農薬有機農法の大豆で無添加自家製味噌を造れば、とても大きな付加価値がつく。

だが、有機農法は生産も大変だが、その労力に見合った価格で販売することがもっと大変だと聞く。売る工夫が必要だ。祖父の家の周りには比較的人家が集まっているので、マルシェを使った直売所もいいかもしれない。野菜や加工品の規格がないので価格が自由に決められる。それから、生産物に自信があるなら、レストランとの契約も可能だと思う。これも学校で先生から聞いた話だが、仙台市の奥で有機農業に取り組んでいる一軒の農家は、その収入のほとんどを三十数件ほどの家庭や飲食店との契約でまかなっているという。でも、同じ品目を安定供給することはとても難しい。一般家庭になら、その時々に穫れた野菜のパック販売は可能だが、飲食店と契約を結ぶのには相当のアイデ

アと信頼関係を創る必要がある。これは大きな宿題だ。
だとしたら、自分で消費する作物ということも視野に入れて、多品目の栽培というのも心がけたい。気候や病気の発生などに対して多品目の栽培は有効な対策にもなるし、小規模農家に向いていると聞いている。いろいろな作物や品種に挑戦することもできる。
また、味噌作りには触れたが、他にもいろいろな加工ができると思う。食べられるのに規格が合わずに出荷できないものも加工すれば売ることができる。加工することで保存期間も伸びるので、大量に収穫できたときなどにストックがきく。ただ、これもまた、技術や資格の習得や売り方はじめ、たくさんのハードルを越えなければならない。
さて、ここまで自分で考えたり、人から聞いたり、本で読んだりしたことに自分の夢を重ねてきた。しかし、それはまた、私の頭の中だけにしかない。もし、私が本当に祖父の家に住んで就農するなら、もっともっとたくさんのことが待ち受けているはずだ。地域の人たちとの交流や信頼関係の育成、真夏の作業に耐えられる体力。百姓は毎年が一年生という言葉を聞いたことがある。それくらい、不断の努力が必要だ。私はまだ、農産高校の一年生。この先農業をはじめ、たくさんのことを学ばなければならない。そして、卒業まで到達したからといって、すぐに実践の役にたつわけではない。でも、就農するという私の夢を抱き続けるなら、必ずいい結果がついてくると信じて、この先の高校生活を送るつもりだ。

将来の夢

東京都立瑞穂農芸高等学校　一年
大塚　涼楓

私の将来の夢はアレルギーに対応している料理を提供することです。
このように思ったきっかけは、自分がアレルギーを持っていることが分かったからです。いつも通り、食事を楽しんでいたときのことです。急に口の中と喉がかゆくなり、息苦しくなりました。すぐに治まりましたがアレルギー検査をすると、普段食べているものや好きなもの、動物など、たくさんのアレルギーを持っていることが分かりました。幸い、軽度なので自分の体調を考えながら食べる量を調節しているので、あれ以来発症していません。しかし、アレルギーがあると分かったときは食事をすることが怖かったです。私は、食事は楽しむものだと思っています。
ある日私は、どのくらいの人がアレルギーを持っているか調べてみました。厚生労働省のサイトによると、日本の人口の一～二パーセント、乳児に限定すると約十％の人が何らかの食物アレルギーを持っているそうです。この調査結果を見て、乳児の割合に対して全人口の割合が低くなっていることを不思議に思い、食物アレルギーが起こる原因

についてさらに調べることにしました。分かったことは、体には食べ物を異物として認識されない仕組みがあり、通常は栄養として吸収することができる。しかし、免疫反応を調節する仕組みに問題があったり、消化・吸収機能が未熟だと食べ物を異物として間違えることがある。そこで起こる反応が食物アレルギーだということがわかました。したがって、乳児の体は未発達のためアレルギー反応が起こりやすく、体が発達することでアレルギーは治ることがあると分かりました。

そこで私は、調理する過程でアレルゲンを防げるのではないかと考えてみました。私は卵アレルギーがあります。以前、ゆで卵を食べていると、母に「白身よりも黄身の方がアレルギーが出にくい」と言われました。しかし、私は白身の方が好きなので特に気にせず食べていました。調べてみると、母の言っていたことは本当で、鶏卵アレルゲンの大部分は白身に含まれるタンパク成分だと書いてありました。加熱によって大きく変化し、温度が高いほど、高温時間が長いほど、アレルギーは起きにくいと書いてありました。各々のアレルゲンには効果のある調理方法があると思います。青菜をゆでて水にさらすと、シュウ酸が減らせたり、里芋に塩をふると、ぬめりがとれたりできるように、調理の過程でアレルゲンを防ぐことはできると思います。

私はアルバイトをしていてアレルゲンについて尋ねられたことがあります。アレルゲン情報を見ると、完全に除去されている商品は工場で調理されているものの中でも、少ししかありません。ほとんどの商品が含まれているか、調理する過程で含む可能性があると書かれていました。確かに、一つの調理場でたくさんの商品をつくるとなると、完全に除去することは難しいと思います。しかし、アレルギーは生死にかかわることなので、含まないよう注意しながら調理することが大切だと思います。もしものときのために、アレルギー反応が起きたときの対処法について、知識があった方が良いと思います。

私は美味しい料理を作るには、美味しいものをたくさん食べて経験することが必要だと思います。例えば、甘い卵焼きを作るとき、砂糖だけを入れるか塩も少し入れるかでは、塩も少し入れた方が美味しいです。これが対比効果だと知るまで、私はいつも母の作った卵焼きと何かが違うと感じていました。アレルギーに対応させるとき、元の料理と味が違うことがあると思います。例えばエビチリです。私はエビアレルギーもあるので、エビチリを食べたことがありません。もしも食べるとしたら、鶏肉などで代用すると思います。しかし、エビの味が足りないので、味は変わると思います。元の味に近づけたり、アレンジしてさらに美味しくするには、元の味を知っていることと美味しく作る技術が必要だと思います。

このように、日本にはアレルギーを持っている人はたくさんいて珍しいことではないと思います。食事は生きていくために必ずすることです。毎回、アレルゲンのチェックをしたり、アレルギー反応が起きないかドキドキしたり、好きな食べ物や料理を食べられなかったりするのは本当に辛いことです。私はそういう人を減らしたいです。そのた

めに、美味しい料理を作れるように料理の腕を磨いたり、栄養の勉強をしたり、アレルギーについて学んだりしたいです。

進学するために今は専門教科だけでなく、普通教科の方も手を抜かずに頑張ります。将来上手な接客ができるように、アルバイトも笑顔で頑張りたいです。

私は美味しいものを食べているときに「幸せ」だと感じます。アレルギーで困っている人を幸せにするために、今はたくさんのことを上手に両立して色々なことを身につけていきたいです。そして将来、アレルギーに対応している料理を提供するお店を出したいです。

ブバルディアを通して気づいたこと

東京都立大島高等学校　三年
向山唯斗

伊豆大島で育ち、十四回目の夏。私は伊豆大島の新たな発見をした。それは地元の農園にインターンシップをしたときである。その発見とは、ブバルディアという植物が伊豆大島の特産物であることだった。そんな事と思えるかもしれないが、私にとっては大きな発見だった。

伊豆大島は人口約八千人、周囲約五十キロの、自然豊かな島である。伊豆大島の代表的な特産物は、島内に約三百万本あると言われるヤブツバキから採取される椿油や椿炭、明日葉やくさやである。

この島には、近年多くの問題や課題が発生している。例えば、観光客減少や高齢化による産業の衰退である。

私は都立大島高等学校で、伊豆大島が抱えるこの様な問題を解決するための活動に参加してきた。その活動の一つがヤブツバキを使った、特産品の商品開発と販売である。しかし、今回のインターンシップに参加することで、ヤブツバキだけではなく新たな特産品を知るきっかけとなったのだ。

ブバルディアとはアカネ科の花木の一種である。東京市場では伊豆大島産が最も多い出荷量をほこっている。しかし、島内でブバルディアは、多くの人に知られていないのが現状である。

インターンシップ先の農園は切り花用のブバルディアを栽培、そして販売をしている。私はそこで、ブバルディアの管理や調整の作業を担当し、その中で実際の農家さんの仕事を見て、体験し、様々な発見や知識を得ることができた。

作業の流れは、切り花用のブバルディアを剪定ばさみを使って切り、サイズごとに分け、一束二十五本の形にまとめて箱詰めし、市場に輸送するというものだ。多いときは、一日三千本束ねるそうだ。私が一束作るだけでも十分以上かかる作業を、半分の時間で作り上げているのを見て、その手際の良さに驚いた。高校でケイトウやキンギョソウの切り花をつくった経験はあったが、ブバルディアは初めての経験であり、高校で習った方法とは異なり、切り花でも様々な方法があることを学んだ。これも発見のひとつだった。ブバルディ

アの基本的な作業を教えていただき、学校では知ることができない多くのことを学ぶことができた。

このインターンシップで、もっとも印象に残ったことは、四日間という短い期間にも関わらず、花農家の厳しさを体験できたことだ。私がインターンシップを体験した時期は、ほかの時期に比べ、比較的作業に余裕のある時期だったため、インターンシップを受け入れたとおっしゃっていたが、ブバルディアの作業を体験してみると、力仕事や炎天下での作業が非常に多く、初日で筋肉痛になってしまった。この作業以上のことを毎日こなしていると考えると、花農家の作業の大変さを感じずにはいられなかった。しかし、それだけではない、椿は認知され、少しずつ、守っていこうという意志が広がり、活発になりつつある中、ブバルディアは伊豆大島の魅力、特産物の一つであるにも関わらず、あまり知られていないのである。その様なブバルディアを数少ない花農家が受け継ぎ、守っていくという、強い意志そして厳しさが感じられた。このようなことは、実際にインターンシップを体験してみなければ気づくことができないことだったと思う。

私は伊豆大島に十四年間住み、伊豆大島の魅力を多く知っていたと思っていたが、新しい魅力ブバルディアを知ることができた。

この体験の中で、改めて強く考えさせられたことは、伊豆大島を外側から、そして内側からも変えていかなければならない、ということだ。高校で、様々な島外のイベントに参加し、伊豆大島の魅力を発信してきた。それだけが要因ではないが、観光客数は増加傾向にある。島内の活動では、本校の椿園を利用した、生徒による椿ガイド、挿し木教室を行い、椿に興味を持ってもらおうと考えていた。「知らなかった」や「椿すごい」という声があった。伊豆大島に当たり前のように自生しているため、その魅力に気付いていなかったのだと思う。ブバルディアも椿と同様だろう。実際、私も高校に入らなければ、伊豆大島の現状や魅力に気付くことはなかった。島民が伊豆大島の現状や、島の魅力を知り、島全体で問題について考え、魅力を売り出すことで、抱えている問題は解決できるのではないだろうか。

今までは、それぞれが小規模で伊豆大島の抱える問題を解決しようと考えていた。しかし、様々な活動を通し、同じ意志を持った地域や企業の方々が集まり、大規模で問題を解決しようと皆が思いはじめている。ようやく、伊豆大島の問題解決の一歩を踏み出したのだ。これから、色々な人を巻き込み、この活動をより大きなものにしていきたい。

知らなければ通りすぎてしまいそうな一つの花が、ここまで自分の視野を広げてくれるとは思っていなかった。伊豆大島の問題を解決に導くことが、同じ問題を抱えている日本の各地域のモデルケースになるのではないだろうか。それにはまず、自分が、大切な場所の魅力をしっかり気づき、知り、生かす力を持たなければならない。これを広げていくことが大切なのだ。それは簡単なことではないが、伊豆大島から各地域、そして日本全体の未来のために、一人一人が大切だと自信をもって言える場所を持つことが大切なのではないだろうか。

私の進路、将来の夢

東京都立忍岡高等学校　三年
大川里穂

私の将来の夢は、管理栄養士として医療・福祉・介護の分野において社会貢献をする事です。理由は二つあります。

一つめは食に関する事が好きだからです。幼い頃から食べるのはもちろん、作る事も好きでした。人間が生きていく上で一番重要になるのは栄養を摂る事だと思います。そして栄養は食事で摂るのが一番と思いました。一生で切っても切れない関係にある食事で何か自分らしさを表現できることはないかと考えました。

二つめは人を笑顔にする事ができる仕事がしたいと思ったからです。私は下町育ちで、保育園で高齢者施設に訪問したり、近所の銭湯で沢山の高齢者の方と接する機会があり、とても身近に感じていました。施設や銭湯で会う高齢者の方々は私を見つけて手を振ってくれたり、お手玉やおはじきなどの昔の遊びを教えてくれたり、時に面白い話をしてくれたり、とても笑顔にしてもらう事が多かったです。そこで私も自分の力で高齢者の方々を笑顔にしたいと思いました。また、笑顔のもとになれるような食事を考えてみたいと思いました。

中学校へ上がり、部活動に力を入れました。防災部では月に一度、中学校の近隣に住んでいる高齢者の方へお手紙を届けに行ったり、一年生の時に宿泊防災訓練で誘導担当をしたりしました。話をしている中で、食事の際に自ら気をつけている事や食事を作っている時に大変だと感じている事などを聞きました。毎日気にかけていても実際やると面倒くさい気持ちになる人がほとんどでした。毎日少量でも何かを足して調理するだけなら、簡単で続けられるんではないかと思いました。

また私は高齢者が気をつけている事を生かし料理をしてみました。自分で作ってみて、大変さや直せる所を見つけようと思いました。まずは高血圧症の高齢者を対象としたものを作りました。高血圧症だと食塩を摂る量をおさえる事が最も大事ではないかと思ったので、減らせる分は減らして作りました。しかし、味が薄くなりすぎてしまって美味しいと思えませんでした。また見た目が悪く、ご飯が進む感じでもなかったです。自分で作ってみて思った以上に献立を立てる事は難しいと感じました。そして毎日のように気をつかって料理している高齢者の方々はもっと大変だなと改めて思いました。

幼い頃に高齢者の方々に笑顔にしてもらった時の事を忘れずに、私も沢山の高齢者を大切な食事を通して笑顔にしていきたいと思います。ただ食塩を減らして食べる食事は味気なく、食卓が楽しい空間でなくなると思いました。今回作った料理も踏まえて、工夫の多い献立を考えたいです。見た目が料理を作っている上で一番の情報だと思うので色あざやかな食材を使う事も大切だと思いました。そして見た目だけでなく舌や歯触りなどでも十分に楽しめるような献立作りをした

いです。味が普段の料理より薄くても、酸味や苦味、スパイスの効いていて美味しいと思ってもらえるものを作りたいと思います。

また、高齢者施設にいる方々だけでなく、近隣の人の健康サポートをしたいと思います。中学の時に聞いた話でも悩んでいる事は様々だったので、一つ一つに対応できる知識を修得したいと思います。親身になり健康サポートしていき、地域交流を深め、地域貢献や社会貢献をしたいです。

今まで高齢者の立場に立って何かを考えた事はありませんでした。やはり、立ち場を変えて物事を考えたり、作ってみたりすると気づかなかった事が多いと感じました。今は、高校の授業の中で高血圧症の人の食事を考え献立・調理をしていますが、他の病気の人の場合や年齢別身体活動レベル別に料理でも工夫する点が異なるので、沢山の方向を見て、献立作りに励みたいと思います。

必要のないものの豊かさ

東京都立忍岡高等学校　三年
髙橋　瑞季

人生において不必要なものは一つもないと私は考えている。私は生活科学科という被服、食物、保育などの家庭科に特化した学科に所属している。クラスメートは皆、ファッションデザイナーやパティシエール、保育士などの夢を持っている。

生活科学科では一年生でファッションデザインⅠ、フードデザイン、家庭総合などの科目を通し被服分野、食物分野をまんべんなく学ぶ、それを通し二年生では自分で好きな科目を履修し、学ぶというシステムになっている。ただ、絶対にファッションデザイナーになるという、確固たる意志を持ち入学してきた人には、フードデザインなどの自分の希望する進路に関係のない科目の勉強は不必要、時間の無駄というふうに感じただろう。逆も然り、パティシエールを志し意気揚々と入学してきた人が、ファッションの授業などで上手くいかず、苦痛だと涙を流す所も見たことがある。こんな授業受けたくない、将来なるわけでもないのに、なんでやらなきゃいけないの？という言葉が入学当初かなり耳に入った。たしかに自分も保育の道を志し入学したものの調理実習と被服の授

業ばかりで、どうしてこんなことまでしなければならないのだと友達にこぼしたことがある。あの頃は、自分の好きなことだけ勉強できたらどんなに素敵だろうかと考えていた。数学や古典、被服を勉強することの必要性は全くないと感じていた。それが違うと分かったのは、日本史の授業だった。二年生になり日本史の授業を受けた所、先生の知識の引出しの多さに驚愕した。こんなにも興味のそそられる授業はうまれてはじめてだった。50分がまるで5分のように感じられた。先生はたくさんの職に就いていた方だった。ホテル、神社、自分の店をもったこともあるという人だった。その時、自分が今まで無駄と切りすてようとしていたものが「経験」だったのだと悟った。無駄なんかではなかった、先生達は様々な経験を私達にさせてくれていた。こんな事、なんの役に立つんだと思って作ったシャツブラウスは子ども服のしくみを知るのに役立った。食文化で学んだ行事のなりたちや行事食は、保育園などで行われるイベント事の理解の助けになったり、子ども達に質問されてもしっかりと答えられた。生活科学科ならではの特殊な授業で得た経験は人に話すととても面白がってもらえる。確かにファッションデザイナーになるのに、おせちの作り方は必要ないかもしれない、パティシエールがシャツブラウスを作れなくても大丈夫かもしれない。でもそれは必ず自分の糧になっていると私は感じる。私達、生活科学科の三年生は、三年間の集大成として、課題研究という、自分でテーマを設定しそれに取りくむ大きな課題がある。その研究でも経験は強みになる。被服を勉強したから保育志望だけど子ども服の研究をして子ども服を作る人などもいる。私は生活と福祉という授業の経験と関連づけ、児童福祉の研究をしている。自分が二年間培ってきた知識や経験をフルにつかってする研究はとても楽しい。だが、研究テーマが決まらないと嘆く友人も中にはいた。自分はなにも学んでこなかったと言う。無駄を経験と捉えることはむずかしい事なのかもしれない。しかし、無駄だといってせっかくの経験や知識を得られるチャンスを排除してしまってはあまりにも勿体ない、感受性の高い今に沢山の経験をさせてもらえる環境にいられる時間は短い。だからこそ常にアンテナをはり無駄だとスルーするのではなく、自分の中で経験を変えどんどん吸収し、自分の糧にしていくことが大切なのだと学んだ。これから私達は大人になっていくうえで様々な無駄なことを経験していく。でもそれは無駄なことではなく自分の糧となる大切な経験だ。経験は人生を豊かにしてくれくれる。無駄は不必要ではない。私は経験をたくさんつみ豊かな人間になりたいと考える。

私を成長させる言葉

東京都立野津田高等学校　二年
白鳥　稀凜

「本当に不信感しかないわ」

今年の夏休み、高校二年生の私が介護実習を行わせていただいた高齢者施設でAさんという利用者様が私を見ながら呟いた言葉です。私はその言葉を聞いた瞬間に、頭の中が真っ白になってしまい、その場から少しの間動くことが出来なくなってしまいました。そしてその日はAさんの近くに行くことができず、他の利用者様と話してばかりいました。しかし、頭の中にはずっとAさんの言葉が残っていて、気づくとAさんを目で追っていました。実習が終わってもその言葉が離れず、どうしてそういう言葉を言わせてしまったのかを考えました。自分の対応や表情がAさんを不快にしてしまい、自分自身がAさんにとって安心できるような環境になれていなかったのではないかということにAさんの言葉から気づくことが出来ました。「本当に不信感しかないわ」という言葉を言われてショックを受けたのは、自分が向き合う姿勢が、Aさんに届いていると思い込んでいたからかもしれません。

この経験を通して、利用者様との関わり方を変えようと思いました。今まで利用者様に質問することが多く、利用者様の話ばかり聞いていました。私は利用者様の気持ちに配慮が出来ていなかったのではないかと考えました。利用者様に親しみをもっていただけるように、まずは積極的に自分のことから話をして自分を知ってもらうことで、その方との信頼関係を築きていこうと思いました。

関わり方を変えたことで、利用者様に「あなたに手を握っていてもらえると安心できるわ」という言葉を言っていただくことが出来ました。利用者様に寄り添い向き合ったことで、利用者様にもその思いが伝わり、利用者様の心の中に自分の存在があったからこそ、そのような言葉を言っていただくことが出来たのだと思います。私の関わりを変えたことで、その方が私のことを受け止めてくれたということを実感することが出来た瞬間でもあり、介護福祉士の国家資格を必ず取得し、利用者様に寄り添う介護をしたいと強く思った瞬間でもありました。障害者施設の実習においても、利用者様から「お手紙書きます」と言ってもらえたことがあり、私を認めてくれたことを感じるという経験がありました。このような経験を通して、以前の自分よりも利用者様と向き合いたいという気持ちが自分の中で強くなったところが成長出来た部分だと思います。

私は自分自身の成長を感じることがで

きた事で福祉科に入学しようと思った理由を思い出しました。それは曾祖母の「ありがとう」という言葉です。曾祖母の身の回りの事を手伝っていた時にいつも言われていた言葉でした。また私は、今まで自分は祖父に大切にされていないのではないかと思い、祖父のことを好きになれず目を背けていました。しかし、祖父が入院したことをきっかけに祖父に自分自身のことを話すことが出来ました。そんな私の変化を感じたのか祖父は、私の手を握り、涙を流しながら「お前なら出来る」と言ってくれました。祖父の言葉が心の奥に響き嬉しい気持ちになりました。初めて祖父と正面から向き合うことが出来た瞬間でした。実習でのAさんとの出会いがあったからこそ祖父と向き合うことが出来たと思います。

私はAさんや祖父が発する言葉一つ一つに自分自身が真っ直ぐに向き合えたことで、心に響く温い思いに気づくことができたと思います。Aさんと祖父に言ってもらえた言葉のおかげで、人の気持ちを理解して、一人一人に向き合いたいという気持ちになり、人としっかりと関わっていきたいという思いが強くなりました。

私は言葉には人の心を後押しする力があると思います。Aさんの言葉は、私にとってとてもきつい言葉に感じられました。しかし、私はその言葉のおかげで自分の関わる力の未熟さに気づくことができました。私は今、Aさんの言葉に感謝しています。私の心を後押しした言葉だったからです。

私は利用者様の生きがいの後押しをできる介護福祉士になりたいです。Aさんや祖父が言ってくれた言葉は私を成長させてくれています。私は今後、言葉を大切にして関わる人に向き合い、その方の心があったかくなり、少しでも笑顔になってもらえるような支援ができる介護福祉士を目指していきます。

専修学校の部　最優秀賞

授業で学んだことと心構え

中央工学校　一年
飯田大貴

私は中央工学校に入学してまだ四ヶ月と短いですが、学び得た事は大きく分けて二つあります。一つは、作業や課題の確認作業を怠らずに習慣づけること。もう一つは、新しいことを学ぶことの楽しさです。

一つめの作業や課題の確認作業を習慣づけることですが、これは週に十八時間ある製図の授業で学ぶことができたと思います。製図の授業では、課題図を見ながらの手描き製図やCADソフトを使って製図を行うのですが、自分では何度か見直して間違いがないと思って図面を提出しても、先生に細かな間違いを指摘されることが多くありました。課題が進み図面が複雑になるにつれ、細かなミスが増え、図面を描き直すことが多くなり、その度に製図板から用紙を取り外したり、印刷した図面を取りに行って再提出したりとかなり時間をかけながら課題をこなしていきました。早く課題を終わらせようと確認作業を怠ると、後々何箇所も修正することになり余計に時間がかかってしまうということを、身をもって知る事ができたと思います。

そこで、いかに自分で小さなミスに気づき効率良く作業を終わらせられるか考えたのですが、課題図と自分が描いた図面をよく見比べることは勿論なのですが、まずは課題図をよく見て形を理解すること、それから図面の大きさや角度を変えてみたり、いろいろな視点から見ること、そして自分で考えてもわからないと感じたときは、すぐに先生や周りの人に質問することがミスを減らし、効率よく作業を終わらせることに繋がるのではないだろうかと思いました。

これから就職して社会に出たときには、さらに作業の効率や、正確さを求められるようになると思うので、在学中にこの事を徹底し、就職したときに周りに迷惑をかけることなく、与えられた仕事を要領よくこなせるようになりたいと思います。これらのよく確認する、よく理解する、わからないところは質問するということは、仕事や課題に取り組む時だけでなく、人と関わる上でも重要なことなのではないだろうかと思いました。

二つめに学んだ新しく学ぶことの楽しさですが、これは中央工学

専修学校の部　最優秀賞　飯田大樹さん

校に入学し、機械設計の専門的な知識を学び始めたことが大きいと思います。高校までの学習では「こんな事を学んでも将来なんの役に立つのだろうか」と疑問に思い学習意欲が削がれ、授業に身が入らないことが多くありました。ですが、中央工学校での学習は、高校までの授業と違い、手描き製図やパソコンによる実習が多く、座学の授業も基礎製図法や工業材料など、今まで機械などの知識を学ぶことがなかった自分にとって、全く新しい内容を学ぶ機会が多かったので、自然と学習する意欲が湧いてきたのだと思います。

専門的な知識を学ぶことで、将来自分の就きたい仕事を具体的にイメージすることができ、その仕事に対して少しずつ近付いているという実感が湧き、もっと知識を増やし、理解を深めようと思うことができるようになりました。それも、学ぶことが楽しいと感じるようになった要因の一つのように感じます。このような実感は高校までの学習内容では得られなかった感覚なので、なかなか新鮮で、自分の人生にとって良い経験になったと思います。

これらのことを踏まえて、私の学習に対する心構えは大きく変わりました。以前の学校生活では、自分の学びたいことは何なのか、今学んでいることが、将来自分が社会に出たときに役に立つのかなど、疑問に思うことが多くありました。ですが、今では自分の学んでいることが、将来自分の就職に直結しているという実感ができたので自然と学習に対して前向きに取り組めるようになりました。

これからの学習では、更に就職する上で重要なことを多く学ぶことになると思いますので、小さなミスでも見逃さないように細心の注意を払い、様々な視点から物事を見ることができるようにし、新しい発見や、新しいことを学んでいく楽しさを大切にしたいと思います。

専修学校の部　優秀賞

憧れから、夢へ。

青山製図専門学校　一年
野　原　るりか

小さい頃から今現在までずっと変わらず2ＤＫの賃貸マンションに住んでいる。築三十年。平成と共に歩んできたとても小さくて古い緑色のマンションだ。自分の部屋もベッドもない。毎日姉妹三人で川の字で敷布団をしいて仲良く寝ている。ここまでくると愛着も湧くものだが、小さい頃はやはり友達の大きい三階建ての新築一戸建てに憧れていた。専用の部屋もふかふかの可愛いベッドもある。私にはないものを持っていて、それらがとてもキラキラして見えたことをよく覚えている。今思えばそれが、私が建築家を目指そうと思った一番最初のきっかけだったのかもしれない。

だからといって建築の専門学校に入学したのはそこまでストレートにいったわけではなく、一度行った大学を三ヶ月でやめたり、アルバイトでお金を稼いだりと一年空白があってからだった。人から見たら一年無駄にしたように見えるかも

しれない。私自身そう感じていた時期もあったし、焦りももちろん感じていた。しかしこの一年が私の中で大きなターニングポイントになったと今の自分なら言い切ることが出来る。

大学受験で第一志望に合格できず、滑り止めの大学に入学したものの、自分のやりたかった勉学が出来ないことが嫌になり三ヶ月で退学してしまった。そもそも大学に通おうと思ったのも「みんなが大学に行くから」だった為、深い思い入れもなかった。入りたい学科に入れなかったことの悔しさ、それに加えて学びたいことが学べなかった苛立ち、一年空白になって皆に置いて行かれてしまうかもという焦りが頭の中に渦巻いた。だからこそ、専門学校に入ったきっかけは投げやりなものだった。

そんな時に声を掛けてくださったのが高校の時にお世話になった担任の先生だった。私が一言「大学を辞めて専門学校に入ろうと思います」と進路を伝えた際、最初は怪訝な目を向けられると思っていた。しかし先生は、「夢に向かっていてかっこいいね。頑張れよ」と嫌な顔せず私の背中を押してくださった。一人でも自分のことを応援してくれる人がいる。それだけでも自分が夢に一歩踏み出す勇気に変わった。

それでも専門学校に入るための受験をしないところが多く、偏見だが勝手に「逃げ」の選択な気がしていた。だからこそ胸を張って専門学生ですと言い張ることが出来なかった。

ただ、その考えは入学してすぐに変わった。周りのみんなのほとんどが建築士の資格を取りたいと思っており、課題はとことん自分の気が済むまで追求していた。また、一人で取り組む課題も周りのみんなと相談し合って、時には夜遅くまで教室に残って一人一人が個人の作品を完成させていった。本当に周りのみんなに鼓舞されて精進する毎日だった。専門学校は、ただ建築が学びたいわけではなく自分の夢に向かって努力している「仲間」がいる場所だった。その時ここが自分の夢を達成する為に探していた場所だと気づいた。

建築の専門学校に通い始めて三ヶ月。私は小さいころの憧れを思い出していた。キラキラしている家を見てただただ憧れ、ここに住んでみたいと夢見て、こんな家を作ってみたいと思った。その衝動だけで入った専門学校は決して甘くはない。授業は難しく理解することを諦めたくなったり、課題は上手くいかないことが多い。

それでも、今では挫けても応援してくれる人達がいる。周りに刺激し合える仲間がいる。だから私はここで目標をあげて日々精進したい。「住んでみたいと思ってもらえる家を自分の手で作る」と。

平成30年度　作文コンクール　応募校一覧（応募数・入選数）

〈中学校の部〉

番号	区市名	学校名	応募人数	入選者数
1	港区	高陵中学校	2	
2	中央区	晴海中学校	2	
3	新宿区	西早稲田中学校	4	2
4	文京区	第九中学校	4	1
5		音羽中学校	10	
6	墨田区	吾嬬立花中学校	2	2
7		寺島中学校	10	1
8		本所中学校	5	1
9		文化中学校	3	
10		竪川中学校	9	
11		両国中学校	10	
12	江東区	第二砂町中学校	2	
13		深川第七中学校	1	2
14	品川区	日野学園	3	
15	品川区	大森第一中学校	1	1
16	大田区	大森第六中学校	10	3
17		滝野川紅葉中学校	1	
18	北区	稲付中学校	10	1
19		南千住第二中学校	5	
20	荒川区	西新井中学校	8	
21	足立区	江南中学校	1	
22		第十中学校	3	
23	葛飾区	四つ木中学校	10	2
24	江戸川区	松江第五中学校	2	2
25	調布市	第八中学校	8	
26	町田市	真光寺中学校	8	
27	東京都	大泉高等学校附属中学校	10	2
28		桜修館中等教育学校	3	1
29	私立	愛国中学校	5	2
計			152	22

〈高等学校の部〉

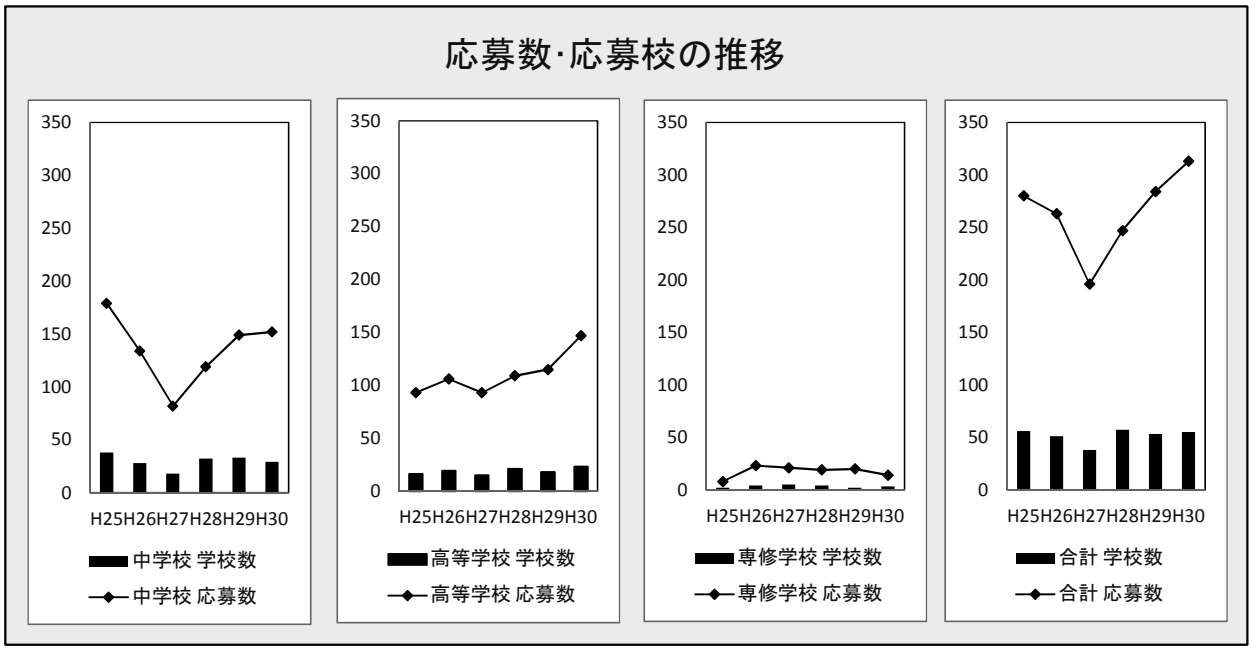
番号	学校名	応募人数	入選者数
1	東京都立農芸高等学校（全）	1	1
2	東京都立農芸高等学校（定）	7	
3	東京都立農業高等学校	10	2
4	東京都立瑞穂農芸高等学校	10	2
5	東京都立農産高等学校（全）	10	4
6	東京都立農産高等学校（定）	2	1
7	東京都立園芸高等学校	10	
8	東京都立大島高等学校	7	1
9	東京都立小金井工業高等学校	2	2
10	東京都立墨田工業高等学校	2	2
11	東京都立総合工科高等学校	1	
12	東京都立赤羽商業高等学校	8	
13	東京都立葛飾商業高等学校	10	
14	東京都立第三商業高等学校	9	
15	東京都立荒川商業高等学校	10	
16	東京都立忍岡高等学校	10	2
17	東京都立野津田高等学校	3	1
18	東京都立大島海洋国際高等学校	1	
19	愛国高等学校	8	4
20	日本工業大学駒場高等学校	6	2
21	岩倉高等学校	2	
22	蒲田女子高等学校	10	1
23	国際理容美容専門学校（美容高等科）	10	
計		147	22

〈専修学校の部〉

番号	学校名	応募人数	入選者数
1	青山製図専門学校	7	1
2	東京エアトラベル・ホテル専門学校	5	
3	中央工学校	2	1
計		14	2

〈まとめ〉

番号	区　　分	応募校数	応募人数	入選数
1	中 学 校	29	152	22
2	高等学校	23	147	22
3	専修学校	3	14	2
	総　　計	55	313	46



	中学校		高等学校		専修学校		合計	
	応募数	学校数	応募数	学校数	応募数	学校数	応募数	学校数
H25	179	38	93	16	8	2	280	56
H26	134	28	106	19	23	4	263	51
H27	82	18	93	15	21	5	196	38
H28	119	32	109	21	19	4	247	57
H29	149	33	115	18	20	2	284	53
H30	152	29	147	23	14	3	313	55

応募数の変化（前年度から見た変化）

校種	平成26年度(2014)		平成27年度(2015)		平成28年度(2016)		平成29年度(2017)		平成30年度（2018）		平均応募数
	応募数	増減	応募数	増減	応募数	増減	応募数	増減	応募数	増減	
中学校	159⇒179	13%増	134⇒82	39%減	82⇒119	45%増	119⇒149	25%増	149⇒152	2%増	127
高等学校	94⇒93	1%減	106⇒93	12%減	93⇒109	17%増	109⇒115	6%増	115⇒147	28%増	114
専修学校	21⇒8	62%減	23⇒21	9%減	21⇒19	11%減	19⇒20	5%増	20⇒14	30%減	19
総数	274⇒280	2%増	263⇒196	25%減	196⇒247	26%増	247⇒284	15%増	284⇒313	7%増	261

作文コンクール　入選数の集計

校種	平成26年度(2014)			平成27年度(2015)			平成28年度(2016)			平成29年度(2017)			平成30年度（2018）			平均%
	応募数	入選数	%	応募数	入選数	%	応募数	入選数	%	応募数	入選数	%	応募数	入選数	%	
中学校	134	19	14	82	13	16	119	18	15	149	23	15	149	23	15	15
高等学校	106	16	15	93	14	15	109	17	16	115	18	16	115	18	16	15
専修学校	23	5	22	21	3	14	19	3	16	20	4	20	20	4	20	18
総数	263	40	15	196	30	15	247	38	15	284	45	16	284	45	16	16
参考	選考要領は15%程度			選考要領は15%程度			選考要領は15%程度			選考要領は15%程度			選考要領は15%程度			

作文のテーマ別応募数一覧

平成30年度東京都産業教育振興会（都産振）募集要項

【作文の内容】

次に示す学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

・中学校における技術・家庭科の学習
・高等学校、専修学校、高等専門学校又は短期大学における専門教科の学習
・勤労に関わる体験的な学習

【テーマ】

作文の内容について、次のテーマ番号（①～⑩）から関係するものを選択して応募票の欄に記入する

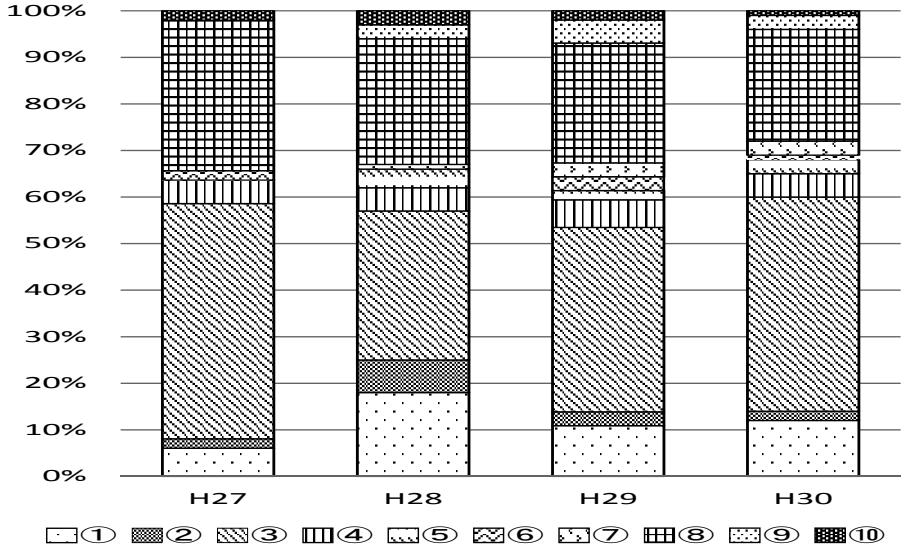
①授業等を通して学び得たこと
②インターンシップ（就業体験）や現場実習等によって学び得たこと
③職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと
④つくることの喜び、ものづくりの喜び
⑤働くことの喜び
⑥学習に対する心構え
⑦私の生きがい
⑧私の進路、将来の夢
⑨私の職業観
⑩その他

テーマ別選択肢とその割合

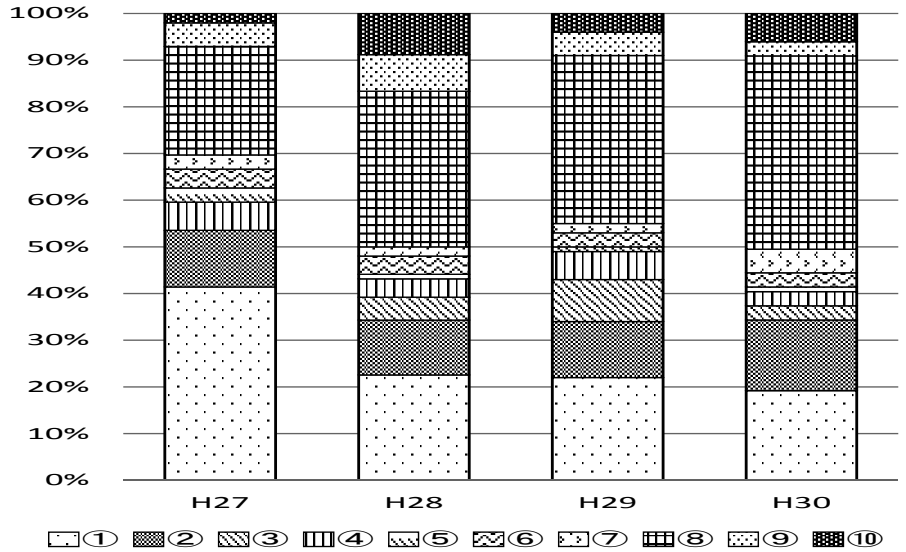
テーマ番号	中学校の部								高等学校の部							
	H27		H28		H29		H30		H27		H28		H29		H30	
	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%
①	5	6	21	18	17	11	19	12	38	41	25	23	26	22	29	19
②	2	2	8	7	4	3	3	2	11	12	13	12	14	12	23	15
③	41	50	38	32	63	40	70	46	0	0	5	5	11	9	5	3
④	4	5	6	5	9	6	7	5	6	6	4	4	7	6	5	3
⑤	0	0	5	4	3	2	5	3	3	3	1	1	1	1	1	1
⑥	2	2	0	0	4	3	1	1	4	4	4	4	4	3	5	3
⑦	0	0	1	1	4	3	5	3	3	3	2	2	2	2	7	5
⑧	26	32	32	27	41	26	36	24	21	23	38	34	43	36	61	41
⑨	0	0	4	3	8	5	5	3	5	5	9	8	6	5	4	3
⑩	2	2	4	3	3	2	2	1	2	2	10	9	5	4	9	6
合計	82	100	119	100	156	100	153	100	93	100	111	100	119	100	149	100

テーマ番号	専修学校の部							
	H27		H28		H29		H30	
	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%
①	3	14	4	21	7	35	2	14
②	1	5	0	0	1	5	4	29
③	2	10	0	0	1	5	0	0
④	0	0	0	0	0	0	0	0
⑤	0	0	1	5	2	10	0	0
⑥	1	5	1	5	1	5	0	0
⑦	1	5	0	0	4	20	0	0
⑧	11	52	8	42	2	10	8	57
⑨	2	10	4	21	2	10	0	0
⑩	0	0	1	5	0	0	0	0
合計	21	100	19	100	20	100	14	100

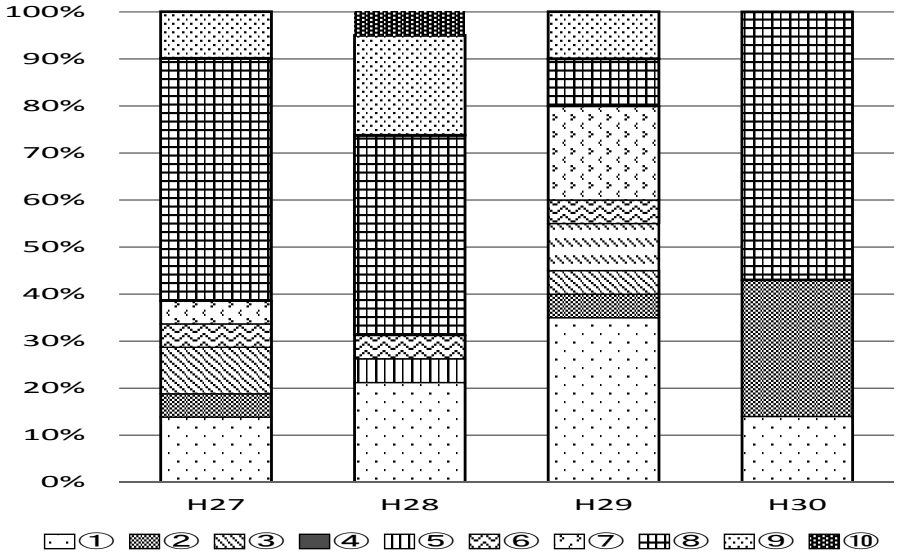
テーマ別選択割合【中学校】



テーマ別選択割合【高等学校】



テーマ別選択割合【専修学校】



平成三十年度　作文選考委員名簿　（順不同・敬称略）

中学校の部

委員長	墨田区立竪川中学校	校長	織部明広
委員	足立区立第十中学校	校長	早乙女雄一郎
委員	足立区立江南中学校	校長	宮下みどり
委員	荒川区立第五峡田小学校	校長	出井玲子
委員	町田市立真光寺中学校	校長	矢島加都美
委員	中央区立日本橋中学校	副校長	磯田耕司
委員	小平市立小平第六中学校	副校長	吉田功
委員	江戸川区立松江第五中学校	副校長	濱川一彦
委員	小平市立小平第五中学校	副校長	深井明美
委員	稲城市立稲城第二中学校	副校長	跡邊昭枝
委員	教育庁指導部義務教育指導課	統括指導主事	吉川泰弘
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	鈴木太郎

高等学校・専修学校の部

委員長	東京都立杉並工業高等学校	校長	高幹明
委員	東京都立瑞穂農芸高等学校	校長	小堀卓二
委員	東京都立荒川商業高等学校	校長	長江誠
委員	東京都立町田総合高等学校	校長	信岡新吾
委員	安部学院高等学校	校長	安部元彦
委員	東京都立翔陽高等学校	副校長	木田貴子
委員	国際理容美容専門学校	副校長	佐谷肇
委員	日本工業大学附属駒場高等学校	教諭	原田宏子
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	課長代理	宮路みち子
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	佐竹晶博

あとがき

平成30年度の作文コンクールは、中学校からは152編・29校、高等学校からは147編・23校、専修学校からは14編・3校の応募がありました。第一次選考、第二次選考を経て中学校22作品、高等学校22作品、専修学校2作品及びイラスト賞1作品の合計47作品の入選作品が決定されました。

入選者を対象に12月13日、全商会館において表彰式を挙行いたしました。そしてこの作文コンクール入選作品集「明日に生きる」第29号を発行することができました。

応募してくださった多くの中学校、高等学校、専修学校の生徒や学生の方々の皆さん、ご指導いただいた先生方、厳正かつ公平な審査をしていただいた選考委員の方々、さらにこの作文コンクール業務の運営等にご協力やご尽力いただいた多くの皆様方に心より感謝申し上げます。

この4年間の応募作品数は増加傾向にあります。中学校や高等学校、専修学校の会員各学校が本会の作文コンクールに積極的に取り組んで頂けた成果が出ているものと推察できます。しかし、専修学校については、会員校が増加傾向にある中、応募数が伸び悩んでいます。専修学校の応募数を増加させることが来年度に向けた課題と考えています。

作文の内容（テーマ）については、校種別に特徴があります。中学校では「職場体験やボランティア活動に関する内容」が最も多く選択されており、次いで「自分の進路や将来の夢に関する内容」が多くなっています。それに対して高等学校や専修学校では「進路や将来の夢に関する内容」が最も多く、次いで「インターンシップ（就業体験）や現場実習及び授業を通して学んだことに関する内容」が多数を占めています。

中学生は職場体験によって初めて仕事や社会に触れた印象やそれを通して自分の将来を考えるようになり、高等学校や専修学校に進学した生徒や学生は現に学んでいることを通して自分自身の在り方や生き方、自分の将来の夢や生きがいを模索する青年期の成長段階に即した内容の作品となっています。

生徒や学生が作文を通して自ら学ぶ意義を考え、将来の夢の実現のきっかけとなることが、学校生活の充実や進路を考える一助となれば幸いです。

なお、作文集の編成に当たり、募集要項のとおり作文中の誤字や脱字、人権上の配慮が必要な表現などについては、作文の趣旨を損なわない範囲で字句の削除や修正を行いましたことをご了解ください。

最後に、この作文集が会員校のみならず、広く教育機関等で活用されることを切に期待しております。

明日に生きる　第二十九号

―作文コンクール入選作品集―

平成三十一年三月一日　発行

発　行　東京都産業教育振興会

〒一六三―八〇〇一　東京都新宿区西新宿二―八―一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電　話　〇三―五三二〇―六七二九
ＦＡＸ　〇三―五三八八―一七二七

印　刷　株式会社小薬印刷所